

夫熟考民部正房之記錄享和元年四月從領主藤堂和泉守殿被達可上無足人由緒書之旨然先代刀禰正信八歲失父母親戚之怙恃至受他人之保護爾時家傳舊記等大概散亂而由緒不分明因啓其旨既而正信偶至姻族岡田彌治右衛門時方初秋屬曝古書得見川村氏之系圖一卷乃乞騰寫一通一則上藤堂家一則保存於家云々今茲以從白河帝所賜布留神宮之永旨補任并古過古帳潤色系圖一卷如左

敏達天皇四代皇孫葛城王左大臣攝朝臣諸兄十四代之後胤攝津守正氏曾娶大和十市山城主十市常陸助遠利妹產二男建武三年五月正氏與兄多聞兵衛攝正成其戰沒于兵庫湊川役後其妻將二子而歸十市氏而長男繼和田氏後居于十市八條里次男繼川村氏之後居于山邊河原城河村氏本姓物部也部靈神主額田王物部首之後裔而奕世爲石上神宮祭主也攝津守正氏十三代後胤至於河村大學頭橋正武之代從永祿年間正武與十市兵部大輔藤原遠忠共屬筒井氏所々有軍功從元和年中爲藤堂侯無足人累代石上布留神宮之神職ヲ兼帶ス

葛城王諸兄

正遠 從五位上

正成

楠攝津守正氏

敏達天皇曾孫左大臣葛城王諸兄十三代苗裔多聞兵衛正成曾弟建武三年五月廿五日於湊川與兄正成共戰死ス

行忠 和田新兵衛尉

高家 貞和五年於河內國四條噺與帶刀正行共討死

賢快 新登智

賢秀 新發意於四條噺討死

正清 河村又之丞

正勝 河村新吾 母興村平内

正員 新五郎 母十郎遠治女

正經 左近 母秋山修理之助姉

正次 九郎兵衛 母長谷部權頭女

正照 九郎右衛門 母土肥伊賀守姉

正晴 助大夫和田織部二男九郎右衛門養子

正盛 伊織 母多田太七郎師時女

正貞 鎌之助 母和田藤内女

正教 藤十郎 母加茂官人師員女

正時 新左衛門 母伊藤平馬女

正長 忠大夫 母庄司三男新左衛門養子

正忠 五郎次郎 母戶島主稅

大學頭橋正武

補攝津守正氏十四代後胤、母八十市兵部大夫藤原遠忠姊永祿年間與十市遠忠共屬筒井家元龜二年八月和州辰市於順慶與松永合戰、時十市ノ手ニ首級百六十ヲ獲タリ其中十四級ハ即チ正武ノ獲ナリ

天正二年夏河州飯盛山、遊佐河内守信教ヲ攻メ天正五年冬松永カ信貴山攻メ同多聞山攻メ等屢々軍功アリ文祿四年正月十二日死去葬于山邊額光寺法名天光院圓壽正武俊哲大居士

正秀 助治郎治部母和田織部女

天正十三年筒井藤四郎定次依豐太閤秀吉命、羽柴伊賀守侍從定次ト改伊賀一國并山城伊勢等ニ於テ二十萬石ヲ領ス同年二月十六日大和ヨリ從筒井伊賀國ニ移リ上野城ニ在住ス正秀筒井伊賀守ニ屬スト雖モ同族河村與六郎正之ト不和ニヨリ遂ニ大和ニ歸リ天正十三年二月豐太閤秀吉ノ弟大和納言秀長大和泉紀伊等百萬石ヲ領シ大和國郡山ニ在住ス筒井氏ノ麾下悉ク大和納言秀長ノ家士トナル正秀十市遠忠助忠行ト共ニ爲三秀長家士ニ文祿四年大和納言豐臣秀俊和州吉野郡十津川ニ於テ領遊ス歲十七歲秀俊ハ關シテ百萬石ノ代官トナル茲ニ於テ河村正秀暫ク獨立ス斷絶ス慶長元年春增田左衛門尉秀吉ノ命ニ依リ郡山ニ入城シテ百萬石ノ代官トナル茲ニ於テ河村正秀暫ク獨立ス其後慶長十五年筒井伊賀守定次酒色ニ溺レ政道不正遂ニ伊賀并山城伊勢等ノ領地悉ク沒收セラレ元和元年三月五日侍從定次同長子筒井宮内少輔順定生害ス侍從定次ハ五十四歲長子順定ハ十五歲也、元和四年筒井伊賀守ノ跡ヲ藤堂佐渡守高虎ニ賜フ則佐渡守高虎ハ上野城ニ在住シ長子宮内少輔高吉名取ニ在住シ國民ヲ撫育シ政道正シ筒井家勤仕ノ諸士等伊賀國ニ於テ新參ハ悉ク藤堂家ノ士トナリ古參ハ諸方ハ散在シ多クハ歸ニ入、大和國河村正秀ノ所領河山邊郡

原城藤家ノ領分ナル故ニ藤家侯無足人トナル累代石上布留社ノ神職ヲ兼務ス寛永十年五月十三日死去葬于額光寺證跡眞院定誓正秀了圓大居士

正種 通稱六右衛門

母興山長房娘 寛文六年三月神職補任…延寶元年七月拾七日死去葬于額光寺神職智門院多字正種天壽大居士

榮利 六右衛門

母山本宗右衛門姉正應二年九月十九日神職宣旨、號三刀彌補任先代ニ同シ享保十九年十二月三日死去葬于額光寺神職跡眞院關光空榮利大居士

正信 六右衛門

母岡田彌治右衛門娘 寛政二年五月十五日神職宣旨號右衛門尉補任先代ニ同シ文化元年十月十三日死去葬于額光寺神職西譽院紅月輝方大居士

正玄 通稱安兵衛再興松倉氏之名述一本

村ニ於テ分家シ松倉氏ト稱ス

女子 孝智貞比丘尼奉仕于山村王府

正則 藤右衛門 母太田又右衛門女文化十五年三月十五日神職補任號左京文政十年四月四日死去葬于額光寺神職西譽院祐齋淨岸大居士

正房 通稱普右衛門

藤右衛門同腹舎弟文政三年三月十六日宣旨號民部文久元年八月五日死去葬于額光寺神職傳光院淨譽正房清蓮大居士

女子 貞子松本左源太室

泰理 通稱六右衛門 母松本氏娘安政元年神職宣旨號右近

守目堂

丹波市町ノ大字ニ屬ス。一ニ森目堂ニ作ル。古、守部里ト稱シ名勝タリ。中世森氏ココニ居

ル。筒井諸記ニ「山邊郡森目堂 一守目堂ト 鎮守白山權現當村東ノ方ニ森氏城跡凡貳丁四方芝原ニ而

残り御座候其中ニ前城主様御石塔之由申傳候、五輪石塔壹基 碑銘云 禪慶 舟形石塔一 碑銘云 妙

西」トアレドモ事跡詳ナラズ。

萬葉集

たちばなを守部の里の門田早稻

苜る時過ぎぬ來じとすらしも

指柳

二階堂村ノ大字タリ。往時指柳淨光ナルモノココニ居レリ。國民郷士記ニ「山邊郡指柳淨光」

筒井諸記ニ「指柳村 文祿御 四百五十八石貳斗四升…當村者往古指柳淨光住村ナリ氏神小社之内

拜石建立之候五輪石壹ツ 碑銘ニ「妙珍」ト即チ是。淨光ノ事蹟亦詳ナラズ。

鉢立

同村ニ屬ス。今新莊ト稱ス。元祿ノ郷帳ニ「高五百六十二石三斗四升 古へ鉢立 新莊村」ト即チ

是。筒井諸記ニ「鉢立村…當村ニ鉢立大明神御影向之古跡在之」ト、鉢立明神何神ナルヲ詳

ニセズ。大和國名鑑舊軌圖 法隆寺 所藏 二ハ「鉢立ハ伊加志ノ本ト云崇神天皇四十三年九月九日ニ大神宮

ヲ奉遷此所ニ八年座ニ紀州名草ニ移玉フ」ト。天照大神ノ嚴櫃本宮ノ舊跡トスルモ據ナシ。

喜殿 丹波市町ノ大字ニ屬ス。一ニ木殿ニ作ル。古、奈良ヨリ泊瀬ニ達スル上津道 一名山ノ線路ニ

當リ名所タリ。

後拾遺和歌集

初瀬に参り侍りけるにきのとのといふ所に宿らむとし侍りけるに誰としりてかなどいひければこたえずとて

赤染衛門

名乗せば人知ぬべし名のらすば

木丸殿をいかで過ぎまし

庵治

二階堂村ノ大字タリ。日本書紀ニ「景行天皇次妃日向髮長大田根媛生日向襲津彦皇子是阿武

君之始祖也」姓氏録ニ「奄智造額田部湯坐連同祖○額田氏ハ天津彦根命ノ後ナリ」トアリ、此等ハ皆庵治ノ地名ニ取

レル氏ナルベシ。○一説ニ阿本君ハ長門國阿武郡ニ因メル氏姓ナリト 足利氏ノ季世本村ノ豪族ニ庵治肥前ナルモノアリ、襲津彦

ノ苗裔ト云フ。國民郷士記本ニ「庵治肥前景行天皇皇子日向襲津彦ハ庵治ノ祖也」ト即チ是。

福智堂

朝和村ノ大字ニ屬ス。足利氏ノ頃大乘院領九條莊下司ニ福智堂氏アリ。

大乘院領段錢日記曰「九條莊給主福智堂 五百文」御兵士引付曰「福智堂分九條莊給主下司

尋尊僧正應仁元年五月六日 記曰「福智堂代官并九條莊百姓等參申長屋莊與田地相亂事」

九條莊者再度□分算用則加長屋莊負田三丁内申入候云云

合四十三町九反一反切

此内

十二町五反

奄治辰巳殿

別府

長栖殿沙汰

長屋庄

負田

三町

合十八町三反

福智堂以下莊家殿沙汰

二十五町六反二反切

都合四十三町九段一反切

以上福智堂注進折紙

御兵士引付ニ福智堂定專アリ、文明元年四月長栖氏ト相論シ國中ノ武士各黨援スルアリテ相闘ヒシ事尋尊僧正記ニ見ユ。全文城上郡柳本縣ノ下ニ引ケリ 國民郷士記ニ福智堂宗閑アリ、定專ノ後カ。

佐保莊

朝和村ノ大字ニ屬ス。春日社文書ニ「奉去佐保殿役事、合二段者字柳原云々、在大和國山邊

郡南郷十三條四里十一坪内南邊 右於此地者件課役勤仕事自往古其例無之仍向後彌任舊例不

可有其役者也仍爲後日之沙汰勅子細之狀如件、文永八年二月日、立仁花押」ト見ユ。山邊

郡北郷ハ三島河原城方面ヲ稱シ、千島家ノ文書ニ據ル 南郷ハ今ノ朝和村地方ナレバ、所謂佐保殿ノ領地ハ即

チ是佐保莊ナルベシ。然ラバ佐保莊ハ佐保殿庄ノ略稱ナラン。應仁元年福智堂注進折紙ニ「サウト

ノ十二町五段」ト。以テ證スベシ。

藤井 丹波市町ノ大字タリ。往時藤井氏ココニ居ル。國民郷士記ニ「藤井性圓、藤井廣英、藤井佐兵衛」ト見ユ。染田天神千句ノ記録ニ據ルニ性圓・廣英ハ應永年間ノ郷士ナリ。應永三十年五月千句ノ卷ニ「橘も松も常磐の手向かな」廣英、同十六年五月「花久神の惠の深き哉藤井坊女一」又曰「仁興村……染田天神ニテ毎年連歌會執行而應永十五年ニ十三條ノ掟ヲ定其連判ニ仁興英算、藤井性圓、荻原英實」ト即チ是。

仁興 丹波市町ノ大字ニ屬ス。應永中仁興氏アリ、ココニ住ス。開書覺書ニ「仁興村上下有染田天神社ニテ毎年連歌會執行而應永十五年ニ十三條ノ掟ヲ定其連判ニ仁興英算、藤井性圓、荻原英實 餘ハ嘉吉三ニ仁興春福丸、寶徳三ニ春福丸、文明五年ニ仁興英勝、同十五年ニ仁興英祐、永正七年同次郎、永享二年春藤丸 常夏の花に久しき手向哉 同五年ニ仁興英 千代の松蔭も冷敷宮井哉 舊記考所如斯此所兒カ墓ト云所有」ト即チ是。國民郷士記ニモ「仁興春福丸、仁興英勝 文明年中ノ人 仁興英祐 文明五年 仁興英算 應永廿年 仁興次郎 正七年」トアレドモ事蹟詳ナラズ。

向淵 開書覺書ニ「向淵村南北山峯池アリ依而向淵南池一丁半四方程池、深不知溜水也廻ニ田地少々有深田也洪水、大ナル鮎流出ル沓緒池ト云北池在家近池荒蘆原トナル山岸ノ岩藥師有池堤ヲ飯降ノ石ト云有聖武御宇ニ此石上ニ飯降ノ池ト云此所ニ正定寺言一向寺、本願寺第三存覺上人諸國ニ一向

念佛觀ニ修行シ玉此所ノ庵ニテ年取玉善導法念親鸞ノ會一幅書置玉今ニ有……」ト。此文意ヲ推スニ兩池ノ淵南北ニ對在セシヲ以テ向淵ト名ヅケタルナリ。昔時二階堂院家東山内七ヶ村ヲ領シ之ヲ山内七庄ト稱ス。向淵莊其ノ一タリ。建曆以後菩提山ノ所領ニ屬ス。此時圓慶ナルモノ下司職トシテ之ヲ支配ス。事都介水分社舊記ニ見エタリ。今宇陀郡三本松ノ大字ニ屬ス。

牟山 都介野村ノ大字ニ屬ス。一ニ無山ニ作ル。二階堂領山内七莊ノ其ノ一ニシテ牟山莊ト稱ス。水分縁起ニ據ルニ建曆中紀久近之ガ式司タリ。保元平治中院主已講之ヲ沽却セシヨリ七莊散在トナリ。應仁ノ頃ハ大乘院領トナリ、三谷氏之ヲ支配ス。御兵士引付ニ「三谷分、賴田庄負所三分一、牟山莊負所三分一」ト是ナリ。郷士記ニ「牟山寛經 應永六年 牟山長實 應永廿年 同春藤丸 永享十二年」トアレドモ事蹟詳ナラズ。當處ニ山田氏アリ、多田家ノ與力ニシテ世々ココニ住シ、主家滅亡ノ後農民トナレルモノト云フ。事舊家控記ニ見ユ。錄シテ參考ニ供ス。

一高拾四石餘山林五ヶ所

無山村 山田善右衛門

代々當村住先祖ハ山田久太夫ト申ものにて多田村本名往古ハ福島庄宇佐比山之構ハ年曆承久比多田下野守々次郎信實迄居城及三百餘年候故年曆代々假名等相分不申尤私々十一代以前右久太夫儀多田次郎信實同七郎信雄二代之與力ニ御座候處天正之比信實駿州出陣之後歸陣無之城滅亡仕候ニ付當村ニ居住地侍ニ御座候處七代以前介四郎と申ものゝ民家ニ罷成代々庄屋役相勤申候尤無足人

奉願候年限貞享年中書上候通相分不申私儀不相替無足人相勤申候。

蘭生 都介野村ノ大字ニ屬ス。聞書覺書ニ「蘭生村昔ハ池地ニテ長谷川四十八井手溜池ニテ六月朔日四十八石地子并四十八荷ノ酒肴持來泊瀬、祭有之由申傳也。泊瀬社ト云禿良昔堤有之舊跡有池底三丁餘ニ五六丁程ノ澤ナリ次第田トナル堤長三丁餘今ハ並松ノ堤言也池ノ堤ニ女郎家馬塚トテ二塚有所ニ言傳ハ昔此堤ヲ築ニ宇陀郡東郷ノ娘馬乘嫁入ニ通ルヲ娘馬共ニ乍生堤ニ築籠ト云仍東郷カ池ト言今嫁入ハ不_レ通脇道ヲ通也……此村宮侍座法式永享四年ヨリ當年迄三百年カ間一年モ無_レ中絶……」ト見ユ。蘭生ハ其ノ地池址ニシテ蘭草ノ生ゼシヨリ名ヅケラレタルモノナラン。蘭生莊ハ亦二階堂領山内七莊ノ一ニシテ、建曆中文宗遷之ガ下司職タリ。水分縁起 蘭生氏ハ小山戸家ノ與力ナリ。

深川 針ヶ別所村ノ大字タリ。往時深川小橋等ノ郷士ココニ住ス。聞書覺書ニ「深川村ハ清見原王東往ニ深川別見ル是ハ應神天皇第五皇子去來穗真稚王子伊和島是ハ深川祖也深川幸壽九宗實、宗延、宗秀ト云名文明永享正長永正ノ連歌ノ卷ニ見エタリ夏山の木かげにふるき宮井かな千句ノ卷頭ニ何モ見エタリ、小橋ハ天兒屋根ヨリ十五代ト部雷大臣ノ子小橋命ト云錄足ノ八代ノ祖也又大寺過去帳ニモ見エタリ、和田喜兵衛モ有是ハ杉原和田了年號書留ス景行天皇ノ皇子襲小橋別命ハ三田小橋ノ祖也舊事記ニ見エタリ、兩説共未考」ト即チ是。國民郷士記ニモ「小橋小兵衛（備イ）景行皇子襲小橋別命ハ和

田喜左衛門、下深川宗秀、下深川宗延（永正六年）、同宗重（文明十三年）、同幸千代九（文明十一年）、深川喜左衛門、同右衛門尉、與力小橋平八」ト見ユルモ事蹟考フベカラズ。

大野 上大野・下大野・古大野ノ三處アリ、天武天皇紀ニ所謂菟田大野ハ即チ此處ナリ。中世本郡ニ隸セシガ、今ハ宇陀郡ニ屬シ三本松村ノ大字タリ。寶曆四年（四）小山戸組奥郷（十六）郷鑑帳（小山戸北）ニ本村ノ事ヲ記シテ

大野上村

- 一古市迄里數六里拾五町
- 一高拾五石（庄屋諸役掛免高）
- 一氏神（但社ハ下村ノ内ニ御座候）
- 一大野上村之内小名（ひゃかいと田野中南つぶら）
- 一池一ヶ所 字かんじやう
- 一寺貳ヶ所（一向宗安養寺眞言宗富村大野寺末寺正福寺）

大野下村

- 一古市迄里數六里二十八町
- 一高拾石（庄屋諸役掛免高）
- 一鎮守二社（龍神春日明神）
- 一石佛彌勒（但御丈四丈四尺）
- 一鼠喰岩
- 一大野下村之小名（海老坂西出東田向イ山）
- 一氏神（善如龍王末社夷木之本明神）
- 一寺二ヶ寺（眞言宗室生山家生寺末寺大野寺織通念佛宗森原村宗融寺末寺）
- 一御山廻り人 勝山理兵衛

山邊郡

トアリ、以テ當時ニ於ケル形勢ヲ見ルベシ。其ノ大野寺ハ大和志ニモ載セラレ「大野村有^ニ緣起文^ニ跋曰承元三年造……」ト見エ、彌勒石像ハ海内有名ノ物タリ。開書覺書ニ本村ニ係ル古老ノ口碑及ビ石像ノ由來ヲ載ス。錄シテ參考ニ供ス。

大野村ハ昔ハ宇陀郡ト云フ……此所ニ石彌勒有長五丈二寸承元二年ニ宋ヨリ次郎五郎六郎四郎ト云石工渡切付由此四人化人ニテ行方不知ト緣起ニ見エタリ。土御門院幸行成開眼供養行ル供奉人々侍女采マテ宸筆ニ被遊佛内ニ納玉フト雅緣ノ緣起ニ委細ニ見フ……

○北吉品ノ筆記 吉品ハ即チ開書覺書ノ作者ナリ、其ノ記スル所各省略アリ、故ニココニ挿入シテ以テ參考ニ供ス ニ「大野石彌勒ハ土御門ノ御宇承元元年ノ勅ニテ宋ノ二郎三郎五郎六郎刻也開眼ハ大僧正并三輪慶圓也屏風ケ浦ト云石面ノ高キ事九丈四尺尊像御長五丈四寸同三巳三月ニ一院御幸供養ハ小田原暖空上人也」トアリ。

皇居御跡ト云所、今ニ御所ト言亦言是ハ壬申亂ニ清見原天皇吉野ヲ落サセ玉宇陀阿紀ニ至登玉同宇加志御門ト云民長天井ニ隱坐夫ヨリ室生此村ニ渡御成玉所ト云 日本 民家ヲ毀松明而伊賀指テ落玉フ夜中ニ流矢來テ御背當ル長瀬矢川ト結馬鞆持ト云人馬休玉フト云供奉人々名字有何モ大和侍ノ先祖也……明應永正ノ比大野十人衆ト云テ地侍十人 石場知行ス南都東北院家百石領玉フ是ハ伊勢北畠殿ノ弟鳥屋尾吉十郎百石領是ハ多氣家老鳥屋尾石見カ弟ニテ院家ノ外叔父也外ハ勝山、^上山、杉山、窪田、高田、田野、綠川、氷室已上也、……

○北吉品記ニハ「大野ハ十人衆ト云テ十人シテ領ス杉山、上山、勝山、高田、東門院、北若、綠川、尾上、窪田、勝地是十人シテ領ス」ト見ユ。

如何ナル子細ニテカ鹿海治部一人ニ而領ス是伊勢侍也天正六正月狀治部跡式被官百姓共勝山ニ被下由ノ威狀ニ親兼判、勝山平右衛門取持スル同九年巳七月芳野宮内春清判勝山□右ニ通平右衛門ニ有リ……

○國民郷士記ニ「鹿野治部、田野和泉、峯玄敬、鳥屋尾吉十郎、勝山清助、勝山平右衛門、勝山太郎助 此内ニ芳野宮内少輔春勝山太郎助勝山感狀勝山家ニ有 窪田織部、氷室勘内、上山六郎、高田土佐」ト見ユ。田野・窪田・氷室・上山・高田ハ即チ大野十人衆ノ内ニシテ、寶曆郷鑑帳ニ所謂大野上村ノ勝山理兵衛ハ平右衛門ノ末孫ナルベシ。

長瀬 上中下長瀬及ビ髭無ヲ惣稱ス。モト山邊郡ニ屬セシヲ今宇陀郡ニ隸シ三本松村ノ大字タリ。寶曆ノ郷鑑帳ニ

髭 無 村

一古市々里數七里

一高拾石 庄屋諸役掛リ免高

一池壹ヶ所 字芝先

一髭無村ノ内 鎌倉三本松

一氏神 善如龍王社但中村ノ内ニ御座候

一三本松 往來筋之上ノ岸ニ御座候

山 邊 郡

一 寺壹ヶ寺 光明寺

長瀬上村

一 古市迄里數七里三町

一 上村之内小名 林出但瀬川方東ヲ申候
琴彈但瀬川方西ヲ申候

一 高三石八斗三升 袖高先年ヨリ朝鮮
人掛リ免リ申候

一 高拾石 庄屋諸役
斷リ免高

一 氏神 善如龍王社
但社中村ニ御座候

一 假屋宮 白鳥大明神社
琴彈ヶ原明神降給ト申候

一 琴彈石 鎌倉將軍西明寺此石ノ上ニ
テ琴ヲ彈給ト申習シ申候

一 琴彈之峯ノ松

一 寺壹ヶ寺 樂師寺

一 無足人壹人 能田儀右衛門

長瀬中村

一 古市迄里數七里五町

一 高拾石 庄屋諸役
掛リ免高

一 氏神社 善如龍王

一 鎮守八王子社

一 寺三ヶ寺 攝津國平野大念佛寺末寺
但長瀬五ヶ村宗旨判寺 頓光寺

眞言宗 長樂寺
正福寺

一 長瀬茶

一 無足人貳人 勝井助左衛門
勝井伊右衛門

長瀬下村

一 古市迄里數七里拾町

一 高拾石 庄屋諸役
掛リ免高

一 池壹ヶ所 字池ノ谷

一 氏神社 善如龍王
但中村ノ内ニ御座候

一 南岩

一 笛竹之藪

一 青葉之瀧

一 伊賀堺檜峠立石迄村端ヶ道法七町

一 寺二ヶ寺 中村長樂寺末寺 極樂院
吉祥院

トアリ、以テ當時ノ形勢ヲ概見スベシ。而シテ開書覺書ニ

長瀬村ニ琴引原ト言所有、琴引ノ禿同瀧、同鎌倉氏ノ民家有所ニ言、相州鎌倉時ノ事ナト申也日本

允恭四十年ニ從ニ新羅獻ニ樂器、此使琴引ニ到亦景行皇子日本武命東夷鎮伊吹山ノ蛇氣ニ當ル伊勢

能保野ニテ崩玉ヲ御子御妃等此所ニ下リ陵築玉ニハ白鳥ト化シ海原ニ飛去琴引原ニ留玉ヲ御子達

跡從爰ニ白鳥禿立玉白鳥社ト云、御子中足鏡別王此所ニ留玉ヲ鎌倉氏ト云菅田氏小澤氏石代モ子孫

ト云夫ヨリ河内舊市ニ飛去玉、陵社トモニ舊市ニ有橋姫東國ヶ從來基トテ坂東松ト云今ハ三本松ト

云フ此所勝井、大西、小島、乾、野田、横田、ト云地侍ノ家筋有レトモ儘不知

ト見ユ。此等ハ古老ノ傳聞ヲ直筆スルモノニシテ、現ニ三本松ノ琴彈原ニ白鳥祠ト稱シ日本武尊ノ

靈ヲ祭レルモノアリ。然レドモ琴彈原及ビ其ノ地ニ係ル事ハ當ニ高市・葛上地方ニアルベキハ國史

之ヲ立證セラレ、將タ長瀬ト云ヒ尾津ト云ヒ之ヲ當國ノ事跡ニ係クルモ、寛平熱田縁起ニ據ルニ伊

勢尾張ニアルベキナリ。偶々名稱ノ相同ジキヲ以テココニ附會セルモノナラン。而シテ地侍ノ大西・

乾ハ國民郷士記ニ「大西出雲、乾求馬」ト見エ、乾氏ハ今西澤ト稱シ世々無ニ住シ、勝井ハ長瀬中村ニ住シ、共ニ藤堂家ノ無足人タリ、舊家控帳ニ西澤・勝井氏ノ由緒書ヲ載ス。録シテ參考ニ供ス。

一高拾五石餘山林七拾町餘

罷無村
西澤文次郎 代々當村住

往古ハ長瀬六人衆ト申高六百六拾九石餘押領仕地頭ニ御座候其苗字ハ勝井、大西、乾、横田、小島、吉村六軒之内乾豊前ト申もの私祖ニ御座候元龜四年當國平均之砌々民家ニ罷成豊前々私迄十五代ニ罷成候夫々以前之儀ハ相知不申候親藤四郎當村莊屋退役之後……………天明五巳年々再勤當村庄屋綠川村大野上村庄屋後見目付庄屋相勤寛政年無足人奉願相勤罷在候。

一高十四石餘山林十三ヶ所

長瀬中村
勝井助左衛門

代々當村住先祖ハ年曆相知不申候得共長瀬地侍ハ勢州多氣北畑顯能之麾下ニ而苗字ハ勝井、大西、横田、小島、乾、吉村六人ニ而長瀬郷押領罷在其壹人勝井肥後ト申者私祖ニ而代々當村住居仕候諸國平均之砌々民家ニ罷成候尤 殿様御領下ニ罷成無足人奉願候年限等相知不申候私儀天明二寅年ヨリ當村庄屋無足人相勤罷在候。

石上郷

和名抄・姓氏録ニ此郷名ヲ載ス。已廢シ丹波市町ノ大字ニ石上ニニ磯上ニ作ルヲ存ス。近傍ニ布置アリ、言古ノ經有ニ通ズ、故ニ古語ニ伊其昔イソノカミフルノ冠辭ヲ加ヘ「イソノカミフル」ト稱セシヲ、遂ニ其ノ冠辭ヲ以テ布置地方ノ汎稱トナシ、更ニ石上ノ字ヲ假用セシモノナリ。石上神宮及ビ石上

朝臣、石上眞神田曾禰連等ノ姓氏皆コレニ取レリ。

續古今和歌集

元久二年三月廿六日新古今集の竟宴行はれけるによませ給ひける

後鳥羽院御製

石上ふるきをいまにならべこし

昔の跡をまたたづねつゝ

長屋郷 和名抄ニ見ユ。中世東大寺尊勝院領トナリ長屋莊ト稱ス。後、大乘院領ニ屬シ、仍テ其ノ稱ヲ襲ヒ小泉氏ヲシテ給主タラシム。東大寺續要録寺領章ニ「長屋庄田八町三段……………尊勝院根本所領……………山邊郡長屋庄」大乘院領段錢日記ニ「長屋莊小泉十三貫四百文」ト即チ是。已廢シ今朝和村ノ大字ニ長原アリ、是、長屋原ノ略稱ナリト云フ。長屋原ハ名勝タリ。

萬葉集

和銅三年庚戌春二月、藤原宮より寧樂宮に遷りましし時、御輿を長屋原に停めて故郷を廻り望みて御作歌
太上天皇御製

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば

君が邊は見えずかもあらむ

圖持統天皇ナリ。

星川郷

姓氏錄 大和皇別ニ「星川朝臣……武内宿禰之後也。敏達天皇御世。依居地。賜姓星川朝臣。」

古事記ニ「武内宿禰之子波多八代宿禰者……星川臣之祖也」ト見ユ。星川ノ氏稱ココニ因ル。大化後其ノ地ヲ立テ一郷トナス。和名抄ニ「山邊郡星川郷」ト即チ是ナリ。已廢シ方域詳ナラズ。大和志ニ「存吐山村」ト。何ニ據ルヲ知ラズ。

石成郷

和名抄ニ見ユ。已廢シ方域詳ナラズ。東大寺要錄ニ山邊郡石名庄アリ、同處カ。後考ヲ俟ツ。

山邊里

古、山邊縣アリ、山邊氏之ガ縣主タリ。山邊ハ即チ今ノ布留山以南一帯ノ山足ニ沿ヘル西部ノ地方ニシテ、コレニ係ル線路ヲ山邊路ト稱セリ。大化ノ改新縣邑ヲ廢シ國郡ヲ定ムルニ及ビ、山邊縣都祁國ヲ合セ一郡トナシ、山邊ヲ以テ之ニ命ゼシコト既ニ上ニ述ブルガ如ク、續日本紀ニ天平寶字中ニ山邊縣主男笠ナルモノアリテ大和介ニ任ゼラルト。蓋シ是、山邊縣主ノ苗裔ナルヲ以テ其ノ門地ニ依リ之ニ任ゼラレタルモノナルベシ。後、山邊ノ地高市郡川原寺ノ所領トナリ山邊莊ト稱ス。彼ノ寺長和二年ノ文書ニ

一山邊莊貳拾玖町參段貳佰捌步

山邊郡

九條五里三十一坪四十八步

三十三字那代田一町

三十二大墓田一町

三十四下開木一町

三十五坪一町

六里一坪一町

三坪一町

五坪一町

九傾田一町

十一山村一町

十三下坂門一町

十五尾見一町

十七蓼倉一町

二十一道祖一町

二十三坪一町

二十五一町

二十七南鳥居一町

二十九坪一町

三十六木屋一町

二坪一町

四坪一町

八桑本一町

十荒木

十二大屋庄一町

十四上山村一町

十六平田一町

二十坪一町

二十二坪一町

二十四上坂門一町

二十六北鳥居九段二百三十

二十八上神田八反四十

ト見ユ。但シ其ノ方域詳ナラズ。又春日社文書ニ

謹解 申賣買家地立券文事

合壹段者

在山邊郡十三條六里二十二坪内 辰巳角

四至 限東畔 限南畔
限西際日 限北際日

右件家地元者三宅仲子所領也而今依有要用於山路姉子賣與渡既畢於但本券者依有類地不能副渡仍爲後代亦注新券文之狀如件。

大治四年二月二十一日

賣人	三	宅花押
買人	山	路花押
一男	山	邊花押
在地刀欄	秦	花押

謹解 申賣買田島立券文事

合貳段者

在山邊郡十三條六里卅二坪之内 辰巳角

四至 限東畔 限南際日
限西際日 限北畔

右件田地元者山邊三郎之先祖相傳所領也而今依有要用限價直米柒斛於山路姉子賣渡既了仍爲後代立新券文之狀如件以解。

保延二年十二月十三日

賣人 山 邊花押

ト見ユ。山邊氏ハ所謂縣主ノ苗裔ナルベキモ爾後寥寥聞ユルナク、山邊ノ里ノミ古人ニ詠セラレ名勝タリ。明治廿一年町村制ヲ布カルルニ及ビ丹波市以下廿村ヲ合セ一村トナシ、名ヅクルニ山邊ヲ以テセシガ、後其ノ稱ヲ廢ス。

壬 二 集

霜凍る柴のさ枝やうるふらむ

煙ぞしめる山のべの里

山 川 附野道池瀑

布留山

丹波市町大字布留ノ東ニアリ、古詠多シ。其ノ北ヲ桃尾山ト云フ。

萬葉集

石上布留の山なる杉群の

思ひ過ぐべき君にあらなくに

卷 三

後撰和歌集

いそのかみふるの山べの櫻花

うゑけむ時を知る人ぞなき

都介山

都介野・福住ニ村ノ諸山ヲ汎稱ス。都祁山口社ハ都介野村大字小山戸ニアリ、續日本紀ニ「和

銅七年六月甲申開ニ大倭國都祁山之道」ト。道ハ今ノ樫本ヨリ福住ニ達スル路ナルベシ。

引手山

大和志ニ「在中村東呼曰龍王其山高聳人以爲望」ト。朝和村大字萱生中山ト藤井トノ間

ニアリ。

萬葉集

衾道を引手の山に妹を置きて

山路を行けば生けりともなし

卷 二

波多横山

萬葉集ニ見ユ。大和志ニ「仲峯山村一名波多横山」ト。仲峯山今波多野村ノ大字ニ屬ス。

新村名コレニ因ル。然レドモ本居氏ノ説ニハ波多横山ハ當國ニアラズシテ伊勢ニアリト、菅笠日記ニ

是ニ近シ。

萬葉集

十市皇女、伊勢神宮に參赴きし時、波多の横山の巖を見て吹茨刀自の作れる歌

河の上の五百箇磐群に草生さず

常にもがもな常處女にて

卷 一

間難野

都介野村大字輛田甲岡等ノ平坦部ヲ總稱ス。三代實錄ニ「元慶六年十二月廿一日己未勅……

大和國山邊郡都介野。天長承和。累代立制。今宜ニ加禁莫令縱獵。制拂禽鳥。許採草木」ト

即チ是。

布留野

丹波市町大字布留ト桃尾トノ間ニアリ、龍ケ馬場ト字ス。

貫之集

石上ふる野の道の草分けて

清水くみには又も歸らむ

山邊郡

波多野

大和志ニ據ルニ波多野村大字仲峯山ノ下ヲ謂フ。

萬葉集

霞ふり甚も風吹き寒き夜や

旗野に今夜吾が獨寐む

卷十

山邊道

古、奈良ヨリ布留ヲ過ギ長谷ニ達スル道路ヲ上津道ト云フ。即チ山邊道ナリ。崇神天皇ノ山

陵ヲ山邊道上陵トイヒ、景行天皇ノ山陵ヲ山邊道上陵トイフモ、位置其ノ線路ニ相接スルヲ以テノ

ミ、後世上街道開クルニ及ビ漸次荒廢ニ屬シ、今ハ樵蹊トナレリ。

布留川

藤井・仁興・長瀧・桃尾等ノ溪水相集リ、布留ニ至リ布留川ト稱ス。河原城・富堂・嘉幡ヲ

經、式下郡ニ入り初瀬川ニ注グ。

藻草

わきもこややすをいみいれ石の上

袖ふる川のたえんとおもへは

石上溝

朝和村大字長柄ニアリ、俗ニ布留寺井川ト稱ス。履中天皇紀ニ「四年……冬十月。掘石上

溝。トアル即チ是ナリト云フ。

石上池

齊明天皇紀ニ「六年……夏五月……又於石上池邊作須彌山。高如廟塔。以饗肅慎人四十

七人。ト見ユ。池ハ石上神宮縁起ニ「本社ノ少シ西ニ當テ池アリ之ヲ鏡池ト云フ所謂石上池是也」

ト云ヘルモノナルベシ。

布留瀑布

布留ノ桃尾山ニアリ、因テ桃尾瀧トモ稱ス。

古今和歌集

仁和の帝みこにおはしましける時にふるの瀧御覽じにおはしまして

歸り給ひけるに詠める

兼 藝 法 師

あかずして別るゝ涙瀧にそふ

水増るとやしもは見ゆらむ

續拾遺和歌集

今もまた行きても見ばや石の上

ふるの瀧つせ跡をたづねて

神社

大和坐大國魂神社 朝和村大字新泉山ニアリ、官幣大社タリ。

祭神

大國魂中央・八千戈右・御歲南ノ三神ヲ祭ル。鎮座ノ由緒ハ仁安中祝部大倭歲繁ガ國衙ノ命ニヨリ注進セシ大倭社注進狀ニ詳ナリ。ココニ其ノ全文ヲ掲グ。曰ク

謹考舊記曰。大倭神社在大和國山邊郡大倭邑。蓋出雲杵築大社之別宮也。傳聞。倭大國魂神者。大己貴神之荒魂。與和魂戮力一心。經營天下之地。建得大造之績。在大倭豐秋津國。守國家。因以號曰倭大國魂神。亦曰大地主神。以八尺瓊為神躰奉齋焉。

家牒曰。腋上池心宮御宇天皇孝元年秋七月甲寅朔。遷都於倭國葛城。丁卯天皇夢有一貴人。對立殿戶。自稱大己貴命。曰。我和魂自神代鎮三諸山。而助神器之昌建也。荒魂服王身在大殿內。而為寶基之衛護。即得神教。而天照大神。倭大國魂神。並祭於天皇大殿之內。

磯城瑞籬宮御宇天皇崇峻六年。百姓流離云云。共住不安。九月己酉朔乙丑。天照大神託豐鋤入姬命。祭於倭國笠縫邑。仍立磯城神籬。亦倭大國魂神託淳名城入姬命。祭於同國市磯邑。後改名曰大倭邑。然淳名城入姬。髮落體瘦而不能祭。

七年秋八月癸卯朔己酉。穗積臣遺祖大水口宿禰等。共同夢而奏言。昨夜夢有一貴人。誨曰。以市磯長尾市為倭大國魂神之主。必天下太平矣。天皇得夢辭。益歡於心。朕當榮樂。乃卜使物部連祖伊香色雄為神斑物者。吉之。冬十二月辛丑朔丁卯。命伊香色雄而。以物部八十手所作祭神之物。即以倭大倭直祖長尾市為祭。倭大國魂神之主。定神地神戶。於是疫病始息。國內漸謐。五穀既成。百姓饒之。

纏向珠城宮御宇天皇垂仁二十七年九月戊申朔甲子。以皇女倭姬命為御杖代。貢天照大神。倭姬命。隨神誨立宮於伊勢國渡遇五十鈴川上。奉遷焉。是時倭大國魂神。著大水口宿禰而誨之。曰。太初之時期。天照大神悉治高天原。皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神。我親治大地官者。言已訖焉云々。大地主神之號起于是時矣。

類聚國史曰。嘉祥三年冬十月乙巳朔辛亥。進大和國大國魂神階。授從二位。貞觀元年春正月戊午朔甲申。奉授大和國從二位大和國魂神從一位。

新國史曰。寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰。奉授五畿七道諸神三百四十社各位一階。官符云。大和國大和國魂神奉授正一位。

相殿二座

山邊郡

名神大。月次。相嘗。新嘗。

八千戈神。御歲神。

傳聞。八千戈神者。大己貴命以廣矛為杖。令撥平豐葦原中國之邪鬼。是時大己貴命號曰八千戈神。神代卷曰。大己貴命即以平國時所杖之廣矛上獻皇孫曰。吾以此矛有治功。皇孫若用此矛治國者。必當平安。今我當於百不足之八十限將隱去矣。言訖即躬被璫之八坂瓊而長隱常世鄉矣。此矛亦上古在天皇大殿之內。其藏齋為八千戈神之神軀。

御歲神者。守護禾穀神也。是以八握嚴稻為神軀。古語拾遺曰。大地主神營田之日。御年神獻白猪白馬白雞。奉謝無蝗蟲之災。年穀豐稔。故至今天子以白猪白馬白雞。每年祭歲神也。

別社

狹井神社。在大和國城上郡。

傳聞。狹井神者。大己貴命之荒魂大國魂神。即當社別社也。

日本書紀曰。倭大神著穗積臣云云。命大倭直長尾市宿禰令祭矣。所謂大市長岡岬。今狹井社地是也。

神名帳曰。大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社五座。

相殿神四座

大物主神。

傳聞。大物主神者。大己貴命之和魂也。神代卷曰。大己貴神問曰。汝是誰耶。對曰。吾是汝之幸魂。遊奇魂也。大己貴神曰。唯然云云三諸山。以上和魂荒魂。故即營宮彼處。使就而居。此大三輪之神也。此神之子。姫踏躡五十鈴命。神名帳曰。大和國城上郡大神大物主神社一座。名神大。相新嘗。

新嘗。姫踏躡五十鈴命。勢夜多々良比賣。溝檜姫攝津國三島之人。神名帳。其容姿麗美。故美和之大物主神。娶其人生子。名謂比賣多々良伊須々余理比賣。故謂大神御子也。其伊須々余理比賣之家。在狹井川之上。神倭伊波禮毘古天皇。幸行比賣之許。一宿御寢坐。後參入宮內。阿禮坐御子名神沼河耳命。綴婿。天皇。神名帳曰。大和國城上郡率川坐大神御子神社三座。

神代卷曰。事代主神。大己貴命子。化為八尋熊鰐。通三島溝檜姫。或云玉。檜姫。而生兒姫踏躡五十鈴姬命。是為神日本磐余彥天皇神武之后也。

養老令曰。季春鎮華祭。義解謂。大神狹井二祭也。在春華飛散之時。疫神分散而行病。為其鎮遇。必有此祭。故曰鎮華祭。集解曰。大神狹井二處祭。狹井者大神之龜御靈也。此祭之華散

之時。二神共散而行。疫已爲心。此故祭之。

延喜式曰。三月鎮花祭二座。大神社一座。狹井社一座。付祝等令供祭。又曰。不定日者。臨時擇日祭之。

大神祝部者大三輪君等也。狹井祝部。大倭直等也。

丹生川上神社一座。在同國吉野郡。

此神者。雨師神也。祈雨止霖。奉幣不遇當社。神名帳。大和國吉野郡丹生川上神社一座。名

大。月次。新嘗。

類聚國史曰。天平寶字七年夏五月庚午。奉幣帛于四畿內群神。其丹生河上神者。加黑毛馬。早

也。寶龜六年秋九月辛亥。遣使奉白馬及幣於丹生川上神。依霖雨也。弘仁九年夏四月丁酉。

遣使大和國吉野郡雨師神。奉授從五位下。以祈雨也云云。元慶元年夏六月庚午朔壬辰。授從

三位丹生川上雨師神正三位。

新國史曰。寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰。奉授五畿七道諸神三百四十社各位一階。官符曰。大

和國丹生川上雨師神。奉授從二位。

額正一位。授冠年號未考。

延喜式曰。凡奉幣丹生川上神者。大和社神主隨使向社奉之。是丹生川上神社。爲當社之別

宮也。

依國守貴命而。古來秘傳。參考國史家牒。述作者也。攝社末社。祭禮次第。別記載之。仍

注進狀如件。

仁安二丁亥年也。二月十三日

祝部大倭直歲繁 謹書

獻上

大倭大國魂トハ大己貴命ノ荒魂ヲ大倭豊秋津洲ノ靈トシテ祭レルモノニシテ、支那ニ所謂社稷ナリ。

古ハ諸國ニ國魂神アリ、延喜式神名帳ニ謂ユル尾張國中島郡尾張大國魂神社ハ尾張ノ國靈ニシテ、

遠江國磐田郡淡海國魂神社ハ遠江ノ國靈ナリ。其ノ他島大國魂社ノ壹岐島ニ於ケルガ如キモ亦此

類例ナリ。

故ニ一名ヲ大地主ト稱ス。其ノ御歲神ヲ配祀スルモ亦偶然ニアラザルナリ。孝昭天皇即位年初メテ

顯ハレ給ヒシヨリ、天照大神即天宗廟ノ主神ト共ニ禁中ニ奉齋セラレシヲ、崇神天皇神祇ヲ崇敬スルノ餘

其ノ瀆ヲ恐レ、天照大神ヲ豊鍬入姫ニ託シコレヲ笠縫ニ祭ラシムルト同時ニ、大國魂神ヲモ淳名城

入姫ヲシテコレヲ市磯邑ニ祭ラシメ給フ。是當社ノ創始ニシテ實ニ即位六年九月ナリ。時ニ市磯ニ

長尾市ナルモノアリ、椎根津彦ヨリ出ヅ。椎根津彦、神武天皇ヲ佐ケテ大功アリ、大倭國造ニ封ゼ

ラル。子孫相繼ギココニ住シ大倭直ヲ氏姓トナセリ。天皇ノ七年七月長尾市ヲ以テ神主ニ補シ、

爲ニ神地・神戸ヲ定メラル。是ヨリ市磯邑ヲ大倭大國魂ノ神號ニ因ミ更ニ大倭邑ト改ム。

注進狀ニ據ルニ古ハ大國魂神ハ八尺瓊、八千戈神ハ廣牙、御歲神ハ八握嚴稻ヲ以テ御正體トセラ

レシモ、中右記ニ「永久六年六月軒廊御ト、是大和國大和社去二月九日戊刻俄有火寶殿三字并御正

體燒亡也公長持來御ト形披、是之處神事不淨之上可有天下疫病口舌者○百餘抄云元永元年二月大和國大和社燒亡ト、永元元年二月

月即チ永久トアレバ此時燒失シタルモノカ。爾後御正體ニ關スルコト更ニ記・紀ニ所見ナシ。其ノ

後、徑尺餘ノ焦石中古神鏡燒失セシヨリ其ノ形ヲ模造シ、安置ヲ以テ御正體ト奉齋セラレシヲ、明治七年

三月十九日少宮司演島正誠コレヲ歎キ古傳ヲ折衷シ、玉一顆ヲ大國魂神、鏡一面ヲ御歲神、劍一口

ヲ八千戈神ノ御靈代トシテ朝廷ヨリ奉納セラレンコトヲ教部省ニ請願セラレシガ、同年六月二十三

日奈良縣權參事小池浩輔ヲ勅使トシテ奉鎮ノ祭典ヲ行ハセラル。其ノ宣命左ノ如シ。

天皇乃大命爾坐世掛卷母畏支大和爾坐須大國魂神社乃三柱乃大神乃大前爾奈良縣權參事正七位小

池浩輔乎使止爲且白給波久 白佐久

大神等乃御靈實乃亂世乃火災爾羅利給比志 今爾至 留萬 改造利奉留正支式乎行 波禮 過來志事乎甚久

恐美思保志食須是以且今年御使差且其式乎行波志 給布賀故爾大神等乃大靈波改造利奉留 此御靈代

爾遷利坐且平耶久安耶久彌遠長爾鎮利坐止白給布 天皇乃大命乎聞食 世 恐美恐美毛 白須

天皇乃大命爾坐世掛卷母畏支大和爾坐須大國魂神社乃三柱乃大神乃大前爾奈良縣權參事正七位小

池浩輔乎使止爲且白給波久 白佐久

大神等乃御實乎改正志奉利且御幣物奉出志齋祭良世給布事乎平耶久安耶久聞食且天皇乃朝廷乎始

且仕奉留百官人等四方國乃公民等爾至留萬 伊加志夜具波延乃如久立榮志米給止 白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美母白須

奉幣

日本書紀曰 持統天皇六年五月庚寅 遣使者奉幣于四所伊勢、大倭、住吉、紀伊、大神、告以

新宮……同年十一月甲申。遣大夫等奉新羅調於五社。伊勢、住吉、紀伊、大倭、菟名足。

三代實錄曰 貞觀元年九月八日庚申。大和國大和神……遣使奉幣。爲風雨祈焉。同十二年七

月廿二日壬申。是日。遣朝使築河內國堤。恐成功未畢。重有水害也。由是奉幣大和國三歲

神。大和神、廣瀨神、龍田神。祈無雨澇。以河內水源出自大和國也。

神戶

天平二年大倭國正稅帳正倉院藏曰 大倭神戶、稻玖伯肆拾玖束、租玖拾貳束、合、壹仟肆拾壹束、用壹

伯肆束、祭料四束 神嘗酒料百束 殘玖伯參拾漆束

新抄格勅符抄曰 大和神 三百廿七戶勝寶元十一月四日奉充三百廿七戶、不見奉充年、大和廿戶、神護元一奉充、尾張七戶、常陸百戶、出雲五十戶、武藏五十戶、安

戸百

又曰 大和神 十戸 大和國……已上本封之外

神戸ノ多キ當國諸社中其ノ右ニ出ヅルモノナク、隨テ社頭モ富盛ヲ極メシモ中世以降漸ク衰へ、所在ノ神戸・神地ハ武人ノ侵略スルトコロナリ、陵遲シテ徳川氏ノ世ニ至リ無祿ノ社トナレリ。

神職氏人

神主大和氏ハ推根津彦一名神知津彦又珍彦ヨリ出ヅ。推根津彦嘗テ神武天皇ノ御東征ニ從ヒ佐命ノ元勳タリ、因テ大倭國造ニ封ゼラル。子孫其ノ職ヲ襲ヒ大倭直後、宿禰ノ姓ヲ賜ハルヲ氏姓トス。

姓氏錄曰 大和宿禰。出自神知津彦命也。神日本磐余彦天皇。從日向地日向向大倭洲。到速吸門時。有漁人乘艇而至。天皇問曰。汝誰也。對曰。臣是國神。名字豆彦。聞天神子來。故以奉迎。即奉納皇船。以爲海導。仍號神知津彦一名推根津彦。能宣軍機之策。天皇嘉之。任大和國造。是大倭直始祖也。○日本書紀・古事記モ亦同之

崇神天皇即位七年長尾市ヲ以テ當社ノ神主ニ補ス。是神主補任ノ始ニシテ、即チ大倭國造ヲ兼帶セシナルベシ。當時祭政一途ノ制ナレバ神主ニシテ國造ヲ兼ヌルモノ往々有之、彼ノ出雲國造ノ杵築社ニ於ケル、紀國造ノ日前國懸社ニ於ケル、阿蘇ノ阿蘇社ニ於ケル皆其ノ類ナリ。仁徳天皇ノ世ニ倭直吾子籠アリ、日本書紀雄略天皇ノ時ニ大倭國造吾子籠宿禰アリ、同欽明天皇ノ朝ニ倭國造午

彦アリ、天武天皇ノ十年四月倭直龍麻呂ニ姓ヲ連ト賜ヒ、十四年六月更ニ忌寸ノ姓ヲ賜ハル。上續日本紀ニ「和銅七年二月丁酉、以從五位下大和忌寸五百足爲氏上、令主神祭。」ト。五百足ハ同紀養老七年十月ノ條ニ「大倭國造大倭忌寸五百足」ト見ユ。氏上ハ所謂族長ニシテ即チ國造家ノ嫡流ナリ。神祭ハ當社ノ祭祀ヲ謂ヘルノミ。大化ノ改新ニ國造ヲ廢シテ其ノ才幹事務ニ堪フルモノ郡領ニ任ゼラルルノ制ナルニモ拘ハラズ、爾後國造ノ補任往々國史ニ見ユルハ、蓋シ國造ハ神武天皇以來ノ舊號ニシテ世人ノ榮トスル所ナレバ、以テ名族ヲ表彰スルノ稱號トナセルモノナルベシ。續日本紀ニ「天平九年十一月壬辰宴群臣於中宮、散位正六位上大倭忌寸小東人。大外記從六位下大倭忌寸水守二人。賜姓宿禰。自餘族人連姓。爲有神宣也……十九年夏四月丁卯……大倭神主正六位上大倭宿禰水守、并授從五位下。」トアレバ、水守ハ神主ニシテ朝官ヲ帶ビシナリ。當時ノ制往々此ノ如キアリ、獨リ當社ノ神職ノミナラジ。東大寺文書ニ「天平十四年十一月城上郡大領正八位下大養德連友足」又續日本紀ニ「天平勝寶三年十月丁巳。大倭國城下郡人大倭連田長。古人等八人。賜姓宿禰。」トアルモ皆國造家ノ一族ナリ。同紀神護景雲三年十月ノ下ニ大和國造正四位下民部大輔大和宿禰長岡アリ、長岡ハ實ニ五百足ノ子ニシテ、刑名ノ學ニ通ジ兼テ文ヲ善クス。靈龜中入唐シ法律ヲ學ビ其ノ蘊奧ヲ極メテ歸朝ス。當時法令ヲ言フ者就テ疑義ヲ質スト。事、國史ニ詳ナリ。續日本後紀ニ「承和七年八月己未。大和國人

戸主從八位上大和宿禰吉繼。戸口掌侍從四位下大和宿禰館子等賜姓朝臣。貫附左京三條一坊。三代實錄ニ「貞觀五年八月十七日……大和國城下郡人正六位上大和宿禰永胤。典兵外從五位下大和宿禰繼子等。並改本居貫附右京職。」トアルモ亦其ノ氏人ナリ。寛平中ニ神主大和人成アリ。類聚三代格ニ見ユ、全文吉降テ仁安中ニ祝部大倭直藏繁アリ、即チ注進狀ノ作者ナリ。文中ニ大倭盛次アルモ五郡神事跡詳ナラズ。爾後神主家寧々聞ユルナシ。大和大明神記元祿十六年卜部兼敬著當社所藏ニ「上略粵祠官在原廣次頻年來求社緣於予」ト。當時既ニ大和氏退轉シ在原氏代テ奉仕セリ。廣次ハ即チ舊神主市磯氏ノ先人ナリト云フ。

攝末社

若宮增御子神社 祭神ハ社傳ニ猿田彦・天細女ノ二神ナリト云ヘドモ、一ニ地主神トモ曰フ、社記ニ本殿東南方有一社號麻須瀨故神則當社地主

雄略天皇御宇廿二年秋九月自伊勢國倭國山邊郡大和乃鏡乃山遷幸豐受大神宮五穀豐饒御鏡止御稗子御手持白馬乘賜則下津岩根宮柱太敷立鎮坐也一説曰日神子豐宇氣姬尊稻靈名益御子神亦曰延曆元年壬戌三月十八日午一點中山之高日嶺幸行供奉祝部朝御食夕御食羞膳奉備進亦奉。上白黑神酒常天童天女垂白雲臨遊松柏本奏微妙天樂云云然後明神御前爾異相之老翁涌出曰吾此地天降五百生也汝命住賜美宮處在號大和地又長之山トモ云吾前駟奉命……爾時老翁歡喜志且

御田起水於降舞給今之神宮寺殿坐猿田彦神是也爾時天童天女皆松杉葉以御田植舞廻則國土豐饒萬果一粒萬倍天水自在之祭始起因緣也……若宮益御子日神御子豐受姬尊稻靈神也……トアリテ、創祀ノ由來概ク信ズベカラザルモ、增御子ハ一粒萬倍ノ義ヲ取り即チ稻靈ヲ祭レルニ似タリ。姑ク疑ヲ存シ後考ヲ俟ツ。但シ今ノ四月一日ニ神輿中山ニ渡御增御子ノ神輿ノ式アルハ、蓋シ本文ノ如キ傳説ニ基ケルモノナラン。明治十年三月廿一日攝社ニ定メラル。

朝日神社 祭神朝日豐明姬命ナリ。和州五郡神社記ニ「高市郡東日女命神社……忌部氏記錄云東日女神社是則朝日豐明姬命也大倭盛次以謂稚日女命之隱號也乎」トアリ、此ト同神ナルベシ。三代實錄ニ「貞觀十一年九月廿八日壬午大和國正六位上朝日豐明姬拔田朝日豐明姬拔田神。并授從五位下。」ト見エ、モト大字佐保庄朝日ニアリシヲ明治八年二月十九日ココニ遷シ祭り、村民ノ請願同十年三月二十一日攝社ニ定メラル。

末社高靈神社 モト雨師明神ト稱ス。古老ノ口碑ニ吉野郡丹生川上神社今官幣大ハ當社ヲ移セルモノナリト云フ。案ズルニ仁安ノ注進狀ニ、吉野ノ丹生神社ヲ大和社別宮ノ部ニ收ムルノミナラズ、原文上ニ延喜式神祇ニ「凡奉幣丹生川上神者大和社神主隨使向社奉之丹生川上神社爲當社之別宮也」ト。以テ口碑ノ謬ユベカラザルヲ知ルベシ。丹生川上社ノ條參考スベシ末社中殊ニ崇重ノ社ニテ、古來早霖アル毎ニ村民必ズコレニ祈ル。

其ノ他ノ末社ハ元要記ニ「末社夷明神

三輪市白弘法大師勸請又云三輪夷神聖德太子勸請也

辨才天女

天河自

雨師明神

難陀政難陀之龍也

飯盛明神

奥津彦

三千七百餘所社

葉平明神

八王子

无寶殿

吉野伏拜石

荒神

无寶殿

トア

レドモ、今ハ夷

事代主神

辨才天

市杵島姫

雨師

即チ高麗

ノ三社ヲ存スルノミ。

雜事

尋尊僧正記曰 長祿三年四月一日今日大和社神事也宇治猿樂與大和猿樂立合所ナリ前大和猿樂者

自當寺當國ノ出入ヲ止了去年若宮ノ神事ニ致□□故也前他國猿樂ノ者無緩怠ノ間今日神事可

致其沙汰旨加下知了宇治猿樂事當門跡自專之故也衆中又不可有子細也二日大和神事無爲ニ

宇治猿樂致其沙汰旨福智堂ヨリ申入也先日長柄福智堂ニ成奉書故也

石上布留神宮

丹波市町大字布留ニアリ。延喜式

神名

ニ「石上坐布留御魂神社

名神大。月次。

」ト見

エ、今官幣大社タリ。

祭神并創立

古ハ布都御魂一ニ謂靈・天璽瑞寶・天津羽々斬ノ三靈ヲ祭ル。抑々布都御魂ハ一ニ佐士布都又

建布都・瓊布都ト稱シ、太古建瓊槌神中洲平定ノ際帶ブル所ノ靈劍ニシテ所謂十握劍是ナリ。

神武天皇御東征シ給フニ當リ熊野ノ高倉下ノ手ヲ經テ獻進セシガ、戡定ノ後、天璽瑞寶ト共ニ帝室

ノ鎮護トシテ宮中ニ奉齋セルヲ、宇麻志麻治命饒速日ノ子即チ物部氏ノ祖ノ忠誠ヲ嘉ミシ之ヲ托シ、爾後物部氏

ヲシテ其ノ祀典ヲ掌ラシメシモノナリ。石上神宮舊記舊神宮森氏所藏ニ曰ク「部靈橫刀者武甕槌神平國之

十握劍也稱其神氣曰「建布都神」ト是ナリ。

日本書紀神代卷曰 高皇產靈尊……………故以即配輕津主神令平葦原之中國……………

古事記概原宮段曰 其葦原中國者、專汝所言向之國故。汝建御雷神可降。爾答曰、僕雖不降、

專有平其國之橫刀可降。此刀名云佐士布都神、亦云雲布都神、亦名布都御魂、此刀者、坐石上神宮也。

日本書紀曰 神武天皇戊午年六月、天皇獨與皇子手研耳命、帥軍而進……………忽夜夢、天照

大神謂武甕槌神曰、夫葦原中國猶聞喧擾之響焉……………宜汝更往而征之。武甕槌神對曰、

雖予不行、而下予平國之劍、則國將自平矣。天照大神曰、諾……………時武甕槌神登謂高倉

下曰、予劍號曰部靈……………今當置汝庫裏、宜取而獻之天孫。高倉下曰唯唯而寤之……………

舊事紀曰……………天津彦火瓊杵尊孫磐余彦尊欲取天下、與師東征往々逆命者蜂起未伏中

州豪雄長髓彦本推饒速日尊兒宇麻志麻治命爲君奉焉。至此乃曰、天神之子豈有兩種乎。吾

不知有他、遂勒兵拒之……………宇麻志麻治命……………不據舅計帥軍歸順遂敗官軍、

朕嘉其忠節特加褒寵、授以神劍、答其大勳。凡厥神劍部靈劍刀、亦名布都主神魂刀亦云佐士

布都、亦云建布都、亦云豐布都神是矣。

天璽瑞寶ハ瀛津鏡・邊津鏡・八握劍・生玉死反玉・足玉・道反玉・蛇比禮・蜂比禮・品物、

比禮ナリ、通ジテ十種神寶ト稱ス。コレ物部氏ノ遠祖饒速日尊ノ天祖ヨリ賜ハリタルモノニ係リ、其ノ用法ハ一二三……十ノ神語ヲ唱ヘ、コレヲ振ヒ魂ヲ鎮メ壽ヲ保タシムルモノ即チ魂鎮祭ニ供スル神器ナリ。宇麻志麻治ノ歸順スルニ及ビ之ヲ朝廷ニ獻ジテ宮中ニ奉齋シ、天孫ノ御爲ニ鎮魂法ヲ修メ寶算ノ長久ヲ祈リシモノニシテコレヲ振御靈ト稱ス。斯ク稱スルハ即チ神器ヲ振ヒ搖ガシテ魂ヲ鎮メシムルノ靈物ナルヲ以テナリ。布留ノ社名實ニココニ起ル。石上神宮舊記ニ「天神御子火明櫛玉饒速日尊自天受來之十種神器也稱其神氣曰布留御魂神」ト是ナリ。

舊事記曰 正哉吾勝勝速日天押穗耳尊奏曰僕欲將降、裝束之間所生之兒、○饒速日尊ナリ以此可降矣、詔而許之、天神御祖詔授天璽瑞寶十種、謂瀛津鏡一、邊津鏡一、八握劍一、生玉一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比禮一、是也。天神御祖教詔曰、若有痛處者令茲十寶、謂一二三四五六七八九十、而布留部由良由止布留部、如此爲之者死人反生矣。是則所謂布留之言本矣……饒速日尊稟天神御祖詔乘天磐船而天降坐於河內國河上、峰則遷坐於大倭國鳥見白庭山……又曰宇麻志麻治命先獻天瑞寶亦豎神楯以齋矣謂五十櫛亦云今木刺繞於布都主劍大神奉齋殿內……

而シテ此布都御魂ト布留御魂トハ神武天皇ヨリ崇神天皇マデ御十代ノ間ハ宮中ニ安置シ、物部氏之ヲ奉齋セシガ、天皇ノ世ニ至リ神威ヲ瀆サンコトヲ恐レ、物部ノ伊香色雄命ニ詔シテ別ニコレヲ移シ祭ラシメ、之ヲ石上振神宮ト稱ス。「イソノカミ」ハ其昔、伊ハ發語ニテ「フル」古ノ義ニ取ルノ冠辭ナリ。是當社ノ創始ニシテ即チ崇神天皇即位七年十二月ニ係レリ。所謂高庭トハ地ヲ深ク穿リ石窟ヲ作り二種ノ靈寶ヲ奉藏シ、其ノ上ニ高ク土ヲ盛レルヲ以テ名ヅケタルモノニシテ、古ハコレニ杉ヲ栽エ以テ神木トナシ劍ヲ倒植スルニ象レリ。有名ナル振之神楯ハ實ニ之ヲ謂ヘルモノナリ。此地古來禁足ト稱シ今尙一小時ヲ社殿ノ後ニ存セリ。石上神宮舊記ニ

畝傍橿原宮御宇天皇御世元年以泊乎磯城瑞籬宮御宇天皇御世七年凡五百七十歲之間、布都御魂橫刀、天璽瑞寶十種、並祭天皇大殿之内也七年季冬辛巳丁卯物部連祖伊香色雄命奉勅奉遷于石上邑、其藏齋號曰石上神社、布留御魂神鎮坐于此處爾來號其地曰石上布留高庭之地、故因名之曰石上振神宮、又曰石上神宮、石上邑之地底以磐石爲境作地石窟、以布都御魂橫刀左坐爲東方天璽瑞寶十種右坐爲西方同其藏焉其上高築地、謂諸於高庭之地、高庭之地當神器之上、設磐座立神籬、並祭建布都大神布留御魂神也、以建布都大神奉齋東座爲第一、焉布留御魂神奉齋西座爲第二、謂之靈時、而無神殿、布都御魂橫刀之鋒向天而頭俗云都加植地、所謂十握劍倒植於地、是也高庭之地栽相爲神木、似劍倒植之象矣、所謂石上振神楯是也、ト即チ是ナリ。

舊事記曰 伊香色雄命此命春日宮御宇天皇○開化天皇ナリ御世以爲大臣、磯城瑞籬宮御宇天皇御世詔

大臣爲班神物定天社國社。以物部八十手所作祭神物。祭八十萬群神之時。遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑。則天祖授饒速日尊。自天受來天璽瑞寶同共藏齋號曰石上大神。以爲國家亦爲氏神崇祠爲鎮。則皇后大臣奉齋神宮。

顯宗天皇紀曰 石上振之神相。伐本截末。……

新古今和歌集

深緑あらしひかねていかならむ

まなく時雨のふるの神杉

同

初雪のふるの神杉埋もれて

しめゆふ野邊は冬ごもりけり

是ヨリ先、素戔鳴尊ノ彼ノ八岐大蛇ヲ斬リシテフ十握劍一名天羽々斬又蛇之ハ備前國赤坂郡ニ奉齋セ

ラレシガ、仁徳天皇五十六年十月ニ至リ布都氏ノ祖市川臣ニ詔シテコレヲ高庭ノ地ニ移シ祭ラシム。

是ニ至テ神宮ハ中央ニ布留御魂、右ニ天羽々斬、左ニ十種神寶ヲ祭ル事トナリヌ。石上神宮舊記ニ

曰ク 素戔烏尊斬蛇之十握劍名曰天羽々斬亦曰蛇之龜正稱其神氣曰布都斯魂神 天羽々斬自

神代之昔至子難波高津宮御宇五十六年。在吉備神部許今備前之國焉五十六年孟冬己巳朔己酉

物部首市川臣布留連祖奉勅遷加布都斯魂神社於石上振神宮高庭之地。高庭之地底石窟之内以天羽

々斬加藏于布都御魂橫刀左坐爲東是布都御魂橫刀爲中央之故當其神器之上設靈時并祭

布都斯魂神爲加祭之神

ト是ナリ。

古語拾遺曰 古語大蛇謂之羽言斬蛇也

舊事記曰 素戔烏尊其斬蛇之劍今則在吉備神部許至出雲簸之河上是也。

延喜式神名帳曰 備前國赤坂郡石上布都之魂神社

姓氏錄曰 布留宿禰……大鷦鷯德仁天皇御世。幸倭賀布都努斯神社於石上御布留村高庭之地。

以市川臣爲神主……

石上神宮緣起曰 本社ノ後ニ禁足ト名付ル處アリ廻ラスニ石離ヲ以テス社氏說ニ神劍部靈々崇ア

ルニ仍テ石櫃ニ安鎮シ此處ニ齋埋ス其御影ヲ新ニ鑄造シテ錦袋ニ納メ本殿ニ齋ヒ奉ル今祭祀ノ日

奉渡神劍是也

夫高庭地即チ禁足ノ域内ニハ布都御魂・天羽々斬・十種神寶ノ三種ヲ齋藏シテ之ヲ布留神宮ノ正體トナシ、別ニ寶殿ノ設ケナカリシコトハ以上引ク所ノ古記録ニ據リテ自ラ瞭焉タリ。故ニ明治七年

大宮司菅政友コレヲ記録口碑ニ徴シ、御正體ハ必ズ禁足地ニ齋藏シアルモノト認メ、教部省ニ請願シコレヲ發掘セルニ果シテ寶劍一口及ビ古器物若干ヲ獲タリ。其ノ發掘ノ顛末ハ當時主務省ニ報告セル公文ニ詳ナリ。

當社拜殿後禁足地之正中ニ高サ二尺餘之封土有之社傳ニハ部靈神劍崇有ルニ付石櫃ニ納メ此中ニ鎮安致シ候趣^(傳)尤先年盜賊之爲メニ聊カ發掘セラレ管玉十五箇出候由一體墓陵トハ違ヒ神社ニハ如何敷事之樣被存候間右社傳之虛實ハ難計候へ共一應相發キ傳説之如クニモ候ハ、其中ヨリ出候物品ハ正殿ニ遷シ奉り度萬一微スベキモノモ無之候ハ、地所ハ往元ノ通り取計ラヒ置キ可申此段奉伺候也

明治七年二月廿日

石上神社大宮司兼大講義菅政友

教部大輔宍戶璣殿

書面之趣聞屆候條地方官へ申立立合ノ上可取計事

明治七年二月二十七日

兼テ伺濟相成候當社禁足地之儀本月廿日午前七時ヨリ地方官立會尤場所柄ニ付一社人員而已ニテ他人ヲ不交發掘候事件左記ニ大略申上候嘗テ入御聽候一封土ハ拜殿後正中壹丈許リ後ニテ高サ二尺八寸餘中央ニカナメノ木壹株有之^{太テ貳尺五寸埋メ候テ植シモノナラン}右平地ヨリ下凡壹尺餘ニ至レバ一面ニ瓦ヲ

以テ之ヲ蓋ヒ壹間半四方許モ可有之歟尺或尺餘ノ石ヲ積重テ境界ヲ成シ候様子ニ御座候扱平地三尺許リ下ニ綠色ノ曲玉管玉等甚ダ多ク土石ニ交リ有之殊ニ正中ヨリ五尺許西側ニ梓一柄鋒端ヲ南ニ爲シ置ルサマナレドモ四ツニ折レ柄モ金物ノ所而已朽殘リ是亦三ツニ折有之又東側正中ヲ距ル事凡三尺許ノ地ニ鋒端東ニ向ヒ劍一振出現此ハ折損シ候所モ無之其他刀劍樣之物一切無之候間傳説ノ如ク此劍部靈ナルコト疑フベキニアラネバ不取敢假ニ神庫へ鎮安仕置候尤神劍ヲ正中ニ不埋ハ蓋深キ意アリシナランカ其ハ應仁已來武人橫暴神社佛寺爲之破壞セラル、ハ其數ヲ不知既ニ當社モ永祿十一年尾張武士亂入拜殿寶藏處々破壞セラレ寶物記錄從テ散逸セシ由舊記ニ有之殊ニ拜殿而已ニテ神體ヲ納ムベキ樣ナキ社ナレバ畢竟右等ノ害ヲ防ギ候爲メ神劍ヲ埋メ藏ルニモ亦深ク意ヲ用候事可有之歟右土中ヨリ出候物品者別紙目錄圖面相添此段奉申上候也

明治七年八月廿四日

石上神宮

少宮司 今 園 國 映

大宮司 菅 政 友

教部大輔宍戶璣殿

目 録

一神 劍 壹挺

一鋒 折 四ツ

一同柄折 四ツ

山 邊 郡

- 一 青玉勾玉 十一
- 一 青色管玉 二百五十一
- 一 九 玉 九
- 一 綠色 一
- 一 一角管玉 一
- 一 鈴 一
- 一 一

是ニ於テ發掘ノ神劍ヲ以テ布都御魂ノ正體トナサンコトヲ主務省ニ請願シ、其ノ允可ヲ得明治九年五月一日奉鎮祭ヲ執行セラレタリ。案ズルニ、古、布都御魂・天羽々斬ノ二口ヲ高庭地ニ埋藏セシコト既ニ上ニ述ブル如シ。而シテ發掘ノ際劍一口鋒ノ折レ一柄ヲ獲タリト、所謂鋒ト認メシモノハ彼ノ羽々斬ナリシカ。後考ヲ俟ツ。

社職 氏人

祭主 宇麻志麻治命宮中ニ於テ祭祀ヲ掌リ、伊香色雄命更ニココニ鎮祭セシヨリ物部ノ氏上常ニ當社ノ長官ヲ兼帶ス。事、石上振神宮略抄ニ載スル系譜ニ見ユ。曰ク

祭主首石上朝臣系譜

石上朝臣ハ物部連同祖ニテ櫛玉饒速日命之子宇麻志麻治命ヨリ出タリ人皇第一代神武天皇御世勅シテ布都御魂橫刀天璽瑞寶ヲ天皇ノ大殿内ニ並祭奉テ祭大神主首ニ補ヨリ世ハ九代年ハ六百許宇麻志麻治命ノ子孫悉ク祭主首ニ補ス十代崇神天皇御宇々麻志麻治命五世孫伊香色雄命ニ勅シテ件ノ二品神寶振神宮ニ藏メ祭奉リ祭主首ニ補ス十一代垂仁天皇御世伊香色雄命子等兒祭主首大新川命弟祭主首十市根連始テ物部連之氏姓ヲ賜フ以來物部連ノ氏人等代々歷年ノ間ニ祭主首ニ補

ス四十代天武天皇御世ニ十市根大連ノ八世孫祭主首物部連麻呂ニ姓ヲ賜フ物部朝臣ト申ス四十一代持統天皇ノ御世物部朝臣麻呂ハ石上郷振神宮ノ西ニ宅居ス因テ改テ石上朝臣ノ氏姓ヲ賜フテ直廣壹ノ冠ヲ授ク和銅年中ニ正二位ヲ授テ左大臣ニ昇給フ神護景雲年中祭主首從三位石上朝臣宅嗣左大臣麻呂ノ孫中納言乙麻呂ノ子也ノ請願ニ依テ物部朝臣ノ舊ニ復ス然後勅シテ石上朝臣ニ改メシムトアリ。降テ白河天皇當社ニ行幸シ給ヒシ時、寬治年中祭主首石上朝臣名ヲ外從五位下ニ叙セラレシコト石上振神宮略抄ニ見ユ。爾後石上氏聞ユルナシ。

神主 仁德天皇ノ世ニ市川臣天羽々斬劍ヲ高庭ノ地ニ奉齋シ、因テ神主ニ補セラレシヨリ爾來布留氏其ノ職ヲ襲フ。姓氏錄但シ當社舊記ニ所引ニ據ルニ

布留宿禰。柿本朝臣同祖。天足彦國押人命七世孫米餅搗大使主命之後也。男木事命男市川臣。大鷓鴣天皇御世。幸倭賀。布都努斯神社於石上郷布留村高庭之地。以市川臣爲神主。四世孫額田臣。武藏臣。齊明天皇御世。宗我蝦夷大臣號武藏臣。曰物部首並神主首。因茲失臣姓爲物部首。武藏臣男正五位上日向。依社地名改布留連姓。日向三世孫邑智等天武天皇御世改賜布留宿禰姓也。

ト是ナリ。コレヲ石上振神宮抄ニ載スル神主布留宿禰系譜ニハ

布留宿禰ハ春日臣ト同祖ニテ人皇五代孝昭天皇ノ子天足彦國押人命ヨリ出タリ天足彦國押人命七

世孫米餅搗大使主命 大矢田宿禰ノ子也ノ長子花小使主命ハ春日臣小野臣ノ始祖也次二子木事命トハ大宅臣
 柿本臣ノ始祖也三子市川臣ハ十三代成務天皇ノ御世ニ石上振神ノ乞言ニ依テ物部連ニ代テ神宮ノ
 神寶ヲ治シメ神府ノ典鑰ニ補ス仍テ物部首ノ氏姓ヲ賜フ十七代仁德天皇御宇市川臣ニ勅シテ吉備
 神宮ニ祭ル天羽々斬劍ヲ石上振神宮ニ遷シ藏メ加ヘ祭ル云云于時市川臣ヲ振神宮ノ神主ニ補ス神
 主職ノ起也三十六代皇極天皇御世ニ大臣蘇我蝦夷宿禰 俗云武藏大臣母太媛ト申ス物部弓削大連ノ妹也弓
 削大連滅亡之後ニ太媛祭首ニ補ス蝦夷大臣ノ次男敏傍宿禰ヲ物部大臣ト號シ祖母ノ時依テ威ヲ世
 ニ取リシヨリ物部族神主家等モ蘇我カ家ノ僕トナル粵市川臣ノ四世孫神主物部首額田臣ノ武藏臣
 ノ姓名ヲ失フ故ニ天皇額田臣男物部首日向カ爲ニ社地ノ名ニ依テ布留連ノ氏姓ヲ賜フ四十代天武
 天皇ノ御世ニ日向カ三世孫邑智ニ姓ヲ賜フテ布留宿禰ト云以來代々神主職ニ補スコト延曆年中ニ
 及歟

トアリテ、姓氏錄ニ載スル所ヨリ稍、精確ナルヲ覺ユ、以テ史ノ缺文ヲ補フニ足レリ。蓋シ是、布留
 氏相承ノ傳説ナルベシ。

降テ寛治中白河天皇當社ニ行幸シ、神主布留宿禰 名ニ外從五位下ヲ授ケ給フコト石上振神宮略抄
 ニ見ユ。戰國ノ頃ニ至リ兵馬ヲ蓄ヘ干戈ニ從事シ大和武士ト稱ス。郷土記ニ「山邊郡布留神主森右
 馬 字麻志麻治命ヨリ五世孫伊香色雄命布留社ヲ建ツ神寶ヲ納ム其子大新川十市根ニ物部ノ姓ヲ垂仁天皇ヨリ玉リ三世ノ
 孫ハ布留久留ト云フ又五世ノ孫物部ノ島古ノ子麻呂モ石上ノ姓ヲ賜リ〇神主ノ起リハ市川朝臣後布留朝臣ノ姓ヲ賜フ」

ト即チ是ナリ。今當社主典森氏 舊神主ハ其ノ後裔ナリト云フ。

典 鑑 垂仁天皇ノ時五十瓊敷命當社ノ神寶ヲ掌リ尋デ其ノ職ヲ妹大中姫ニ讓ル。大中姫コレヲ物部
 十市根ニ讓リシヨリ子孫其ノ職ヲ襲ヒ之ヲ典鑑ト稱ス、即チ神庫ノ管鑰ヲ典ルノ職ナリ。石上振神
 宮略抄ニ載スル系譜ニ

神庫典鑰物部連略系譜

垂仁天皇御世皇子五十瓊敷命茅渟菟砥ノ川上宮ニ居シテ劔一千口ヲ作ラシム名ケテ裸伴ト云フ石
 上振神宮ノ神府ニ藏給フ其後五十瓊命ニ勅シテ神寶ヲ掌ラシム仍テ當宮ニ坐ス後大中姫ニ授ケ給
 テ神府ノ典鑰ニ補ス今ニ至テ物部連等カ神宮神府ヲ治令縁ナリ。

ト見ユ。文章粗拙ニシテ意義通暢セズト雖モ、之ヲ國史ニ對照スルニ、即チ十市根連大中姫ノ讓ヲ受
 ケ當社ノ神寶ヲ掌リシ縁由ヲ記セルモノナリ。 國史ノ原文神庫下ニ引ケリ、參考スベシ 寛治年中白河天皇行幸ノトキ、典
 鑰物部連 名ニ外從五位下ヲ授ケ給ヒシコト略抄ニ見ユ。而シテ當社ニ古來刀禰或ハ年預ト稱シテ祭
 事ニ預リ管鑰ヲ掌ルモノ數戸アリ、皆物部ノ氏人ニシテコレヲ布留社物部氏人年預社務典鑰職ト公
 稱ス。維新ノ際此等ノ人々ヨリ族籍ニ關シ官府ニ請願セルコトアリ、左ニ文書ヲ掲ゲ以テ參考ニ供ス。

奉願口上書

私 共

先祖物部連儀者
 神武天皇之御宇ヨリ 天武天皇之御宇頃迄代々朝廷に奉仕候而石上布留社御靈劍大神之齋主并十種瑞寶ノ神庫神寶を掌リ罷在候處 天武天皇之御宇物部麻呂石上朝臣姓を賜リ候以後専ら 朝廷に奉仕候ニ付齋主之子孫物部氏等年預を以神庫典論相勸社頭支配仕居 白河天皇當社に御幸之節補任印被爲下置候以後右御印ヲ以テ代々補任罷在候處天正中松永家一條ニ付織田信長公神領被沒收候以後無祿ニ相成神主嗣宜ハ勿論典論年預共無據村方人別帳ニ相加リ代々典論年預相勸候者共ニ御座候今般

王政 御復古詞人とも神祇官附屬ニ被
 仰出難有仕合ニ奉存候ニ付而ハ先達而私共之外神主嗣宜共ハ村方人別帳相除往古之通り布留社人別ニ相成申度段
 御總督府様江奉願上候處御閉届ニ相成私共モ引續同様御願申上候……典論年預私共之儀者別紙證書寫シ奉備 御高覽候通却而社頭向萬事を掌リ候神役旁以村方人別相除キ向後布留社人別ニ相成申度左候ハ、猶更神役及差支不申様行届キ況哉神慮ニ及相叶ヒ可申候間乍恐此段奉願申上候右之趣御閉届ケ被成下候ハ、難有奉存候以上

布留社物部氏等年預

慶應四年

八月二十八日

- | | | |
|-----------------------|------------------------|-------------------------|
| 森島 右衛門
字重左衛門 | 河原城村
川村 右近
字六右衛門 | 東井戸堂村
森口 左近
字宗右衛門 |
| 指柳村 左近
字六右衛門 | 西井戸堂村
上田 民部
字兵三郎 | 吉田村 右京
字小右衛門 |
| 吉田村 右馬
字市右衛門 | 田南村 左近
字榮助 | 田北村 治部
字忠助 |
| 北田中村
中村 治部
字作兵衛 | 指柳村
堀内 右京
字庄作 | 別所村 左近
字幸右衛門 |

- | | | |
|------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 丹波市村
中村 左近
字吉右衛門 | 三島村
石西 衛門
字爲右衛門 | 三島村
北田 北近
字利右衛門 |
| 庄屋敷村 左門
字作右衛門 | 庄屋敷村
石西 左京
字太助 | 豐井村
山本 左京
字三次郎 |
| 備前村
上田 右近
字喜右衛門 | | |

奈良府御役所

祝部 火忌寸ヲ氏姓トス。石上振神宮略抄ニ載スル系譜ニ

祝部火忌寸略系譜

火忌寸ハ布留宿禰同祖ニシテ物部首市川臣四世孫武藏臣ノ後ナリ天武天皇御世武藏臣四世孫古道ニ姓ヲ賜フテ物部連ト申ス延暦年中ノ太政官符ニ神族ノ中ノ人ヲ選テ神主ニ任ス六年ヲ以テ限トス於是禰宜物部連文倫古道九ノ一族等日河亦禰川是ノ邊ニ宅居ス典論物部連ト氏姓ノ交雜スルニ仍テ文倫奏シ宅居ノ地ノ名ニ依テ火忌寸ヲ請フ勅シテ是ヲ許ス以後火忌寸今云忌火者訛ナリヲ祝部ト爲若神主ノ職ノ擇ニ得ル時ハ布留宿禰ノ氏姓ヲ負フ例令ナリ。

ト即チ是ナリ。寛治中祝部火忌寸某名ニ外從五位下ヲ授ケシコト亦同抄ニ見ユ。

神寶 寶庫

山邊郡

日本書紀曰 垂仁天皇三十九年冬十月。五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮。作劍一千口。因名其劍謂川上部。亦名曰裸伴。藏于石上神宮也。此後命五十瓊敷命。俾主石上神宮之神寶。自今以後。必汝主焉。大中姬命辭曰。吾手弱女人也。何能登天神庫耶。……五十瓊敷命曰。神庫雖高。我能爲神庫造梯。豈煩登庫乎。……然遂大中姬命授物部十市根大連而令治。故物部連等至于今治石上神寶。是其緣也。

又曰 天武天皇三年秋八月戊寅朔庚辰。遣忍壁皇子於石上神宮。以膏油瑩神寶。即日勅曰。元來諸家貯於神府寶物。令皆還其子孫。

日本後紀曰 桓武天皇延曆廿三年二月庚戌。運收大和國石上社器仗於山城國葛野郡。……十四年二月庚戌。……詔曰。天皇御命爾坐。石上乃大神爾申給。大神乃宮爾收有志器仗乎。

京師遷久成。依且。近處爾令治。去年此爾運收有流。然爾比來之間。御體如常不御坐。有爾。大御夢爾覺志坐爾依且。大神乃願坐之任爾。本社爾返收之。无驚久无咎久。平久安久可御坐。念志食。是以鍛治司正從五位下作良王。……手差使且。禮代乃幣帛并鏡令持且。申出給御命手申給止申。辭別且申給久。神良皇御孫乃御命手。堅磐爾常磐爾護奉幸用奉給止稱辭覺奉止申。遣典藥頭從五位上中臣朝臣道成等。返納石上神社兵仗。

延喜式神祇曰 凡石上社門鑰。一勾匙。一口納官庫。臨祭在。前遣官人神部卜部各一人。開門掃除供祭。自餘正殿并伴佐伯二殿各一口。同納庫不得輒開。

神宮略記曰 「上代ハ高庭之地ノ前ニ御門ヲ立テ勅符ニテ其鑰匙ヲハ神祇官ノ庫ニ納メラル」
振神宮略抄曰 神府亦曰神庫者昔ハ高庭之地ノ左右ニアリ古來諸氏ヨリ獻上給神寶ヲ納メラル天武天皇ノ御世ニ及テ之ヲ其子孫ニ歸シ下サレ于今傳テ饒速日尊ノ弓矢步靱裸伴劍一千口八尺瓊之勾玉一箇ノミ餘リテ當時ノ寶藏ノ内ノ韓櫃ニ在リト聞ク嗚呼神庫ハ陵遲衰微シテ跡モナシ。

石上布留神宮略傳記曰 百七代正親町院元龜天正ノ頃尾張武家亂入拜殿寶藏廻廊樓門悉ク打破リ御寶物記錄ヲ取散畢雖然明神御崇有リテ寶物等還畢。

布留神社緣起曰 樓門ニ續テ東西ニ廻廊アリ廊ニ次テ神庫アリ是所謂天之神庫ノ遺製也。
ト。コレニ據レバ當社ノ神庫ハ、古、天神庫ト稱シ歷代ノ寶物器仗ヲ藏メタリシコト自ラ明ナリ。後稍々陵遲シ隨ツテ物品モ散逸シ、僅ニ廊ノ西北隅ニ一庫ヲ存シ現在ノ寶物ヲ藏ム。

神 戶

天平二年十二月廿日 大倭國正稅帳正倉院文書曰 振神戶、稻參阡陸伯捌拾捌束伍把、租壹伯貳拾肆束伍把合參千捌伯壹拾參束、用肆束、祭神殘參千捌伯玖束、新抄格勅符抄曰 石上神 八十戶 大和廿戶 備後十戶 信乃五十戶

信乃五十戸ハ續紀ニ「神護景雲二年十月充石上神封五十戸」トアルコレカ。備後十戸ハ略抄ニ據ルニ備前國邑久郡安仁邑後、石上郷ト稱スナリト云フ。

爾後神戸社頭ノ沿革徴スベキナシ。寛永十年年預等ノ言上書ニ據レバ、天正ノ頃迄ハ社頭千石ヲ有セシモ織豊氏ニ沒收セラレ、遂ニ無祿ノ社頭トナレリト云フ。寛永ノ言上書ハ左ノ如シ。

布留之明神由來謹而言上

右大和國山邊郡布留社又ハ岩上の社とも申此御神の事は神代より傳れる三劔の内也一は内裏の寶劔一は熱田明神今一は布留之明神也是素戔嗚尊蛇をきり給ひし御劔なるによりて蛇の龜正とも又は天の羽々きりとも申是則布留の御神體也……白河院も殊に崇し思召社頭御修造有ししして社壇に御影を殘し置給ひ則ち内陣に御座す天正年中迄は社領も千石餘雖在之秀吉公當國へ御入國の御御訴訟申をくれ今は社領少も無御座候に付まつりこともおこたり社頭并廻廊に至るまで大破の體氏人なけきかなしむといへども民の力にては且修理をくはへ申事も難計候日域に類すくなき三劔の御神體既に二劔は御繁昌にて布留の社のみ御崇敬にもれ給ひれいらく申許なし今此幾舜之被古風學目出度御代に多少に不寄社領御寄附被成候様に合達 上聞候而可被下候此節御訴訟むなしくうち過候は、彌破滅目前に御座候令加御憐愍可然様に御取成にあつかり候はゞ可忝候已上

寛永十年三月 日

布留宮本 年 預 等

御奉行中

攝社

出雲建雄神社 本社ノ南方丘上ニ在リ、若宮ト稱ス。延喜名式ニ「山邊郡出雲建雄神社」トアル即チ當社ナリ。天叢雲劔ノ分魂ヲ祭ル。神宮舊記ニ「若宮神殿一座出雲建雄神、神名帳曰大和國山邊郡出雲建雄神社、飛鳥淨御原宮御宇天皇神主布留邑智夢布留川上立、騰八重雲、其雲中有神劔、放光華、照六合之内、劔頭八龍并座、明且到彼地、見之有雲石八個、于時神託、人曰吾尾張氏女所祭之神而今天降於是、保皇孫、守諸民、於是神宮前岡上立、社祭之曰出雲武尾神、亦曰天村雲神………其後有勅列官社」トアリ、斯ノ緣由ヲ以テ創祀セラレタルモノナリ。

官幣

官祭ニ於ケル幣帛等延喜式ニ詳ナルモ繁キニヨリ之ヲ省ク。三代實錄ニ「貞觀元年秋七月十四日丁卯、遣使諸社、奉神寶幣帛……掃部頭從五位上藤原朝臣貞敏爲石上社使……同年九月八日庚申……大和國石上神……遣使奉幣、爲風雨祈焉」ト、是臨時ノ奉幣ナリ。

雜事

日本書紀履中天皇即位前紀曰 暫太子便居於石上振神宮
三代實錄曰 貞觀五年閏六月二日癸亥、大和國言、石上神社南、見五色雲、

山邊郡

大同類聚方曰 布留藥 石上不流神社仁傳留 方於芝計須留毛奴熱利佐免加奴留二用于倍之 多萬
荷播 三分 字波疑 三分 非流尼 三分 夜萬伽賀美 三分 伽波夜那岐 三分

當社ニ白川法皇ノ御宣旨印ト稱スルモノアリ、當社ヲ尊崇スルノ餘氏人ノ補任ヲ一社ニ勅許セラ
レ、其ノ信符トシテ賜ハリタルモノニシテ、爾來氏人ノ補任狀ニハ必ズコレヲ捺ス。因テコレヲ永
宣旨勅判ト稱ス。事、氏人等ノ記文 原書川原城 川村氏藏 ニ見ユ。

布留宮本記文之事

夫當社 岩上大明神と申奉るは人王十代崇神天皇之御宇此社地ニ御鎮座節の靈の神寶十種の神寶
を納給ひ其後人皇七十二代白河院様當社節の靈の神寶十種の瑞寶並千々の神寶の御靈德ヲ御叡威
御座テ承曆貳年社頭御造營成就の後御自影の御尊像並宣旨之御宸翰一通ヲ納給今東ノ相殿ニ鎮座
ス御宸翰とハ今秘在ニ御神事 然其末代出納ノ穢惡ヲ恐レ任職之輩と云ヘ其輒其秘篋を開事を不
宥雖然承曆年中已來星霜久しくして七百三十餘年を雖經先例不空當社由緒之輩江
白河院様依ニ宣旨ニ任職爲ニ任神恩奉謝もの也

宮本氏人

支配年預

北 田 清 助

文化四丁卯年

三月十一日

島 中 嘉 右 衛 門
上 田 文 右 衛 門
城 伊 右 衛 門

ト是ナリ。但シ永宣旨勅判ト云ヘルモノハ左縮ノ如シ。

布留藥

當社ノ古文書ハ弘化五年年預引繼目錄ニ據ルニ二十餘點 内十一點ハ 不足ト云フ アリシナリ。弘化後何レニ引
繼ギシヤ今其ノ二三點ヲ存スルノ外所在ヲ詳ニセズ。左ニ目錄ヲ掲ゲ以テ後日ノ搜索ニ便ナラシ
ム。

弘化五年 申二月日 布留社御鍵古書物目錄

時之年預 上田友右衛門 萩田政右衛門

一 布留社御證文卷物 四 卷

但二重箱入ふくき壹ツ

一 寄進帳 貳 冊

但二重箱入ふくき壹ツ

一 石上大明神緣起 貳 冊

一 同略緣起 壹 冊

但二重箱入ふくき壹ツ

但二重箱入緒掛ふくき一ツ 風呂敷一ツ

一 石上大明神緣起卷物 壹 卷

一 九條殿大乘院殿免許狀

但二重箱掛緒ふくき一ツ

但箱入四通

一 諸證文箱人

壹 冊

一 丹後庄 惣田數帳

三 冊

但品書有之

山 邊 郡

二四三

一 諸證文袋入 <small>但品物有之</small>	數九ツ	天正十年	一 長原領之内七町分算田帳	壹冊
元祿十五年	壹冊	元祿十七年	一 垣内檢地帳寫	壹冊
一 布留社堂寺間數附帳	七冊	一 垣内算用帳	三十一	
一 垣内名寄帳	六十	一 算用帳	五十八	
一 垣内年貢帳	七十六	一 同算用帳	三十六	
一 雨乞立帳	八十三	一 普請帳	三十二	
一 同郷通ヒ	四十四	一 垣内差引帳	八十一冊	
一 普請通ヒ	八冊	一 奉加帳	壹冊	
一 山手賣帳	四冊	貞享二丑年	一 石瑞籬奉加帳	一冊
明曆寬文同天和	貳冊	享保十三年	一 鐘鑄帳	一冊
一 御境内年貢帳	三冊	寬保三	一 人數帳	一冊
享保十七	壹冊	一 灌頂帳	一 補任帳 并書類	七冊
一 花表積リ帳	八通			
寬文賣曆				
一 不動會帳				
安永四				
一 神樂人別帳				
一 御神寶目錄				

一 神宮寺目錄帳	一冊	一 萬人講帳	六冊
一 願滿帳	廿五	一 寬保二	二冊
弘化四		一 同三	
一 年預筋目名前控	一冊	古書物目錄	
右之通ニ御座候以上			

年預 上田 友右衛門
萩村 政右衛門

門脇源右衛門殿

右之通本紙目錄之儀字多紙ニ相認申美津二掉ニ差入社人三人年預二人使傳二人持セ差贈預リ申候已上
時社人 森 美 火 東 衛 門 中 左 京
年預 萩村 政右衛門
古年預 上田 友右衛門
新年預 門脇 源右衛門 使傳 藤藏 利兵衛

○覺

一 石上大明神緣起帳	二冊	一 九條殿大乘院殿許狀	四通ノ内一通不足
元龜元年			
一 丹波領 總田數帳	三冊	一 長原領之内七町分算田帳	一冊
長原庄			
馬場領			
山邊郡			

一年預筋目名前帳

一冊

明曆寛文同天和
一御境内年貢山手帳 四冊之内三冊不足

拾壹不足

右拾壹門聯源右衛門年預中御座候處田村南又三郎年預代り日ニ調宣方へぬき取置候ニ付目錄外右不足ニ御座候依之此前ニ
印置事

慶神宮寺

神宮略記ニ「今ノ神宮寺者人王十一代垂仁天皇ノ皇子五十瓊敷命妹大中姬命ノ住居ノ舊跡也」神宮緣起曰「神宮寺ハ本社ノ東廻廊ノ外ニアリ所謂石上寺是矣寺内ニ十羅刹女ヲ安置ス此寺草創ノ時代ヲ知ラス」ト、即チ五十瓊敷命ノ舊跡ニ之ヲ建立セシノナリ。三代實錄ニ「貞觀八年正月二十五日壬寅……………勅以ニ大和國田二十八町ニ借施ニ入石上神宮寺。須待ニ造ニ寺畢ニ還收。」トアリ、以テ創立ノ久シキヲ知ルベシ。今其ノ建物ヲ社務所ニ充ツ。

都祁水分神社

都介野村大字友田都介ニアリ、俗ニ友田宮或ハ水分宮ト稱ス。延喜式神名帳ニ「都祁水分神社大。月次。新嘗。」ト見エ、古ハ大社ニシテ月次・新嘗ノ官幣ニ預レリ。其ノ地古竹谿ト稱セシニヨリ或ハ竹谿水分トモ云ヘリ。延喜四時式新祭年ニ「大宮女神。及……………竹谿等水分十九社各加馬一疋。」ト是ナリ。今郷社タリ。

祭神

水分神ヲ祭ル、創始ノ年紀詳ナラズ。但シ小山戸ノ北氏ニ緣起ニ本ヲ藏ス。共ニ應永卅一年ノ作ニ係リ、一ハ貞享元年ノ寫本

ナリ、一本ハ繪卷ニシテ正徳五年ノ書入アリ、ココニ引用スルモノハ、貞享本ヲ主トシ繪卷本ヲ以テ缺ヲ補フ。曰ク

蓋聞水分大明神者 御裳洗川之餘流 天照皇大神之分身也應現慈光普照三千界之空 本地月輪遙澄 十萬億之西 夫尋我 大明神之濫觴者 勢州渡會郡有 一人 俗名曰 村丸……………於親族有 省心 早辭 本郷 擬遷 他州 而天照大神者吾朝之始祖日域朝廷之本主也我生 瑞籬之邊土 常歸 玉殿之庭前……………泣々出家郷 則汲 衣洗川之靈水 入 木壺之中 爲 彼餘香之名凝 持却本國即 途中具 童男童女 逢 於老翁 以客友遙涉 山河之雲路 日趨 和州之土境 于時凌 三伏暑 登 九折之坂 攀 巖山之嶺 臨 行路之疲 開 所持之靈水 爲 潤 咽喉 之時 靈水忽然化 二白龍 飛 昇碧空 奇瑞異常行雲重々、雷音動々、當 于斯時 老翁示曰

方便由 慈悲 垂跡爲 利物 白龍名 水分 我號 三大神 云々

屢唱 斯言 指 西 飛行……………悲喜共深遂崇 山頂 彼 水分大明神……………

一宮本地阿彌陀如來俗形帶衣冠 都祁水分

二宮本地觀世音菩薩童女形拱 兩手 水分

三宮本地大勢至菩薩童男形持 圓扇 國水分

老翁傳云

玉造 村丸之所 持靈水忽然化 來 二白龍 飛 昇碧空 同帝御宇 己 九月廿一日 白龍者和州宇陀

山邊郡

郡 上水分玉岳古市場村ニアリ下水分田山 飛降給一白龍者同國山邊郡都那郷小山戸庄高山 飛降給有度々
 井足村ニアリ正二位水分大明神ト云 飛降給一白龍者同國山邊郡都那郷小山戸庄高山 飛降給有度々
 奇瑞夢想告 諸人驚奉 崇之廟之神 云々奉 崇仁小山戸村住藤原時忠……………圓融院御宇天祿二
 年 輒田之庄庄内坂窪山造立社檀 木瓦葺也名下宮ト云其故於小山戸庄上宮社者庄内輒不弘路
 次往還大道乘馬之族等ケヲサレ奉テ蒙 罰輩不知其數 依之院主江○山内七郷ノ領主ニ階堂ツ云フ申入御位下奉
 九月二十五日戌刻奉入下山宮自夫以來每年九月廿五日奉入上山宮同廿六日奉入下山宮
 御祭神有之

トアレドモ、小山戸ノ社ハ即チ都那山口社ニシテ水分社ニアラザルコト彼ノ社ノ下ニ詳述スルガ如
 シ。其ノ都那山口及ビ當社ハ共ニ官設ニ係リ延喜ノ世既ニ官社ニ列セラレタレバ、天祿中ノ創立ニ
 アラザル自ラ明ナリ、且ツ水分ノ字面ニヨリ御裳濯川ノ水ヲ分チタルト附會シ、コレニ彌陀三尊ニ
 習合セル如キハ最モ笑フベキノ至リナリ。要スルニ當社ヲ天祿中ニ創設スト云ヘルハ此時社殿ヲ造
 替シ、神輿渡御ノ祭式ヲ定メシコトヲ誤傳セシモノナラン、故ニ之ヲ取ラズ。

神主

榮部氏相傳ノ職タリ。榮部ハ一ニ坂上ニ作り、開化天皇ノ皇子彦坐王ノ後ナリ。或ハ後漢靈帝ノ
 末ナリト云フ。

聞書覺書曰 輒田村……………此里ニ榮部氏有只今ノ神主ニテ記録ニ系見リ亦坂上氏モ村姓ハ針村

ノ坂上ニテ今迷末トモ云九代開化第二皇子彦坐王ハ當麻坂上之祖ト舊事ニ見リ亦百濟村長谷川黨
 ニ坂上姓有是後漢靈帝ノ末ト云……………

輒田ハ二階堂領山内七莊ノ一ニシテ、當時各庄ニ下司・公文ヲ置キコレヲ支配セシム。榮部氏輒田
 庄下司職ヲ以テ神主ニ補セラル。天祿中ニ春俊アリ、長元中ニ春永アリ、承德中春忠アリ、承安中
 ニ春延アリ、春延子ナキニヨリ領主即二階堂已講房ノ近侍國房ヲ養ヒ下司・神主兩職ヲ讓レリ。建治・
 弘安ノ際ニ春國アリ、族春弘ト所帶ヲ爭フ。弘安五年六月卒シ子春元嗣グ。或云春元ハ建曆
 寬元年間ノ人ト是ヨリ先、
 輒田庄ハ領主ノ變遷ニヨリ榮部氏下司職ヲ解カレ、單ニ神主職ノミヲ帶ゴトトナレリ。春元卒シ
 子春恆嗣グ。正安中水涌式部公ナルモノ神主職ヲ押領スト雖モ、給主藏人法眼ノ沙汰トシテ春恆ニ
 還與セラレ、爾來榮部氏永ク其ノ職ヲ襲ヘリ。

緣起曰 水分大明神下宮神主職自天祿二年以來輒田之庄之内小北村住下司榮部春俊ニ補任至
 二位已講御房重代相傳都無相違、而相當已講御房時代榮部春延無實子之間、已講御房御
 傍仕之人ニテ國房七郎殿ト申午ニ傍仕ニ御義者也春延養子シテ下司并神主職共讓與之間、其系圖榮部之姓子今重代
 相傳無退轉已至弘安年中之處、春國與春弘有相論及合戰、雖然春國依爲嫡流被補
 任畢、而春國弘安五年六月十三日辰刻死去之間被補任春國嫡男春元畢、輒田下司田壹町六反
 大北小北之而二位已講御房被治却他家今者被成春日社論伽論料所畢、而間已講御房以後者

頼田下司職令退轉也。於水分社之神主職者于今無所遺。春元死去之後春恆至永仁年中。榮部氏重代相傳者也。而正安年中。水涌式部ト云人奪取神主職之間。難堪之由訴申之處。時給主藏人法眼御房桶井被。沽却彼神主職。畢。此條希代勝事也。於山内七ヶ所。職并檢斷以下散野廣野新開講田等ハ皆悉時給主御沙汰ニテ都以為重代相傳。沽却等先何況於水分神主職者異。他可重代相傳職。但任料多少時給主有御計者也。於神職者不可傳他人。室殿僧正御房御代及理不盡御沙汰。暫雖有之知行仁終如。元榮部氏宛賜畢。……………

社 殿

緣起ヲ案ズルニ天祿二年小山戸社ヨリ初メテココニ造立セル由見ユレドモ、當社ハ天祿以前ノ官社ナレバ此時ノ創始ニアラザルコトハ既ニ上ニ述ブルガ如シ。蓋シ天祿ノ造立ハ即チ造替ニシテ、同時ノ祭典ノ規模ヲ擴張セシヨリ斯ク誤リ傳ヘタルモノナラン。而シテ山内七庄ハモトニ階堂領ナルヲ更ニ菩提山領トナリ、爾後幾多ノ沿革ヲ閱シ武家ノ所領トナリシモ、社殿造替ハ領主ノ沙汰トシテ七郷ニテコレヲ負擔スルノ慣例ナリ。

緣起曰 昔於山内七ヶ所ハ布留社之神役勤之然自寛平年中以來水分社令勤仕神役不動仕布留社之神役其故者布留神人與水分神人依座論及鬪諍故也從永照僧都御房至二位已講御房○北吉品記曰保元平治山内七ヶ所者二階堂一圓之御領地也、而已講御坊御時代山内七ヶ所於下地者被

沽却東大興福之兩寺并諸寺諸山或寺僧國民甲乙人等之間皆悉成敗在之領地上。畢。雖然二階堂院主職者奉寄附并山前大僧正御房○北吉品記曰信圓、月輪兼實公ノ御子也已成。敗在領上者於御年貢者一粒无御公事者人夫傳馬計也。然間已講御房以後者二階堂燈油佛餉等及鬪如。畢于時北京之平少納言○同洞院知信ト申公卿彼二階堂領之内水涌庄田地五町六反三百步御相傳有之彼少納言殿春日社ニ御參籠有ケルニ以彼便宜自并山殿被仰付雜掌人。有御招請直ニ御對面彼二階堂者於當寺者異。他而二位已講令沽却方々之間御年貢一向無之。依之燈油佛餉等既及鬪如。條驚歎之至也可。然者且爲御祈禱且爲佛法興隆可有御奉加之由被仰之間、隨御說段別七油五合宛寄進進ト云云自夫以來方々之地主領主江被仰付之間爲別相傳上者難堪之由乍申御說旨依難背或段別七一斗一升宛或段別七五升宛三升宛皆寄進畢。自其以後以彼負所佛餉燈明供料七被別之于今不退轉者也。亦水分造宮用途并南殿國津大明神社造宮用途已講御房迄ハ上ノ御沙汰ニ有シカモ院家御領ト成テ後依御年貢無之以山内七ヶ所之段別米可令造營由被仰下之間、方々地主等及集會令評定訴申云二階堂加地子米被召之上又重於水分社反別被召之條難堪愁吟之間爲別相傳之上全非私物或東大寺興福寺燈油料并家社日次御供或諸寺般若寺白毫寺招提寺西大寺諸山并山釜口山忍辱山桃尾山三輪内山等諸堂塔之供料供米料所也可免除有之由雖訴申自院家嚴密御沙汰之間、於頼田水分社造替者以山内七ヶ所段米可修造修理之由御

治定候畢段別員數之事。

造宮段米 五升

佛葺段米 三升

内鳥居居垣段米 二升

神輿段米 壹升

但大鳥居ハ小山戸庄上山木ヲ切テ七ヶ所之人夫ニテ引寄造立スヘシ或ハ拂葺ナトノ便宜ヲ以造立スル間段米ヲハ一粒モ不可掛ト云々

今造替ノ例ヲ案ズルニ記録ニ記スル大略左ノ如シ。

緣起曰

天祿二辛未年頼田之庄内坂窪山ニ造立社檀木瓦葺也……………院主ノ御沙汰也。後一條院御宇長承^(元カ)二己巳年七月廿一日上棟水分社物同八月十五日棟裏此時ヨリ檜皮葺也檜貳百三十井一井別ニ壹斗二升宛、上棟番匠祿物三石長合葺大工二石長合寶堅十一月三日猿樂祿物三石長器以上院主御沙汰也以山内七ヶ所御年貢遂立用畢 神主榮部春永 大工橘重安 葺大工符政成清 夫頭成繼。後冷泉院御宇康平五壬丑年造宮檜皮二百五十井一井別一斗壹升宛十一月一日寶堅 神主大工葺大工同前 夫頭成近

白川院御宇永保二壬戌年拂葺アリ檜皮同前……………

堀川院御宇承德二戊丑年六月七日手斧始奉造替上棟同廿八日棟裏八月二日神主榮部春忠 大工葺夫頭前ニ同事

崇徳院御宇長承三甲丑年二月十一日手斧始ニテ奉造替卯月廿五日上棟六月廿八日棟包八月三日寶堅 神主同前 大工橘秋安 葺大工成次 夫頭成貞

高倉院御宇承安四甲午年八月一日手斧始奉造替九月三日上棟同廿一日棟包十一月五日寶堅檜皮二百六十井 一井別ニ一斗宛 神主春延 大工同前 葺大工同前 夫頭同前

○一本ニ「此間ニ是迄ハ二階堂院家ヨリ御沙汰此已後ハ葺山大僧正ヨリ段米ニテ御沙汰有」ノ文ヲ二行ニ挿入ス

順徳院御宇建曆二壬申年造替手斧始八月廿六日上棟九月十八日棟包同廿二日檜皮二百七十井 一井別ニ一斗ツ、

葺山前大僧正御房御時代 預所一萬小別當 定使金樂法師 神主榮部春元 大工藤原有光 水涌下司藤原國宗 向淵下司圓慶 小山戸下司文成末 南殿下司宗弘 蘭生下司文宗遠 牟山式司紀

久近

註 神主榮部春元ヨリ向淵下司圓慶マデ、人名見エズ。

後嵯峨院寛元々 癸卯年造替六月十四日手斧始上棟上ノ御沙汰也禪定院別當僧正御房御寺務之御時

定使善福足頭 預所永禪房五郎 神主榮部春元 大工橋秋里 葺大工國次 夫頭成國 小工伴國

弘安二己卯年後宇多院御宇造替手斧始六月四日小山戸庄神山之杉二本切テ袖始時之領所中御門上座法橋御房六月廿六日御他界依是八月五日戌尅奉入遷殿神輿遷殿水涌假屋之後也柱立九月九日上棟九月廿三日遷殿葺板百枚牟山庄ヨリ沙汰垂木竹七ヶ所出之御前御廉一間神主沙汰遷殿ニ奉入時ハ小山戸庄ヨリ三木口一斗長器出之神主神樂奉ル善之綱布四丈ヒサツキノ布三丈上棟祿物三石長器升以上之御沙汰也十一月五日正遷宮七ヶ所酒六升宛持參神樂スル此内二升三木口二升散米ニスル七ヶ所ノ百姓參詣シテ一日ノ神樂也寶堅十二月三日定使得内力法師 神主榮部春國 大工橋秋俊 葺大工國清 夫頭成延

ト見エテ、天祿ヨリ弘安マデノ造替ニ係ル事項頗ル明瞭ナリ。其ノ用脚ハ縁起ニ七ヶ所田數事

- 向 淵 拾五町九段八拾步
- 小山戸 拾九町
- 輛 田 拾五町三反
- 牟 山 六町一反大

水 涌 三拾三町七反三百步

○繪卷縁起書入ニ曰今高九百廿七石餘也今ハ白石村ト云此本書應永卅一年書記ト見タリ古書ニ應永十六年ニ白石ト有亦同廿五年ニ水涌ト有

- 蘭 生 六町一反大 作谷二町加之寺反米四町一反出之
- 南 殿 二十八町二反大 水分造宮ノ時半分出之今ノ半分ハ南殿社造宮ノ時可出之……

○繪卷縁起書入曰是ハ高倉院承安年中ノ從殿今高六百八十四石餘也今ハ來迎寺甲岡ト別ル、也今高トハ文祿四年ニ豐區ヨリ被檢也

造替時材木出ス分

- 水 涌 庄 モヤ柱二本 ヒサシ柱一本 梁二丈 土居二丈 又土居ノ下四丈 カウランノツカ柱四丈以上
- 輛 田 庄 モヤ柱一本 ヒサシ柱一本 ヒチキ八丈 カフキ一丈 カウランノヒサシ柱九丈以上
- 向 淵 庄 カウラン三丈 タルキ四十六丈 ツマヒサシノタルキ五丈 コマキツカ柱四本 ギホウシユ二本以上
- 牟 山 庄 モヤ柱一本 イノコカモキ八丈 スミ柱二本 大ユカノツカ柱四本 ギホウシユ二本以上
- 南 殿 庄 竹三丈 ナケシ八丈 ノホリカウランノ土居二丈 ツマトノワキ柱二本以上
- 小山戸庄 サトリハメノ板七十枚 ツマフキノ板廿枚 妻戸ノ板四枚 ヘイチク二丈 破風六枚以上
- 蘭 生 庄 ウタチ二丈 キタハシノコ七丈以上

葺合竹釘壹斗四升細繩五十把太繩七十把出ス也

垂木竹三十五本出ス様

水涌庄 ヒツナハ八把 ハリナワ八把 タルキ竹五本竹釘二升 向淵庄 同事 南殿庄 同事 小山戸庄 同

事 柄田庄 同事

牟山莊 ヒソ繩六把 張繩十把 垂木 竹五本 竹釘二升 蘭生庄 同事

トアリ、コレニ據レバ此縁起ヲ編輯セシ應永ノ頃ハ、社殿造營モ亦段錢ノ法ヲ用ヒ、用途ノ率ヲ段數ニ乗ジ賦課セラルルモノノ如シ。弘安ヨリ貞享マデ沿革ハ北吉品記ニ詳ナリ。曰ク

弘安二年ニ造立アリシヨリコノカタ元和四年迄三百四十年ノ中ハ不詳所々ノ地侍衆ヨリ營之カ地侍ハ永祿十一年ニ平均共云ヘリ又ハ天正二年共言フ其後ハ松永久秀十年程領スルカ山岡對馬守其跡領スト云ヘリ其後ハ郡山城主大納言秀長其以後ハ増田右衛門尉慶長五年ヨリハ小山戸白石無山蘭生ハ御藏入代官間宮三郎右衛門、友田蘭生ハ筒井紀伊守南殿ハ庄田赤井向淵ハ松平大隅其後元和三年ヨリ小山戸白石友田蘭生甲岡無山ハ藤堂和泉守高虎公御領地トナル

又曰友田下ノ宮ノ造立ハ元和四戊午年宮移能アリ祿米入用三石三斗五升白石、三石三斗五升向淵、壹石七斗九升小山戸、壹石壹斗四升無山、壹石壹斗四升蘭生、三斗來迎寺、六斗八升甲岡、壹石六斗六升南殿、貳石七斗友田、ハ拾六石一斗一升、午九月廿九日ニ算用

正保三丙戌年拂替郷中奉加山代共ニ始終ノ入用六拾四石五斗内五十二石八斗替大工皆領吉野山二

皆屋壹石上棟ノ祝ニ大工へ壹石導師針村宮坊

慶安元戊子年宮移能アリ六石樂頭、拾石八斗祿米、九斗五升折紙代、四石酒代、始終ノ入用ハ三

拾二石七斗六升八合、役者大夫宗之丞脇 四郎右衛門 大鼓 勘九郎 小鼓 重右衛門 笛 庄右衛門 太鼓 善

兵衛 狂言太郎右門 河内 万之丞 以上三拾人能ノ次第白髭 錦鉢 實盛 花子 松風 ヒツ貝 船辨慶朝比奈 安宅

米布 紅葉狩 犬山伏 祝言也

寛文七丁未年拂替八百貳拾目 葬大工皆領吉野山市ノ介 三貫文 上棟ノ祝 貳拾目 導師小山戸 神宮寺良榮 始終ノ入用

米二十三石二斗二升 右之内五石友田、壹石五斗南都、貳石蘭生、貳石五斗小山戸、五石白石、四石

山代二百五十二石 向淵、壹石七斗貳升無山、五斗甲岡、五斗來迎寺

天和二壬戌年九月廿九日下遷宮十一月三日上棟

七百五拾目替大工南都權三郎、五拾目加増ニ遣シ、壹ハ文上棟ノ祝貳拾目導師小原圓海、始終

ノ入用

貞享五辰九三日ニ友田水分社大鳥居造立元和ノ末年迄ハ古鳥居朽果ト云ヘ共其後退轉シ侍ルヲ再興ス大工小山戸村吉兵衛内鳥居モ一所ニ再興ス兩始終入用等四百八十七石七分神木三本枯木數下苺代又七郷奉加也

神 田

山 邊 郡

縁起曰 神田八段、講田五所、神田庄ニ有之、神主知_レ行之、神田ハ 東宮野三反ヒユウニ三反_{〇繪巻縁起}、今池ノ敷地ニ成殘所三畝程、供田ト成、元 芝原二段也、講田ハ松木谷一所、北大路一所、柚谷壹所、栗生窪一_{〇繪巻縁起}、祿五年ヨリ年々四十二度ノ御供ヲ上ル也、
所、カニハラ壹所_{〇書入曰右何モ}、以上此外小山戸庄ヨリ一石四斗地子アリ、
字名友田ニ有

祭 祀

官祭ノ儀ハ延喜式ニ見エタレバココニ略ス、中世以來神輿渡御ノ儀式等ハ蓋シ天祿中ニ草創シ、
建治中ニ整頓セルモノナルベシ、建治ノ祭式及ビ祝詞等ハ縁起ニ詳ナリ、

天祿二辛未年、神田之庄内坂窪山ニ遺立社、檀木瓦葺也、名下宮ト云……九月廿五日戌刻ニ奉入ニ

下山宮_自、夫以來毎年九月廿五日奉入ニ上山宮、同廿六日奉入ニ下山宮、御祭禮有之、勅使并奉幣使

_{〇繪巻ノ書入曰内侍使童子今白石ヨリ物使内侍使} 田樂 細男 スマウ等院主之御沙汰也、
_{童使ハ勅之、小山戸ヨリ奉幣使御所ノ幣ト云フ}

五節供六膳宛進上二膳三木口三升宛也

九月二十六日祭禮御供并御供飯料米七ヶ所ニ壹斗ニ升宛出之御供六膳追物六膳菓子六膳三木口一

膳別ニ一箇宛御供餅三百六十杵形也_{〇繪巻書入曰今}

御供備次第 御供一膳追物一膳、餅六十菓子一膳三木口一箇御汁御タ、ミ可_レ備之、大神四膳、

山神一膳、餅五十、若宮一膳、餅六十、八王子餅十枚、山神八王子一膳也

御供下行次第 御供一膳、追物一膳、菓子一膳、餅五十、山神分ヲ時ノ定使ニ下行ス若宮御供、

大神四所ノ具足ハ神主取也時ノ領所餅五十杵形ノ餅五十進之時之定使エ三十進之……

御供進上後神主院家領所御帛并御帛ヲ取合再拜仕テ後上御帛領所故御帛ヲモテ又再拜シテ可申

謹請再拜

維當年建治二年丙午九月廿六日吉日良辰ヲ撰定銀ノ御帛金ノ散米ヲ以テ諸神ヲ勸請シ奉リ供シ奉

ル七ヶ所恒例之御祭トシテ上ハ十善帝王關白殿下ヲリ居ノ御門左右大臣殊ニ別ハ院家大和尚位御

法體堅固惠命長遠并七ヶ所預所定使下使太夫人民百姓安穩ニシテ太平ナラシメントメニ七ヶ日沐

浴三ヶ日潔齋シテ榮部春國トリナシ奉シニヨリ萬歳ノ藤ニ榮ヲトモナイ千秋ノ竹ニ齡ヲナラノヘ

御家安穩ニ家門繁昌シテ下津磐根ニ宮柱高クシキ左男鹿ノ八ツノ御耳ヲ振立テ十二ノ御眼明ラカ

ニタモタシメタマヘト申再拜々々扱々七ヶ所ノ假屋ニ向テ如此仕セ玉フニヨリ今モ行末モ千秋萬

歳トキハカキハニ守護セシメ奉ント申ベシ

田樂、酒肴御祭禮盛次第、御所御幣帛村酒肴

水涌 牟山 蘭生 小山戸 輻田 五ヶ所ニ廻一年ツ、上之御幣ニテ田樂ノ村ヲアタク向淵ハ本田

樂ニテ除之南殿ハ元ヨリ細男ノ役ハカリニテ除之

相撲ノ數立次第、左水涌 向淵 牟山 右南殿 小山戸 蘭生

田樂之例祿水涌庄ヨリ加地子七斗立用シテ下司ノ沙汰ニ下行

相撲之例祿出ス次第、水涌 五斗 向淵 五斗 矣山 二斗五升 輶田 二斗五升 小山戸 貳斗五升 蘭生 二斗五升 已上二石各料田アリ南殿ハ細男之例祿五斗出シテ除之細男田樂相撲ハ上之御沙汰也御帛ハ上之時領所故二幣下サレテ行取也

流鍋馬ノ次第一番ニ向淵 二番水涌 三番小山戸 四番輶田 競馬ハ七ヶ所ニ二疋ツ、出之二番ツ、出之ナリ

ト見ユ。以テ當時ノ例式ヲ概見スベシ。繪卷縁起ニ神輿御渡ノ圖ヲ載ス。今其ノ行列ノ繪詞ヲノミ抄出シ參考ニ供ス。

獅子頭 猿田彦 御所幣、内侍使、童使、 七人 七人 七人 七人 本田樂神輿、神主、勅使、水涌庄 是勅 使代 向淵村頭人、無山村頭人、二階堂院家御供、七郷下司

天王神社 波多野村大字仲峰山ニ在リ、俗ニ畑天王ト稱ス。郷社タリ、素戔嗚尊ヲ祭ル。素戔嗚尊ハ備後風土記ニ據ルニ除疫神ニシテ、浮屠氏之ヲ牛頭天王ニ擬セリ。天王ノ稱是ヲ以テ起ル。

案ズルニ延喜式 神祇 三 「畿内堺十處疫神祭……大和與伊賀境七……」トアルヲ、聞書覺書ニ「畑村七郷也牛頭天皇社有紀内境ニ疫神畿内疫神防玉ヲ由延喜式ニ見リ是其一ツ……」又大和國陳跡名鑑圖ニ「畑天王ハ延喜式ニ伊賀大和ノ境ニ役神祭」ト見ユ。コレニ據レバ、當社ハ古ノ畿内堺ニ於ケル大和・伊賀ノ境ニ疫神ヲ祭リシ舊跡ニ就テ社殿ヲ建テコレヲ祀レルナラン。後考ヲ俟ツ。

註 大正十五年九月縣社ニ列格セリ。

都祁山口神社 都介野村大字小山戸 カモエ ニアリ。延喜式ニ「都祁山口神社 大。月次。新嘗。」ト即チ是。

俗ニ小山戸明神ト稱ス。中世誤リテ豐受大神宮トス、何ノ故ナルヲ知ラズ。蓋シ都祁水分社ヲ伊勢ノ内宮ノ分身ナリト云フ俗説ニ依レルナラン。但シ水分縁起ニ友田ノ水分社ヲ都祁水分下宮トナシ、當社ヲ都祁水分上宮トスル亦非ナリ。所謂水分上宮ハ當社ニアラズシテ城内ナル水分假宮ナリ。水分假宮ハ彼ノ水分祭禮ノ前夜神輿ヲ駐ムル爲ニ設ケタルモノニシテ、モト神社ニアラズ。寶曆四年四月 小山戸組 之内奥組 郷鑑帳ニ

小山戸村

一古市迄里數四里五町

一三拾貳石六斗四升

一池一ヶ所 字宮池村中田地掛之池ニ御座候

一氏神社豐受大神宮 都介水分上社都介山口社共唱申候

末社小宮四社 但八幡 辨天 惠美須 才神

井假屋一社 毎年九月廿六日水分社祭禮之節神輿一宿之假屋ニ御座候

水分明神白龍化シ降給峰與申候

山邊郡

一高山共 神石御座候

元慶三年ニ水分明神白龍ト化シテ
此所ニ降給ト申傳候岩ニ御座候

一石蛤 字龍王與申川端ニ御座候

一古城山跡 唯今田畑藪杯ニ相成御座候

一高貳拾八石五升 楠高御國割并朝鮮人掛等免リ申候

一寺三ヶ所 但持庵共

一無足人

眞言宗高野派南室院末寺

安樂寺末寺

右安樂寺末寺

右安樂寺門弟

寺 但村中宗旨判寺

宮 寺

之 坊

北 彌 兵 衛

北 安 右 衛 門

北 彌 市 右 衛 門

ト、以テ證スベシ。故ニ北氏ノ記録ニハ水分上宮ヲバ「水分カリミヤ」ト記セリ。夫、山口社ト水分社トハ其ノ祭神ヲ異ニシ、固ヨリ相混ズベカラズ。然ルニ當社ヲ水分上宮ト稱シテ友田ノ都祁水分社ト同體ナリトスルハ、彼ノ緣起ニ載スル俗説ニ「陽成帝元慶中伊勢ノ人玉造村尾トモ云ニ村丸トモ云御裳

濯川ノ水ヲ分チテ壺ニ納メ大和ニ齋ラシ來リシニ靈水忽チニ白龍ト化シ一ハ宇陀郡ニ飛ヒ一ハ小山戸ノ高山ニ降ル、依テ社殿ヲココニ造立シ都祁水分社ト稱セシヲ境内狹隘ナルヲ以テ天祿二年更ニ社殿ヲ稱田ニ建ツ、爾來小山戸ノ社ヲ上宮ト稱シ、友田ノ社ヲ下宮ト稱シ、其ノ祭禮ニハ神輿ヲ小山戸ニ渡御スルヲ例トナス」ト云ヘルニヨリ斯ル誤謬ヲ來セルモノナリ。必覺スルニ水分上宮ナルモノハ水分社神輿一宿ノ假殿タルニ過ギズ。故ニ寶曆ノ頃ハ本末ノ區別自ラ明ナリシニ、友田水分社繁昌スルニ隨ヒ山口社漸ク衰へ終ニ神輿ノ假殿境内ノ正面ヲ占メ、山口社ハ其ノ傍ニ位シ豊受大神宮ナドト稱セラレ却テ之ガ末社ノ如クナルニ至レルナリ。

祭 神

當社ハ當國十三處山口神ノ其ノ一ニシテ、都祁ノ山靈ヲ祭レルモノナリ。

神封 附社殿

天平二年大倭國正稅帳正倉院藏曰 都祁神戶稻壹伯參拾陸東租壹拾東壹把合壹伯肆拾陸東壹把用肆

東 祭 神 殘壹伯肆拾貳東壹把

新抄格勅符抄大同神封ノ部曰 都祁山口神 一戸 大和

水分社緣起曰 藤原時忠云……元慶三年十一月一日奉造社壇黒木ニテ萱葺也神主時忠……
……同日二階堂別當所申入五節供被進之

光孝天皇御宇寛平三年辛亥年爲別當御沙汰奉社壇木瓦葺也高山下端也八月三日手斧始同二十一日上棟九月二十日宮遷也以小山戸庄御年貢足皆悉立用畢一向院主御沙汰也同九月二十五日御祭同院主御沙汰也大工藤原有重 神主時忠 袖夫頭又太郎大夫

○北吉品記ニハ「寛平三年秋九月二十日ニ同山下ノ垣ニ遷ス木瓦葺也二階堂領地山ノ内七ヶ所小山戸朝田園生南殿水浦牟山向園此所々ノ郷民集リ信敬ス七ヶ所ノ年貢米ヲ以テ造立ス」トアリ。

村上天皇御宇天徳四庚申年六月五日手斧始造營木瓦葺也同七月十八日上棟八月二十五日遷宮寶堅アリ同九月二十三日造營用途同前……大工有元 神主時忠孫時包 夫頭成家

○本書ニハ此ヨリ以後ノ造營ヲ列記スレドモ、都祁水分社ニ係ルモノノミヲ舉ゲ當社造營ノ事所見ナシ。故ニ上宮造營毎ニ當社モコレニ預リシナラン。

北吉品記曰 山内所々ニ元弘建武ノ砌ヨリ地侍其所々ヲ押領シ寺社共ニ修造スト言ヘ共永祿天正ノ頃ヨリ社等衰ヘ小山戸上ノ宮モ葺葺小社ハ石スエ斗ナルヲ北左京進是ヲナケキ郷民ヲ勸メ寛永年中ニ本社末社共ニ造立ス。

本社ハ板コケラ葺水分カリミヤ共言也

一ノ社木瓦葺本地彌陀如來老翁ノ姿姫大神共豐受大神共八王子共云ヘリ遷宮導師ノ意持タルヘシ。二ノ社本地觀音童女ノ姿、兩手ヲ摺ル萬波多姫共彦火々出見命共八幡大井共云ヘリ。

三ノ社本地大勢至苜、童男ノ姿、圓扇持チ手力雄ノ命共兒屋命共妻神共云ヘリ右三社ハ村丸ニ告ル所ノ三大神共言ヘリ遷宮導師ノ心ニヨリ違ヘリ。

四ノ社蛭兒ノ社共太玉命共云ヘリ。

已上五社軒ヲ並テ立玉フ

○因ニ云フ、中古祭神ノ正傳ヲ失ヒシコト本文ニ遷宮毎ニ導師ノ任意取捨セシト云フニテ明ナリ。當時老翁童男童女ノ像ヲ祭ルハ、彼ノ玉造村丸ガ靈水ヲ壺ニ納メ去ルノ途、水分神老翁童男女ニ化シ奇瑞ヲ示セシト云フ俗説ニ據レルモノナリ。今本像而シテ其ノ第一社ノ豐受大神ト稱スルモノハ即チ都祁山口社ニシテ、其ノ他ノ社殿ハ之ガ末社タルコトハ上ニ引ケル郷鑑帳ニテ明ナリ。

承應二巳年カリミヤ造立七百卅三丈材木万七百卅三丈大工ちん吉野仁皆屋

○カリミヤハ即チ神輿一宿ノ假殿ヲイフ、以下倣之。

寛文元五年一ノ社造立皆領ニ三百目大工吐山源藏遷宮別當良榮始終ノ入用ハ米拾七石五斗也同十二年子年假宮并小神三社拂葺皆領三百五十目大工多武峯長右衛門、遷宮安樂寺長識始終ノ入用四百八拾目也、

延寶六年一ノ社拂葺大工手間ちん三拾五丈木引手間ちん八丈安樂寺柏ノ木ヲ以テ葺始終ノ入用

百七拾目米小樹壹石七斗也。

貞享四年ニ小山戸社拜殿造立ス始終造用八拾七匁也。

神主

神八井耳命ノ子孫都祁國造ニ任セラレ後、都祁直或ハ稻置ヲ氏姓トスヲ氏姓トナシ小山戸邑ニ居リ、兼テ神祭ヲ掌リ傳ヘテ時麻呂ニ至ル。天長中ノ人ト云フ清和天皇貞觀中藤原時長山邊郡司タリ。時ニ齋宮親王伊勢ニ赴クノ途都祁頼宮ニ在リ、時長ノ次男時忠齋宮助ヲ以テコレニ勤仕シ後、時麻呂ノ女婿トナリ其ノ家ヲ繼グ、コレヨリ藤原氏ト稱ス。元慶中時忠神主ニ補セラレシヨリ時員・時包・時近・時恒・時弘・時直一ニ直時ニ作ル父子相繼ギシニ、時ノ領主室殿ノ沙汰トシテ八郎良賢ナルモノニ神主職ヲ讓ラシメシヨリ子孫相傳ノ所帶トナレリ。治曆中ニ政時アリ、寛治中ニ時吉アリ、時吉ノ子末吉、其ノ子成末相繼グ。爾後世系詳ナラズト雖モ累代ノ積資ニヨリ富豪ヲ極メ小山戸殿ト稱セラル。曆應中ニ顯時アリ、伊勢ノ北島家ニ屬シ大和口ノ目代トナリ毎ニ軍功アリ、此時始メテ氏ヲ北ト改ム。國吉・吉兼・實兼・實愈ニ相傳ヘ實乘ニ至ル。當時小山戸庄大乘院領ニシテ實乘之ガ下司職ヲ兼帶セリ。建武以來東山内ノ豪族北島氏ノ幕下ニ屬スルヤ、實乘神主職ヲ聲新九郎紀氏ニ讓リ専ラ干戈ニ從事ス。北島氏滅スルニ及ビ更ニ筒井氏ノ麾下ニ屬セシガ、吉實ニ至リ降ツテ郷士トナリシト云フ。事、小山戸壘ノ下ニ詳ナリ。一説ニ北氏ノ神主職ヲ新九郎ニ讓リシハ實乘ニアラズシテ實弘天文中

ノ代ナリト。然レドモ當社懸札ノ記錄ニ「天正年間北氏主計丞より廣新九郎ニ讓リ廣四代勤之……トアレバ實乘ノ説是ニ近シ。新神主ノ事亦懸札ノ記ニ散見セリ、參考スベシ。

雜事

凡テ邊土ノ人情ハ概ネ質朴ニシテ、苟モ慣例トアレバ事ノ是非ヲ問ハズカメテ之ヲ墨守セリ。今都介地方ハ大和ニ於ケル山間ニ僻在シ、人智ノ進否コレヲ他ニ比スルニ尙幼稚ナルヲ見ル。故ニ元祿ノ頃マデハ一村ノ慣例儀式ヲ木板ニ記シ、コレヲ社頭ニ掲グ以テ社務ニ從事スルノ標式トセリ。其ノ文極メテ拙劣ニシテ事亦野卑ニ涉リ、今日ヨリコレヲ見レバ實ニ抱腹絶倒ニ堪エザルモノナキニシモアラズト雖モ、以テ中世以後一社ニ係ル祭式ト當時ノ人情風俗ヲ徴スベキ材料トナスニ足ルベシ。故ニ冗長ヲ憚カラズココニ全文ヲ掲グ。

一當社、葦川參流、都祁水分、天水分、國水分三座御神、元慶三己亥秋九月二十一日當山峰ニ天降玉より四祭恒例祭祝者延喜式ニ見タリ因茲毎朝勤行毎夜灯、住持之役儀天下泰平國家安全領主長久氏子繁榮祈禱なり尤可被嚴重之沙汰外鳥居より内鳥居ノ間掃除無怠慢寺中修理等相加へ可被申、尤寺ニ内禁火之事御改服忌令可爲專要事

一高三石七斗貳升

神宮寺領

貳升六合六勺

宮ノ前

貳升六合六勺

同斷

山邊郡

内貳斗

垣内

壹斗六升

同斷

壹斗八升六合六勺

同斷

壹斗八升

同斷

壹斗九升貳合貳勺

荒芝

貳石一斗

風呂前

此分ハ年貢之外諸免許

外ニ寺中之田畑、馬場脇田、神主宮侍中支配御除地やぶ壹ヶ所、薪山修理山共貳ヶ所茶園森ヶ下ノ岸有一高壹斗辻田四衛列毎夜灯油代可、元祿三年北氏藤原吉品寄進之

已上

神主

一當社月次新年新齋相齋恒例之神供ハ延喜志支に見たり天祿貳年從二階堂殿定メ被置所神主調進毎度祝祓沙汰嚴重たるべし尤國家安全所繁榮之祈禱也此外餘時之供物唯之夫當社之神主職者天祿貳年二階堂殿定被置領主替目ニハ十貫神主替ニハ五貫調進補任ヌ餉責藤原時忠來任其例雖然天正年間北氏主計丞より廣新九郎ニ譲リ廣四代勤之唯其例座中一會村中一獻にて本家より補任餉責なり依之神供下飯一膳つゝ本家ニ下也神料田ハ左誌
一齋場齋庭之事神社法令なり假ニも嚴からず神主家神宮寺とも常に忌火なり御橋の内は齋ばなり不及服忌人甲乙丙三轉可憚之廣庭及中門之中ハ齋庭也常ニ不淨を禁す忌人可憚之外鳥井之中を通事可爲同事

一神社拜殿宮寺に押て令止宿事、神木伐り取燒柴等盜列炊蓋狼藉之族於有之者神主宮寺より急度可被訓違背於ゐては當村役人え可被談事

一神事佛事座席古法之通先本家、兩寺住持神主本家ヲ一族宮侍之一二三老惣年寄、宮侍之老若惣百姓中老若列座之事但客居ハ各別之事

高貳斗貳升六合

神主屋敷

神主田

内四升 同所

六升

同前島

三升六合六勺

間寺

壹石九斗五升

東馬場

壹斗八升貳合

同所

右之外御湯料ハ小升三升神樂料ハ七合又ハ十貳錢目坂上膳内奏ス

已上

神供次第之事

一正月元日 鏡餅香類 白飯 和布昆布 二日白飯 上同 三日白飯 上同 四日白飯 上同 五日同 上子日 同

松 上卯日 同 卯杖 六日晚 白飯 七日期 七種ノ粥 十日朝飯 按平日 十四日朝白飯 晚白飯 十五日朝

粥ニ 小豆 二十日 タンコロ

一貳月朔日常神供 一汁三菜時 上丁日 尺典ト言、先 四日祈年

山邊郡

- 一 參月朔日〇三日 草飯桃酒〇廿三日 造作御酒稻花御田植也
- 一 肆月朔日 五日開衣替獻扇子 〇四日 大忌祭水懸祭
- 一 伍月朔日〇五日 粽菖蒲藥玉
- 一 陸月朔日 忌水餅體 十一日 月次柏葉敷 晦日 大祓有、哥六月の冬を乃祓す
酒神樂 神今食 たへは千年の命延とうそ聞
- 一 漆月朔日四日 風神祭 七日 索麴 十四日 蓮飯
- 一 捌月朔日 初神祭 上丁日 尺典ト云先聖孔子十哲及王仁宇治皇子祭 十日 芋飯
大豆
- 一 玖月朔日三日 都祁直藤原迄森下ノ田中荒芝時忠唐祭此兩祭不詳元祿初年ノ頃
ノ畑中ニ基有土民無情モ崩之自然有レ左哉兩塚ヲ高山ノ尾ニ祭
- 一 拾月朔日九日 重陽菊酒 十一日 神嘗 二十一日 當社明神天降玉 二十五日 餅酒村中參詣ノ人三本戴
校平有 フ日也依之祝 天祿二年ヨリ此御神事始
- 一 二十六日 常御飯 上亥ノ日 豆餅 十六日 大織冠祭 十七日 晚常御飯并杵形飯荷餅甘酒村中詣ニ
神樂アリ 十八日 宮侍中會合 豆府獻有
- 一 拾一月朔日中寅日鎮魂 上卯日 相嘗 中卯日 新米祭
新サイ
- 一 拾貳月朔日十一日 月次 節分 追儺豆打 大晦日 麥飯
大祓
- 一 已上五十四度神供 御飯餅飯小豆加一汁三菜青物之九膳獻ル也

内

元朝鏡餅十月十七日同十八日飯餅供此料田宮侍座中ノ風呂ノ本五束苜ノ田寄下ニ見載九月廿五

日晚同廿六日朝飯餅飯宮侍座中ノ人別ニ集調集進天祿已來ヨリト見ヘタリ毎朝日御飯ハ本家ヨ
リ壹斗ニ五合調進往昔ハ不詳永祿已來無中絶也二八月兩度尺典九月三日都祁直藤原時忠兩所祭
十月十六日大織冠祭料田前畑高三斗壹升七合加地子ニテ上ル元日藥酒三月三日桃サケ九月九日
菊サケ同廿五日神事酒料ハ永峯ヨリ壹斗六升上ル三月廿三日造作酒御飯六月朔日醴料ハ相河ハ
上井水領貳斗并村中入用分出ル

右之外三十三度神供澤本ハ京升四升指上ル四升ハ藪下ハ八升已上五斗二升也何下飯一膳ツ、本
家江此外餘時之供物獻之大御供ハ五升中ハ三升小御供壹升ツ、料米ニテ神主ヲ調進ス

右ハ舊記改新書記所也尙故實ハ裏ニ記者也

元祿十丁丑正月吉日

小山 戸 村(以上表文)

右年限餘リ久敷相成事故板茂古相成文字及難分依之今般思立書寫し置者也

夫神を祭るニ散齋致齋といふ事あり神社ヲ修理し掃除等怠慢なく神事を執行ひ式等之禁を法に
定テ外清淨ともいふ又致齋ともいふ顯教なり六根清淨ニして一心信ニ住す是内清淨にして散齋
なり依密意に注顯密二儀皿重四位の密言三體一致之道理にて齋は齋庭忌服諸穢は憚有之前々よ
り彦太郎廣座は紀氏は先の神主今の源七郎也、垣内座は多氏善十郎已後座を廢ヌ本家及神主家
藤はらの時忠の末胤にて藤原なり神竈まか也茲誌す各名乗加也故ニ神事祭禮の諸式ヲ宮侍中よ

り勤來なり。

一平ト云ハ天祿ヨリ已來他所ヨリ來テ住スト見タリ姓氏不詳往古ヨリ座平共ニ不斷ニ足打折敷ニテ物喰事ヲ憚ル親ヲ登々ト云ヲ憚庵王可成妻ヲ加々ト言憚座多平ハ彌々可成然ルヲ兩年寄ヨリ寛文五巳年九月加々ト呼度ト懇望有一會を催し久右衛門妻ハ於添へ其次郎妻ハ加々ト本家ヨリ許之此後不成浪亂事ハ古法ノ隨一也恣尙號スル事ハ夢ノ一ツ也贈號道號モ准之猥之客僧略妣テ尙號贈トモ可憚之尤官名太夫名ハ宮侍ノ一二老限ル古法也

一當社正月八日仁王會ハ永祿稔ヨリ已來ハ本家ニ勤事夫ヨリ已前ハ不講之若シ此流儀殘説

一宮侍座中ノ内他國他所ニ住居而立歸座加ルニ無憚他所ニテ儲タル子ハ足灌キ言清メ可入也

一一度袖乞食して身命を遺ルものは其身一代座の交不成其子は不苦ナリ

一當山峯に餘降右之上に先ノ神主一族久藏と云者小便ス自^レ之常ニ小便此事に不覺伏ても起ても小便に出ル也是第一不審なり其後當村惑迷出で南都に徘徊す無通路也

一當村坊ノ右馬と言もの、弟行仙房といふ文祿ノ頃當寺に住持檢地奉行より謬て檢地帳を書す當村元高四百卅石余の所此僧惡しき申立高百石載ル我が住寺は村中の物百疇の所を高七石餘に載兄右馬が高は大分に引下ル無神罪不逆右馬カ子源右衛門ハ當村沽却して古市に走ル源七郎也延寶六年先神主屋敷同前田を寺領ニ付ル以前ノ田神主に付又は替地に成當寺之領田能成也

一先神主新九郎左近太夫與八郎六左衛門弟共四人本多内記殿ニ足輕を勤十石に三人扶持玉る家福優也依之不斷獸食を好兄弟四人孫之迄斷絶ス

一九月廿六日水分恆例之例祿小升三升ツ、往昔より座中江出す例なり然るを只今ハ壹斗八升座カ壹斗九升村中カ合三斗七升也夫故此恆例は昔し天祿年中ノ頃より始り舊記にも例祿樂頭等之事見たり久しく無中絶恒例と言共延寶年間より上を憚り等略を用斷絶す因茲神事古法等も廢往神は誠道を守り玉い七郷庄屋不吉災難に相テ替果甲岡村三右衛門と北うじ吉品兩人斗り無恙依之再興之事を思立と言とも年ひさしく中絶に及により難叶茲ニ元祿六酉年夏大旱魃す此とき七郷會合して恆例之能再興可仕雨乞ニ立雨降事修し此とき例祿小升貳石を付此方にての飯米遣す管永代能怠慢無之管樂頭代梅木新十郎と申談し七郷の座席諸式此ときに連判にて極諸事古法ニ立歸郷中も穰に治る當村之祿も此ときに相定兩年寄は永拜殿亦是假屋の内に居す假屋のまへ壹間半荒芝居は惣平中より居神德新成事は恐も尙恐ある可信可貴と也

右之書記者也

一森が本の小塚を崩し田地と成す大いにたゞり長助一族二年間に七人死依之如本塚築改るなり死者長助女房七助勇兵衛半助女房小三郎甚六長藏也

氷室神社

福住村大字福住^{松ヶ}谷ニアリ。創立ノ由來ハ社頭既ニ傳説ヲ失ヒシモ、元要記ニ

山邊郡

風土記云仁德天皇六十二年五月下旬額田大中彥皇子薨于攝國關鷄時皇子自山上望瞻野山有物其形如鷹遙瑞光登仍遣使者令視還來曰竊也傍任長八尺人侍髮眉皓白容姿佳麗召關鷄稻置大山主問之曰有其野中者何竊矣啓之曰氷室也……天皇大悅自是以後每當季冬必藏氷室至春分始散也其後允恭天皇三年辛酉朔正月下旬攝國關鷄氷室倭國山邊郡宮造鎮壇三田宿禰令遣使欲皇丹心禮幣乃咨獻爾後例人聞此事名福住之氷池宮曰關鷄尾名其池茅荻池有病者飲池水多愈云云風土記裏書曰十七代仁德天皇御宇攝國難波郡關鷄氷室也……四十三年元明天皇御宇平城郡春日野氷室也或書吉城河氷室奈良京始也五十代桓武天皇御宇山城國平安城郡葛野郡宇多氷室也其後國々處々勸請也

トアリ、額田皇子ノ關鷄野ニ薨シ初メテ氷室ヲ觀コレヲ齋ラシ歸リ天皇ニ獻ゼシヨリ氷室ノ獻進永ク國例トナリシコトハ載セテ國史ニアリ。此風土記ノ上段ハ即チ其ノ事蹟ヲ記シ、允恭天皇以下ハ氷室社ノ創立ヲ記セルモノナリ。コレニ據レバ當社ハ允恭天皇ノ三年正月三田宿禰詔ヲ奉ジテ社殿ヲ創建シ、以テ氷室ノ靈ヲ祭レルナリ。爾後都ヲ遷ス毎ニ氷室ヲモ京城近傍ニ置カレシモ、都介氷室ハ根本ノ處ナルヲ以テ永ク供進ニ預ラシメシコト延喜式ニ見エ、原文關難氷室、ノ下ニ引ケリ隨ツテ當社ノ祭祀モ亦官幣ニ預レリ。

氷室神祭 五色薄施各一尺。倭文一尺。木綿四兩。麻三兩。鐵一口。米六升。糯米。酒各一升。

大豆。小豆各二升。鰻八兩。堅魚一斤。鮓。腊各六升。海藻一斤。凝海藻四升。

氷池神十九座祭。座別。五色薄施各五寸。木綿一兩。麻二兩。米酒各一升。鰻堅魚各五兩。腊十一兩。海藻凝海藻各五兩。鹽五合。坩一口。右每年十一月祭之。

氷池風神九所祭。山城國五所。大和國一所。河內國一所。近江國一所。丹波國一所。所別。五色薄施各一尺。米一升。酒二升。海藻一斤。雜魚二斤。祝詞料商布一段。右若有年溫氷薄。隨即祭之。尋常寒歲不在此限例。

ト是ナリ、抑當社ノ祭神ハ氷室ノ靈ニシテ別ニ神祇ヲ祭リタルニハアラザレドモ、後世ニ至リ更ニ關鷄稻置大山主・額田大中彥皇子ヲ祭リコレヲ氷室神ト稱セシハ、南都ノ氷室社春日氷室ノ遺跡ノ祭神ニ徴シテ明ナリ。北氏ノ開書覺書ニモ

氷室社ハ應神第一ノ皇子額田大中彥都祁山中ニ狩仕玉ヘバ山頂ニ氷室有テ時老翁出テ氷ノ好持ハ豊年也不持ハ凶年也我ハ此所有守氷室。都介直稻村稻置也ト云皇子此氷得奉天皇。是氷室起也其後丹波桑田移ル、ト云額田皇子禿良有額田部西村墓所有。○按ズルニ額田部西村ニ墓所有リノ字面何ノ意ナルヲ詳ニセズ今額田部村ハ福住ノ西ニアリ故ニ先ノ神主ハ額田氏ト云フ。

福住村ニ氷室社有リ……都介尾山ハ東成山ヲ云つげ野に大山守の納置し氷室ハ今もはやさりにけりト云ハ爰ノ歌也後ニ丹波へ移シ玉ト云額田皇子社有稻村頂有トアリテ、享保ノ頃マデハ當社ハ單ニ氷室ノ靈ヲ祭リ額田皇子・關難大山主ノ二社ハ別ニ在リシヲ、

後、故實ヲ失ヒ皇子大山主ヲ以テ直ニ氷室神ト稱シタルモノノ如シ。筒井諸記ニ「山邊郡福住城地

井福住七郷鎮守社城戸村ニアリ 氷室大明神自往古勳請別當眞言神宮寺ト見エ、嘗テ福住七郷ノ鎮守タリシモ今ハ

郷社トナレリ。

註 郷社ニ昇格セシハ昭和六年七月ナリ。

天神神社 東里村大字染田ニ在リ、因テ染田天神ト稱ス。菅原道眞朝臣ノ靈ヲ祭ル。縁起ニ據ルニ貞

治二年多田ノ住人源順實菅公ヲ信仰シ、偶々其ノ畫像ヲ得爲ニ創祀スル所ト云ヘリ。

註 現在村社春日神社ノ末社トシテ、其ノ境内ニ坐ス。

大和國山邊郡東山内染田天神縁起

伏惟。法性堆。而忘。語言巷。眞如退。而斷。思議道。然而權跡應。物而千品。大士施。化而萬差矣。蓋聞。天滿天神者爲。觀音之同塵。現。宰官身。利。衆生。入。震旦之經山。受。衣。施。益於我朝。者雖。ト。祠於。北野。從。堅固之信心。垂。跡於處々。給。然。則峻々高峯。杳々深谷。十之八九者無。非。天神之靈瑞。利。生超。于世。靈驗異。于他。甚以明也。偉哉文道。太祖歌道。領袖也。天許聖奉。號。太政威德。天滿天神。末代。奇特之尊體。和國相應之靈神也。爰。大和國山邊郡東山内多田順實。依。信仰之至極。雖。演。每月一。座之哥詠。無。奉。拜。於尊像。之間。朝夕愁吟。晝夜令。欣求。之處。貞治年中旅行之仁。不慮將。來於。御影。成。奇異之思。尋。其出所。旅人不知。於行方。是。併。順實之望。通。神襟。歎。仍。結衆。買。得。料田。每

年之千句于。今無。退轉。者也。雖。時及。於澆季。靈威新。于世。不可。勝計。於。每度之千句中。及。異香。度々。之間。御影向其無。疑然者此。一結衆蒙。尊神擁護。子々孫々繁昌。千句經營。未來永久無怠。於。千。句結縁。道俗。者同預。現世安穩。後生善處之巨益。仍。所。錄如。右。南都興福寺住侶。延。張。房。訓。營。爲。天神。結縁。書。之。訖。

此時順實自ラ催主トナリ、毎年四季ニ山邊・宇陀兩郡ノ郷士及ビ南都諸山ノ僧侶ヲ山内ニ會合シ千句ノ連歌ヲ詠ズ。爾後恒例トナリ、永祿七年マデハ絶ユルコトナカリシトナリ、世ニ所謂染田天神ノ千句會是ナリ。

開書覺書曰 染田村ニ天神ハ貞治二年ニ旅行僧來多田順實ニ影ク飛梅ノ圖ヲテ御直筆也彼像ノ○僧行方不知夫ヨリ順實黨結宇陀山邊郷侍南都芥山内山諸山僧侶會合而毎年千句興行貞治二年ヨリ永祿七年マデ二百年間不絶發句脇第三三三物卷數十卷、寄進狀年預帳縁記數通有

北吉品記曰 貞治年中ニ多田順實、菅原太政ヲ信敬ス于時一人ノ沙門來リ菅原ノ像ヲアタヘ其行方ハ不知誠ニウルハシキ御像也庭前ニ飛梅アリ是唯筆非ストテ染田寺ヲ造立シ毎年四季ニ千句ノ連歌ヲ奉リ又其告衆中ニハ南都東大興福菩提山ノ僧綱、多田、牟山、白石、南殿、友田、小山戸、福住、仁興、菅原、豊井、豊田、上笠間、小倉、深川、檜枚、山邊等ノ郷士也其次第八年預ヲ定メ是ヲ造用ス千句發句脇第三三三物ノ卷數百卷并縁記、連衆、染田天神之社ニアリ

當社ノ創立及ビ千句會ノ由來ニ關シ、縁起・北氏ノ記録ニ載スル所大要斯ノ如シ。然リト雖モ當社
 藏年預次第ヲ閱スルニ、應永中ニ多田實春アリ、永享中ニ多田春千代アリ、文安ヨリ長祿ニ互リ多
 田順實アリ、所謂貞治二年ヨリ長祿四年マデ其ノ間約百年ノ懸隔アリ、順實饒令百年ノ長壽ヲ保ツ
 トスルモ、幼孩ノ順實何ノ知ルアリテ天神ヲ信仰シ爲ニ歌詠ヲ演ズルノ理アラシヤ。且ツ千句會ノ
 事ハ當社藏貞治三年ノ古文書ニ創見スレバ縁起ノ説ノ如ク貞治二年ノ發起トシテ差支ナキモ、之ヲ
 順實ノ開催トスルハ年代相合ハザレバ其ノ誤傳タル自ラ明ナリ。要スルニ貞治二年ノ頃ヨリ山内ノ
 郷士諸山ノ僧侶天神講ヲ結ビ千句ヲ詠進シツツアリシヲ後、順實天神ノ畫像ヲ獲更ニ之ヲ以テ天神
 ノ神體ト祭りシモノナルベキヲ、終ニ貞治・文安・長祿トノ時代ヲ混同シテ斯ク謬リ傳ヘタルモノ
 ナラン。姑ク疑ヲ存シ後定ヲ俟ツ。

抑千句會ナルモノハ主トシテ東山中ノ豪族ノ開催スル所ニ係リ、講中ニ於テ田畑ヲ買收シ或ハ之
 ヲ寄附シ、其ノ收入ヲ以テ用途ニ充テ且ツ當年預ヲ定メ一切ノ事務ヲ擔當セリ。山内ノ多田・小山
 戸・友田・白石・南殿・福住・仁興・荻原・小倉・深川・笠間・牟山・迎田・豊田・豊井、宇陀郡
 ノ檜牧、山邊ノ豪族、東大・興福・菩提山ノ僧侶等之ニ參會シ、當時頗ル盛會ナリシガ、應仁以後
 諸士干戈ヲ事トシ或ハ滅亡シ或ハ退轉シ、恒例ノ會合ハ廢絶シ隨ツテ社頭亦衰微シ今ハ終ニ一無格
 社タルニ過ギザルモ、所謂千句ノ懷紙料田ノ寄進狀及ビ沽券文等ハ幸ニ祝融ノ災ヲ免レ依然トシテ

存在ス。大和全國諸社中古文書ニ富メルコト春日社ヲ除カバ恐ラクハ當社ノ右ニ出ヅルモノナカル
 ベシ。此等ノ文書ハ獨リ社頭ノ沿革ヲ知ルベキノミナラズ、歷史上必要ノ材料タルニモ拘ハラズ徒
 ラニ社壇ノ下ニ委棄セラレ、今ヲ距ル百數十年前享保中北吉品爲ニ袂褙ヲ加ヘ之ヲ保存セシモ復タ
 一人ノ願ルモノナシ。故ニ今特ニ數通ヲ掲載シ參考ニ供ス。

賣渡 作主職事

合壹段者 本地子貳斗
增七升

在大和國山邊郡蘭生庄之内

四至坪付等庄屋目錄在之

右件作主職ナル小法師丸買得相傳之處也多年領掌無他妨間依有要用限直米參石伍斗愛夜
 女令沽却事既了但難爲何時奉本直米返之時者彼作主職可歸給依爲後日證文新券文之
 狀如件

文和五年丙申二月 日

庄常 □ 花押
淨賢

賣渡 作主職
ウリワタス 水田サクソシキノ事

合一段者 本チシ一斗升シャウ升

在大和國山邊郡蘭生庄
アリタイワコクヤマノヘノゴツリキウノシヤウ 七郎名内コレアリ

山邊郡

東限際目 西限荒島
四至 ヒカシカキルサイメ ニシカキルアレハタケ
ミナミカキルサイメ キタカキルサイメ

右件作主職者先祖相傳作主也然今要用依直
キ米三石五斗ニカキリテ小法師殿ノニナカタトヲクウリワタスコト明白ナリキヤウコウサラニ
他妨有依後證狀文ノタメシヤウクナムノコトシ
曆應 三ノ年 カノトノ
リヤクヲウ三年 ミ

教 圓 花 花 花 花 花 花
ア イ タ シ 丸 圓 花 花 花 花
メ 女 花 花 花 花 花 花
押 押 押 押 押 押 押 押

賣渡 作主職事

合壹段者 本地子貳斗 增七斗

在大和國山邊郡蘭生庄之内 字下田

四至坪付等庄屋目錄在之

右件作主職者愛夜女買得相傳之處也多年領掌無他妨之間依有要用限直米參石伍斗天神講衆中本券等相具令沽却事既了永代更不可有他妨仍而後日證文狀如件

貞治三年甲辰十一月十八日

愛夜女花押 仙覺花押

沽却 島地新券文事

合壹ヶ所

在大和國山邊郡蘭生庄成佛名内

四至等 在本券之面

右件島地者小藏庄觀世音寺買得相傳之領地也而今依有要用限直米二石テ、山内天神講方令沽却□實正明白也多年知行之間更無他妨於向後不可有違亂相違者也仍爲後日沙汰相副本券文同放新券文之狀如件

貞治五年丙午三月 日

小藏觀世音寺知事花押

沽却 田地新券文事

合壹段者 字水浦庄之内ナカレ
作地邊

右件田地者尼妙圓相傳之私領也多年知行之間無他妨候也雖然今依有要用直米限七石仁永代白石藏坊之良妙坊ニ令沽却事實正明白也但彼田者ツシマトノ、山屋敷下ノ島ニ立□者トシ若違亂出來之時者可放本直米者也於向後不可有違亂妨者也仍後日爲證文之狀如件

貞治五年丙午十一月廿一日

賣人 尼妙圓花押
嫡男 春日丸花押
地藏 □花押

沽却 水田作主職事

合四段者 加地子

合壹石貳斗也
天神講升定

在大和國山邊郡南殿庄 サイタノ名之内

四至一段二町田 東溝堤 南□西シハ北溝川
本地子 四斗二升アリ

一反コイケ 東田南山 西道北□ハ
本地子 五斗二升アリ

一反瀧ケ本ノ下切 東他領ノ田 南他領ノ田 本地子六斗アリ
西川 北地領ノ田

一反ヲヲミトノ下切 東ツハミ 南カイトノハタケ
西地領之田 北他領之田 本地子六斗アリ

萬雜公事等者下作之沙汰也

右件水田作主職者南殿甲岳之九郎先祖相傳之私領也多年知行之間更ニ無_ニ他妨_ニ而依_レ有_ニ要用_ニ限_テ直米六石_ハ山内天神講方奉_ニ沽却_ニ事實正也若此作主違亂妨并未進懈怠□□時者同名之内ヲヲミトノ中切一反ノ作リヲ質物ニ入是ニ於テ違□□本米返申候ヘシ但當年ヨリ八年_{自辰}九年_{自巳}十年_{自日}ニテ此三ヶ年ノ中ニ本米ヲモテ□返申候若此兩三年ヲスキ候ハハ無_ニ別流_ニ又奉_ニ流候_ニ依_レ而如件

應安二年己三月八日

南殿甲岳ノ九郎

ユツリワタス 作主職事

合壹段者 本地子十一合五斗白石坊へ此内ヲ引物アリ
公事每年四月人夫出油田ヨテ加地ハカハラス

在大和國山邊郡白石庄内大坪ノ大道ノ西ノウラ

四至限 東大道 西地類源八作
南岡地類治郎作 北地藏田

右件田者辰二郎方ヨリ與一カイトリテ候ヘトモ子細アルニヨテ米伍斗十合ヲ□□間辰二郎カウリ文アイソヘテ此作主職ヲ多田殿へ永代ユツリワタス去出之狀如件

康暦元年己九月 日

白石庄ノ與一花押

ユツリ出 水田作主職事

合貳段者 本地子段別十一合五斗代此内油分三升井料二升供米一升五合
ヒナリ供米五合□□段別引也加地子合六斗十一合段別三斗代

白石庄田油田大□上切一段下切一段此田ハ油田ニヨテ加地子ハカハラス

右件田者順相傳也トイヘトモ天神講ヲサタスルニヨリ今叁石十合□ノ外ニ此田ヲ天神講中ヘウリハタスモノナリ本券文等アイソヘテ出會之狀如件

康暦二庚申五月 日

順 花押

サリ出 水田作主職事

合壹段者 本地子五斗十一合此内油ノ分ニ三升引井料
一升五合段米五合ヒナリ段米五合引ヘシ

白石庄内字大ツロー上切

右件作主職者與一相傳之私領ナリトイヘトモ仔細アルニヨツテ米七斗五升十一合□□間彼作職

ヲ本券文アヘソイテ永代多田殿ヘユツリワタスモノナリ向後自他ノ違亂アルマシク候但今年彼田ヲ三作半ニツクリテ三分ニヲタ、トノヘマイラセ候ヘク□□之狀如件

康曆貳年癸申卯月廿二日

白石堂垣内與一花押

沽却 水田地作并新券文事

合壹段者 加地子 □米モ此内邊
加テ 賣買申ハ

四至

字山辻下切壹段云々

右大和國山邊郡白石庄内 在之

右件之水田地作□者松若丸買得相傳之私領也多年知行之間□敢無他妨而然今依有要用宛直米五石^{十合}奉令沽却却多田殿方所實正明白也於向後子々孫々不可有違亂妨者也但自丙寅年十ヶ年内者雖爲何時以本直米五石可奉返請候過十ヶ年者別之無流又可奉流永代候仍爲後日證文之狀如件。

至德三年丙寅二月六日

白石東 松若丸 花押
内方 加賀女 花押

沽却 水田地作之事

合壹段者 地子壹石 宇東之前案燈之并尻上切在之

在大和國山邊郡白石庄内有之

限四至 東□塘 南地類之田
北島岸 西ナワテ

右件之水田地作共者松若丸重代相傳之私領也然者要用直米五石十合ニカキリテ加地子反米其ニツケテ永代多田之如一房方へ賣渡事實正也但五斗一石ツ、ノ地子ヲ可進上候若懈怠□ハ、何時ニテモ此作ヲ□離タレ可申候向後更ニ他妨アルマシク候仍爲後日證文如件。

至德四年丁卯三月十四日

白石東 松若丸
内□方
請人白石西室.....花押

賣渡 東山内針ヶ別庄米間料足事

合壹貫貳百文者

右福住重代相傳之爲私領公方所役執沙汰申者也雖然依有要用相當錢伍貫文限永代奉賣渡之發志院順堯御房事明白也於向後更附子々孫々不可有違亂煩候拾ヶ年ノ内本錢買返申候者自元不可有子細候也馳過契約之年季候者可流申上者不可及□□仍爲後日代支證沽却狀如件。

應永廿貳年乙未十月十九日

福住 岩石丸花押

御内方 花押

證人 山田殿 花押

奉寄進 東山内天神講千句經營料足事

合壹貫文者

右件斷足者針ヶ別所庄水間料足壹貫貳百文實弘自福住買得相傳而已及十餘年者也然此内於貳百文者針別所如法經方寄進畢今於壹貫文者相副彼賣文爲千句經營合力奉寄進上者每年爲年預之知行令收納之可被成經營之足就中千句中每日人別觀音經一卷宛轉讀之可被祈請施主現當二世悉地成就之由仍寄進狀如件

應永卅四年丁未七月十日

發志院願亮房 實 弘 花 押

沽却 水田地作共新券文事

合壹段者 字水涌庄之助ナカレ田
地子壹石十一合定

四至明々也

右件田地者先師良如房買得之私領也數年知行之間更以無他妨雖然今依有要用直米限四石伍斗七永代山内天神合沽却事實正明白也則本券渡了於向後不可違亂申者也仍爲後代明鏡新券文之狀如件

應永廿四年丁酉十一月 日

尼舜名 花押

沽却 白石水田地作事

合壹反半者 字ツ、ミノ田下切地五合一石二斗者

在大和國山邊郡白石庄内

右件水田者故白石堯舜坊并善順房兩人忌日料田而可被寄附于西發志院堂田以降數年知行敢無其煩雖然彼在所爲遺所之上無類地之間爲毛見等難儀非一也仍限六貫五百文永代令沽却于天神講料所者也以件錢買取近所料田兩人忌日可勤修之但於寄進狀者書載于過去帳被破之□□於萬一□出帶之族者可被處盜人之狀如件

應永廿五年戊戌五月十五日

嚴 尋 花 押

奉寄進 染田庄内峯下島事

合壹所者 地子百伍十文所也
此内伍十文ハ夏可上 百文ハ秋可上

右子細者於天滿天神御寶前朔日三日十一日二十一日二十五日每月五夜爲御燈油領也志者爲奉祈心中所願決定圓滿永代所奉寄進之狀如件

永享八年丙辰六月 日

迎田 實 順 花 押

白石庄内天神講田事

山 邊 郡

一段壹石 山辻下切地作トモ 此外カチシ 反米上ヘシ

此内一斗 チヨウメン今年始也 下作文倉坊ノ御房二郎

一段一石 アントウノ上切地作トモ 此外カチシ 反米上ヘシ 十合升天神講升也 チツクリ

合貳段玄米二石ナリ 此内壹斗 山辻

右件田者地作トモニ□□藤井寺如一房ノ田ナリ然ニ天神講田長谷ノ地子一反四貫七百文ニウル
代文應永八年辛巳天神講田ノ地子分五貫文申春ヨリ合九貫七百文ニテ藤井寺ノ二反ヲカイリテ
本券トモニ天神講中へ出者ナリ永代不可子細者也仍之狀如件。

應永十一年甲申五月 日

順 實 花 押

沽却 水田作主職新券文之事

合壹反者 本地子六斗アリ

字ツ、ミトシリ

四至明白也

在大和國山邊郡白石庄内有之

右件ノ水田作所職者尼明照房之先祖相傳之私領也多年知行之間敢以無他妨者也然今依有要用直米
宛貳石貳斗地子升定令沽却白石堂□八郎方へ實正明白也但自壬戌年一六年目者以本直米可

被申請戻候仍爲後日證文之狀如件。

永德二年壬戌二月二十二日

白石房明照花押

奉寄進御燈之事

右明年千句之時油壹升隨而料足壹貫文進之以利子永可有其沙汰仍狀如件。

應永三十年卯年五月十七日

律師英勝花押

沽却 水田地事

合壹反者

在大和國山邊郡相川庄内 字相川口

四至 限東地類田 限南溝川 限西大道 限北山

右件水田者與一先祖相傳之田ナリ多年知行之間更ニ無他妨而今依有要用限于直米貳石七斗五升永
代天神講方令沽却事實正明白ナリ向後更ニ不可有違亂者也若干萬違出來之時者可致別辨候仍爲後
日證文於新券文之狀如件。

應安元年戊申正月六日

相川與一郎○
子息彦太郎+

奉寄進染田天神宮千句方料田事

山 邊 郡

合加地子壹斗五升代

字名白石庄
カキシリホソフサ

右志趣者爲祈現世安穩後生善所奉施入彼料所永代限於子々孫々違亂煩不可有者也仍後日證文狀如件。

文龜貳年壬戌十月廿八日

施主 與三左衛門 家定花押

○

天神講年預次第

一番	車山殿	二番	白石殿
三番		四番	
五番		六番	
七番	豊田殿	八番	
九番	上笠間殿	十番	

天神講田數事

白石アントウノカミキレ
一段 一石 地作共 負所反米一同

白石山ツシノシモキレ
一段 九斗 地作共 負所反米一同

白石ツウツホノアフラキレ

二段 六斗

ミナミトノ庄ラウミト

二段 小四斗 地作共

ミナミトノ、タキカモト

一段 一斗四升分地作共

六斗本地子カタ

イウノ庄キタ

二段 八斗五升地

サウカウ庄内一升五合反米引

一段 五斗五升 地作共

三光院ヨリ新寄進

新寄進田數事

白石庄内ナカレタ
一段 一石 十一合定 地作

白石庄内コヤノシリツ、ミノ田切ニ
一段半 一石二斗 地作共

ミナミトノ、庄ノ内コイケタニ町田
二段 參斗一升作

壹貫文 水馬料足之内
寄進針別所庄

發志院

毎年連衆事

□雖不被注置爲天神結縁又爲後見自當年記之

一自應永二十四年丁酉五月三日於多田遂行畢所殘料足七百文次之年預水涌殿渡畢

山邊郡

連衆 一、鶴、賀、案、英、廣、立、正、香、與、秀、以上十一人

當年預 實 春

一自同二十五年戊戌十一月二十六日於水涌令始行畢

當年預 實 詮

連衆 詮、弘、英、案、賀、老、正、春、經、一、滿、力、以上十二人

當年預 實 經

一同二十六年己亥九月於牟山令始行畢

連衆 案、山、弘、性、廣、英、一、加、秀、貞、經、順、之、同、以上十四人

一同二十七年庚子六月五日令始行訖

當年預 東山邊殿

連衆 長、詮、豐、之、康、清、遍、山、一、滿、加、順、廣、案、英、性、都、經、慶、以上十九人

人

一同廿八年辛丑六月廿日於下笠間始行

當年預 定 勢

連衆 力、了、弘、英、一、也、前、案、香、秀、廣、干、詮、以上十三人

一同廿九年壬寅六月十九日於仁興始行

當年預 英 算

連衆 英、全、弘、順、廣、力、實、加、秀、一、香、滿、經、性、康、秋、以上十六人

一同卅年癸卯五月十四日於藤井始行

當年預 性 圓

連衆 廣、阿、二、雲、貞、遍、尋、力、弘、英、一、順、加、晏、□、秀、時、秋、康、以上十九人

後朝一
座有之

一同卅一年甲辰七月廿五日於坊始行

當年預 迎田實順

連衆 阿、山、詮、弘、力、廣、英、一、實、順、秀、晏、加、若、康、清、以上十六人

一同卅二年乙巳七月五日始行

當年預 荳原英實

連衆 廣、詮、弘、長、性、直、力、英、田、一、實、順、滿、加、春、秀、若、康、以上十八人

一同卅三年丙午六月八日始行

下笠間定勢

以此次立願千句果申畢

連衆 □、重、□、廣、弘、力、英、一、順、俊、晏、加、秋、康、以上十四人當年預上笠間定俊

一同卅四年丁未七月七日始行了

當年預 多田實春

連衆 合十二人

一正長元年戊申之分依延引同二年己酉三月廿六日於白石大聖寺始行

當年預 白石實詮

連衆 詮、力、弘、英、俊、晏、加、若、秋、康、以上十一人

一正長二年己酉卯月二日於牟山寺始行

當年預 牟 山

連衆 廣、力、英、一、松岡、順、秀、晏、德、加、若、康、以上十二人

山邊郡

一永享二年庚戌七月十七日始行於下笠間

當年預 東山邊殿

連衆 香、周、超、山、詮、力、俊、順、晏、加、若、慶、秋、以上十三人

一同永享三年辛亥六月三日始行於下笠間

當年預 定 勢

現納五石五斗五升在之

連衆 香、仁、弘、力、晴、俊、晏、加、秋、 己上九人

一同永享四年壬子七月廿日於藤井始行現納米伍石貳斗三升并貳百五十七文在之

當年預 性 圓

連衆 香、弘、山、木、詮、廣、松、順、□、加、祐、 以上十一人

一永享五年六月廿一日於仁興始行

當年預 英 算

現納伍石貳斗參升并貳佰伍拾柒文在之

連衆 山、超、弘、來、淨、廣、力、俊、順、拾、晏、加、春、英、 以上十六人……………

一永享六年六月四日於迎田始行 現納參石陸斗在之

當年預 實 順

連衆 賀、直、山、重、覺、中、詮、弘、力、英、順、拾、俊、晏、加、廣、森、春、若、 以上十九人

一永享七年七月廿六日於下笠間執行

當年預 上 笠 間

連衆 俊、順、晏、力、明、香、加、弘、定、春、千、 以上十一人

一永享八年丙辰七月廿五日於染田寺始行畢

當年預 多田春千代丸

連衆 弘、直、香、木、高、晏、順、加、春、存、福、若、 以上十二人

一永享九年丁巳七月十八日於下笠間執行畢

當年預 公 定

連衆 福、弘、香、實、廣、爲、中、重、順、政、俊、晏、加、若、定、春、 以上十六人

一永享九年丁巳九月十六日於染田寺始行之小山戶殿立願千句

連衆 兼、加、政、晏、香、全阿、順、俊、懷、春、若、 以上十一人

一永享十年戊午六月廿五日於染田寺始行畢

當年預 小倉殿政實

連衆 弘、香、木、等、廣、政、順、車、祐、重、代、加、盛、春、若、 以上十五人

一永享十一年己未八月廿三日於大聖寺始行畢

當年預 白石殿實盛

連衆 木、重、廣、政、順、定、代、盛、加、若、子、晏、 以上十一人

一同永享十一年八月廿七日恆例千句次檢牧殿立願千句在之御前句夢想在之連衆以前二同シ

一同永享十二年卯月一日於當社染田拜殿祈禱之千卷心經在之結願御異香□薰衆人成寄特之

念 謁仰合掌處ニ異香猶增□也當社春日四御殿爲同體御本地觀自在尊□天滿天神又然也由緒

依異他彌成奇異思多田春千代丸記之者也

一同永享十二年十月十一日於_三染田寺始行畢

當年預 矣山殿春藤丸

連衆 重、木、政、性、順、晏、賢、加、代、忍、盛、子、藤、以上十三人

一嘉吉元年十二月五日於_三染田寺始行畢

當年預 山邊殿泰綱

連衆 重、木、泰、政、理、件、順、晏、實、千、加、一、若、子、增、椿、以上十六人

一嘉吉二年九月廿七日於_三下笠間始行畢

當年預 下笠間殿公定

連衆 木、水、松、公、晏、政、海、順、加、定、郷、舜、固、子、以上十四人

一嘉吉三年六月六日於_三仁興始行畢

當年預 仁興殿春福丸

連衆 弘、高、加、恩、固、盛、子、春、仁、木、公、宗、雅、覺、賴、福、順、以上十七人

一文安元年十一月一日於_三染田寺始行之

當年預 豐田殿賴英

連衆 賴、順、實、鳥、若、加、知、重、固、三、政、土、盛、以上十三人

一文安二年十一月三日於_三染田寺始行之

當年預 迎田殿實順

連衆 順、土、固、實、重、春、代、養、澤、加、松、三、以上十二人

一文安三年正月廿五日於_三上笠間始行之

當年預 上笠間殿定俊

連衆 土、代、實、政、定、也、澤、加、固、重、盛、海、須、藤、以上十四人

一文安四年三月廿五日於_三小藏始行之

當年預 小藏殿政實

連衆 政、三、定、實、春、養、固、次、澤、加、重、若、土、賴、等、順、舜、以上十七人

一文安五年七月二十三日於_三染田寺始行之

當年預 多田殿僧順實

連衆 實、固、加、泰、明、重、養、俊、政、順、葛、貞、若、澤、春、賴、次、以上十七人

一寶德元年十一月三日於_三白石始行之

當年預 白石殿僧長實

連衆 長、澤、順、晏、若、加、惠、賴、英、松、政、以上十一人

一寶德二年九月二十七日於_三染田寺始行之

當年預 矣山殿春藤丸

連衆 春、泰、實、定、固、壽、晏、種、加、順、若、師、仙、政、以、春若丸、春□丸、賴、春阿、

以上十九人

一寶德三年十二月十八日於_三小藏觀音寺

當年預 山部殿廉綱

連衆 廉、順、固、朝、晏、加、鳥、忍、澤、政、立、仙、綱、定、吉、實、春藤丸、已上十七人

一寶德四年二月十八日下笠間始行之

當年預 下笠間殿公定

連衆 定、嫁丸、政、加、鳥、養、晏、固、澤、仙、舜、順、以上十二人

一享德二年七月四日於_三仁興極樂寺

當年預 仁興殿春福

連衆 福、晏、臨、專、泰、固、實、長、參、加、春、若、賴、賢、以上十四人

一享德三年甲戌十一月三十日於_三染田寺始行之

當年預 豐田殿賴英

連衆 頼、泰、弘、固、晏、宣、以、政、加、鳥、竹、定、以上十二人

一享德四年乙亥三月十二日於嚴松院始行之 當年預 上笠間定俊

連衆 宣、政、加、傳、固、與、養、舜、春、八、丸、定、福、秀、阿、以上十三人

一康正二年丙子卯月八日於觀音寺始行之 當年預 小藏殿實榮

連衆 政、實、宣、頼、加、與、氏、固、育、鳥、定、晏、順、春、澤、長、次、立、福、以上十九人

一長祿元年丁丑十一月六日於染田寺始行之 當年預 迎田殿春福丸

連衆 玉、泰、順、重、與、頼、加、固、巖、政、旂、澤、晏、定、直、海、若、千、實、已上十九人

一長祿二年戊寅卯月二十七日始行之 當年預 多田殿順實

連衆 順、□、與、泰、定、加、巖、頼、政、固、以上十人

一長祿三年乙卯十二月六日於大聖寺始行之 當年預 自石殿長實

連衆 長、舜、頼、巖、式、松、固、晏、專、牧、圓、玉、以上十二人

一長祿四年庚辰五月二十七日於染田寺始行之 當年預 多田殿順實

連衆 實、若、辨、登、政、頼、固、金、玉、舜、圓、定、生、藤、丸、以上十三人

一寛正二年十二月十五日於染田寺始之

連衆 實、尋、春、養、定、固、頼、登、公、育、舜、晏、藤、以上十三人

右今年之御千句年預雖山邊岡殿頭當時違返之際無力爲連衆致出錢而取立恆例之儀所也

千句發句脇之次第 應永廿二年十月廿七日始行之
於下笠間殿

山 何 年をへて宮井も久し松の霜 力 延

冬菊ながら花の白木綿

何 人 山風は月の夜降る時雨かな 也

雪かや霜の松のあけほの

白 何 木の間より瀧見に□□落葉かな 香 弘

風のくくれや松のふるらん

朝 何 下水を嵐のうつむ木葉哉 加 力

こほらぬ方にたかき川おと

何 舟 さかりなる菊には冬の色もなし 善 力

おきかさねたるしもの下くは

何 路 影やまたのこりてこほる朝月夜 忠 延

さむきあらしにそよくくれ竹

何 物 深霜の花にはもれぬ草木かな 弘 善

小篠のあられ風も音して

何 木 梅に花少春の冬木かな

葉もおく霜はしらつはきなる

千句發句脇次第 應永廿八十二
於水涌原

冬梅は雪をも花と宮居かな

人 松にもかゝる霜のしらゆふ

明けふか見はやす雪の朝附日

初 くれなゐまてはさかぬ冬梅

よしやゑし木々の梢の六の花

木 ふるや霰の玉つはきなる

路 歸らぬ日や…雪のうすくもり

山 しくれを残す峯の松風

月残り夜の雪みる朝かな

葉もまたらなる竹の霜こり

雪高し千代ふるやとや庭の松

香 英 入

順 満

加 順

力 性

満 俊

俊 力

満 俊

俊 力

満 俊

俊 力

満 俊

何 人 舟 初 木 路 山

満 力 俊 俊 満 性 力 順 加 満 順

竹

冬としもなき常磐木の色

花開て春まつ雪のこすゑかな

白 松の青葉は冬もかはらす

豊なる年のためしを深雪かな

二 ふらて雨きく木からしの音

雪に見ていなくき高き冬田かな

唐 草のかれふは風しつかなり

ふるゆきのしらゆふかくる井かき哉

見とりに春のちかき神松

永享九年九月十六日御千句發句脇第三 於染田寺始行之
小山戸實兼立願

木 利生多き神も代々ふる千秋かな

居垣の松を紅葉ひさしき

山までも月てらす夜はさたかにて

路 朝露の日ことにそむる紅葉かな

秋ふく風を音にしくるゝ

加 春

千 本

實 名

千 性

實 若

名 加

性 晏

實 順

兼

兼

兼

兼

兼

兼

兼

船

深山路は里遠からの鹿鳴て

若

峯の雲月よりふくる夕あらし

德

霧たちいるゝむら雨のそら

俊

下紅葉松は青地の錦にて

兼

春も見し花やこすえの秋の□

重

青き草葉の中のしらさく

晏

星めくる夜は長月もあけそめて

香

空に見ぬ長月おしきしくれかな

加

木の葉の上の松の下つゆ

兼

夕あらしふけゆく秋にあらそひて

重

筆たかし花久かたの天津ほし

香

霧のまかきは秋をへたてゝ

重

嵐あらしのきりに吹たつ木末かな

若

葛の紅葉を松をそめたる

政

有明をあかねさす日の空みえて

俊

唐

初

人

字

山

恆例御千句發句脇第三 於三染田寺在之頭人實英 應仁二年戊子九月十六日 題十紅葉

山

何 關白 松あをく紅葉はあけのゐかきかな

實

英

御戸のにしきかさける秋萩

覺

尋

神と月光を代々にやはらけて

春

千代

何

人 第二 心うむやと哉庭の菊もみち

降

晏

間かきの露を秋をふかめる

延

意

山の端のきりのうちより時雨きて

延

惠

何

路 第三 からにしきはたおる庵もみちかな

公

定

花さく菊を折にあひぬる

公

舜

秋の日に庭の眞砂の霜きえて

良

育

唐

何 第四 紅葉ちりくれなゐくゝる秋の水

良

育

夕日の影そきりにうつろふ

實

定

何

木 第五 山高み紅葉にもれぬ千里かな

延

惠

雨の後蔀をこゆる月はれて

唯

阿

山 邊 郡

風のこえ野□らになれははけしくて

降 則

白 何第六 おほへ雲見えは嵐の下紅葉

延 惠

時雨し山の秋ふかきころ

賢 壽

嶺高く有明の月にあらはれて

覺 尋

花之何第七 紅葉して照そふ月の木間かな

覺 尋

松のあらしの衣さむきころ

頼 英

衣打里より秋や深ぬらん

公 舜

朝 何第八 ふりせきて紅葉に過る時雨かな

公 舜

風やよそなる木々のしらつゆ

唯 阿

秋の夜も月に向へは□□かして

延 意

何 鳥第九 露よりも日数の染るもみち哉

實 定

有明て□□月は□□□□

隆 則

ほのかなり垣に遊へるつるのこゑ

賢 壽

何 船第十 夕きりの晴て御山の紅葉かな

延 惠

岩もすゝき花□□□□しかな

諸うつらかはらぬ中を床しめて

公 定

於小倉 恒例御千句發句脇第三 應仁元年九月二十一日

何 木 菊そ花やへかきかざる神の庭

實 定

宮井の松の露のしらゆふ

禪 紹

御しめなわ長夜わたる月はれて

養 阿

心をも紅葉にそむる山路かな

慶 英

木かけの秋はたゝ風のをと

春 増 九

水こゆる岩根に浪の露ちりて

禪 侶

白 何 幾秋のかけそ□さ□谷の水

頼 英

ふちせの浪にうつる紅葉は

公 定

薄 何 川上の霧のはれ間も舟うけて

英 勝

月待て嶺にくもらぬ紅葉かな

延 英

夕日うつろふ秋の山々

公 舜

山 何 野を見ればわたる小鳥のかす□ひて

頼 英

山 何 菊の織色香はふかきころもかな

承 元

山邊郡

草のたもとそ花にう□ぬる

良 育

雨過る庭の籬に露みえて

慈 朝

何 路 ゆきかへる雲や紅葉のむらしくれ

賢 秀

なひきうひぬる月のあさきり

承 元

何 袋 宿いて、寒さと山の秋のきり

良 育

夕露になひくや菊の花かさね

公 寛

色つく草木露のしたにて

隆 晏

有明の見初る□□のそら

公 舜

二字反音 下紅葉松のはまての色もかな

養 阿

馬のかづらにかゝるあさ露

公 寛

日をさむみ峰のを鹿のたゝす□□□

公 丸

何 鳥 花やしる年へてすめるやとのきく

公 定

かけなる月の庭の池水

喜 撰 丸

行秋に鶯なくこゑに夜はさえて

隆 晏

何 物 世にてるやそめ星あめかした紅葉

隆 晏

四方にさやけき有明の朝

慈 朝

雲路にも數あらはるゝ雁なきて

公 寛

國津神社

都介野村大字南庄ニアリ、村社タリ。祭神詳ナラズ。都祁水分社縁起ニ當社記ヲ載ス。コレニ據レバ祭神ヲ御裳洗川ノ餘流ト云ヒ、其ノ創立ノ如キハ例ノ附會ニシテ固ヨリ信ズルニ足ラズト雖モ、大凡寺社ノ創始ハ斯ル傳説ニ起因スルハ當時ノ通情ニシテ獨リ當社ニ限ルベカラズ。且ツ其ノ記事ハ旁ラ山内七郷ノ史料ニ供スベキモノナルヲ以テ、ココニ其ノ全文ヲ掲ゲ參考ニ供ス。

南殿庄國津大明神記

圓融院御宇天祿三壬申年伊州阿閉郡二位峰、云所國津大明神御座同御裳洗川之流也而神主職於則清庄司與則元太夫年來及相論兩方令勤番處則元太夫依爲威勢有德之仁則清庄司爭論負畢、然則清兄弟三人相共擬云今ハ被奪取彼神職上ハ既失面目畢然間奉取彼御神體白石可趣他國ニ由云云二月上旬初午日奉隱取御神體白石泣々出家郷欲赴河州高安郡處和州山邊郡都介郷南殿庄上田ト云所大木一本有之柏木也彼木乃本仁茂乃刻仁尋來彼白石於此木乃元仁奉置經一宿翌日曉天仁欲退出之處彼御神體白石曾以不_レ上給間則清太夫祈誓申云我自本國已來不可飯舊里志切也其意趣定令知見給覽可然者至河州仁高安郡仁則清親族多於彼所奉崇可奉歸敬之由祈念雖懇切猶以天土中仁沉入利不_レ浮上給之間無力奉守護之處落涙

難禁夜半計仁示天言久汝未知否於郷内御裳洗川乃流天照大神宮乃御分神最初應現之勝地奈利願我此郷内仁跡於垂天水分大明神乃眷屬ト成衆生利益化度利生於施ント欲スト此言ヲ聞則清兄弟三人操然ヲ流涙敬比畏テ……然間以飛脚二階堂院主件子細令言上之處仁可奉崇之由被仰下間同四月八日奉造社奉崇廡號二位峯其後天延一甲戌年二月上旬仁社傍仁建立御堂安置釋迦樂師之二像號二位峯觀音寺則清庄司建立也○正徳五年ノ書入曰代々神主職ニ庄司職ヲ用フ觀音寺ハ有リ堂カ平ト云三間四面堂跡礎石今ニ有社傍ト有事不審也次男則定同三乙亥年同庄内甲岡ニ建立寺家安置十一面觀世音號甲岡別所之觀音寺○同云今甲岡三男則近國津大明神之面之岡仁建立御堂安置阿彌陀如來一號安置寺一跡ト云亦小勢山トモ云此寺兄弟三人皆共有德仁也而安養寺顛倒シテ無跡形今二所有之○同云二位峰ハ殘今ニ行也五所之小神ト申ハ則清等之一族ヲ神ト崇ト云々

長承三年之比南殿國津大明神之神主則清兄弟三人之子孫斷絶彼社破壞之間南殿下司百姓等二階堂院主言上申言彼國津大明神與水分大明神者天祿年中仁有御契約以來異于他御座然上者彼社頭可有御造立由令言上間不可有子細之由被仰下同九月八日手斧始木瓦葺ニ奉造替者也同廿一日上棟同十月十二日造立畢同十五日南殿社寶堅也南殿造替之用脚者南殿庄御年貢足自二階堂立用而遂結解畢其上五節供料新被付之

承安之比南殿庄下司百姓等訴申云水分大明神與國津大明神依由緒御座二位已講迄ハ彼社造替ト

水分造替一回仁御沙汰也以彼由緒於南殿庄ハ被付當庄國津大明神之社頭修造等料米於水分分宮造營段米者可蒙免除由依令言上事子細被聞召彼由緒訴申之處有其謂歟所詮於南殿庄段米半分被付彼社頭造營之料米於今半分ハ水分社修造修理等之時無懈怠可出之由時定使金樂法師仁被仰付之間下司百姓等開眉下迎云云仍南殿者於水分社造營等修理修造等反米拾肆町之分出之者也……

山邊御縣坐神社 丹波市町大字別所縣ニ在リ、或云フ二階堂村大字并戸堂ニアリト據ナシ當國六御縣社ノ其ノ一ニシテ山邊御縣神ヲ祭ル。延喜式神名帳ニ「山邊御縣坐神社大月次」天平二年大倭國正稅帳ニ「山邊御縣神戶、稻貳伯陸拾貳束□把半、租壹拾束、合貳伯柒拾貳束□把半、用肆束、祭神、殘貳伯陸拾捌束□把半、」新抄格勅符抄ニ「山邊御縣神二戸大和」トアリテ、古ハ盛大ナル社頭ナリシモ漸次衰微シ、今村社タリ。

白堤神社 朝和村大字長柄ニアリ、式内村社タリ、俗ニ白鳥明神ト稱ス。日本武尊ヲ祭ルト云フモ據ナシ。案ズルニ姓氏錄大和ニ「白堤首天櫛玉八世孫大熊命後也。」ト。疑ラクハ白堤ノ祖神カ、後考ヲ俟ツ。

夜都伎神社 同村大字乙木宮ニアリ、式内村社タリ。祭神詳ナラズ。

石上市本神社 元要記ニ「石上市本神社延喜式曰山邊郡石上市神社、中宮牛頭天王左稻田姫右南海神

女……此社陽成天皇天慶五年辛丑仲夏奉齋延喜以後火災御體失墜ト。コレニ據レバ流布ノ神名帳ニ石上市神社トアルハ、市ノ下ニ本ノ字ヲ脱シ其ノ祭神素戔嗚稻田姫トアレバ、今ノ標本ノ治道天王ト稱スルモノハ即チ石上市本社ナルベシ。標本ハ磯上ニ隣リ地勢相接スレバ古其ノ地亦石上地方ナリシナラン。

註 神社明細帳ニ石上市神社丹波市町大字石上字古ヤシキニ五番地ニ鎮坐トアリ。

祝田神社

延喜式神名帳ニ見ユ。今丹波市町大字田部ノ村社舊稱天神社ヲ以テ式内ト稱ス。此レ大和志ニ「在田部村今稱天神」トアルニ據リシナラン。而モ大和志ノ云フ所何ニ據ルヲ知ラザルナリ。案ズルニ石上神宮略抄ニ曰ク

田村庄司吉田連系譜

吉田連ハ春日臣ト同祖ニテ天足彦國押人命ノ五世孫鹽乘津彦命大口納命子也ノ後ナリ十代崇神天皇御世鹽乘津彦命ニ勅シテ任那國ノ鎮守トシテ彼國へ遣ス時ニ此卿ノ俗宰ヲ稱シテ吉トナス故ニ其苗裔氏ニ吉ヲ負ハス鹽乘津彦命廿一世孫從五位上吉宜此人ノ事跡八頭神社ノ下ニ引ケル村公氏ノ系譜ニ見ユ、參考スベシ從五位下吉智首或作知須等當國山邊郡田村里ノ河川俗ニ田村邊ニ家居ス神龜年中ニ勅シテ吉宜、智首等ニ吉田連ノ氏姓ヲ賜フ天平寶字年中ニ勅シテ從五位下吉田連智須、田村ノ宮後ニ神離ヲ起シ今木賢木ヲ立テ日本武尊ヲ祀リ奉テ鎮守トス遂ニ吉田連等ヲ祝部ト定ム仍テ祝田神社祝部吉田連ノ略語歟

トアルヲ尙同略抄ニ

祝田神殿一座在田村去神宮田村舊宮人皇四十六代孝謙天皇天平寶字年中欲改修大宮移御田村新宮然後稱田村舊宮ノ後ニ坐ス今木神ハ日本武

尊也天平寶字年中從五位下吉田連智首或云知須カ祭所ナラン名テ祝田社ト云フ延暦元年癸亥十一月十

九日今木神ニ從四位上冠位ヲ授ケ奉ル遂ニ平安城へ遷都之時今之山城國葛野郡平野之地ニ神格ヲ

ナサシム第一殿祭レル今木神日本武尊是也

トアリ。コレニ據レバ祝田社ハ丹波市町大字田村ニアリテ、天平寶字年吉田智首ガ今木神即チ日本武尊

祭レル所ニシテ、即チ今山城國平野神社ノ本社ナリシナリ。田村ノ法林寺ノ寺傳ニ田村ノ舊名ヲ今

木里ト稱スト云フモ亦故ナキニアラス。

八龍神社

註 二階堂村大字田井庄ニアリ。

田井莊司村公氏略系譜石上神宮略抄所引曰 都祁村公ハ吉田連ト同祖ニテ正五位上宜後也宜男從五位下

兄人從六位上弟人等宅ヲ分テ弟人ハ都祁村今福住里是也此里於今至ニニ居ス然後ニ弟人ハ村長トナ

ル天平寶字年中ニ都祁村公ト氏姓ヲ賜フ弟人十世庸敬ハ貞觀年中ニ都祁里日谷ヨリ八劍神ヲ石上

郷ノ新神殿へ神格ヲナス故ニ庸敬ハ日河ノ下ニ宅ヲ遷シテ祝部トナリ都祁ヲ略シテ村公ノミ氏姓

トス

石上神宮略抄曰 八劍神劍一座在田井庄村去神宮西凡二十餘……當國布留川上ノ日谷屬都祁郷ニ臨幸有テ鎮坐

ス貞觀年中吉田連カ族都祁村公神殿ヲ造テ神格ヲナシテ八劍神ト申ス今ノ田井庄村八頭神社是也ト見ユ。創立ノ事跡自ラ明ナリ。

註 神社明細帳ニ、八劍神社田井庄第二三番地鎮座トアリ。

下居神社 註 神名帳ニ見エ、都介野村大字吐山ノ村社コレナリト云フ。祭神詳ナラズ。

註 神社明細帳ニ、下部神社トアリ、神名帳モ亦同ジ。祭神ハ彦八井耳命トアリ。

豐日神社 丹波市町大字豐日山天神ニアリ。三代實錄ニ「貞觀五年十一月六日乙丑授大和國豐日神從五位下」ト即チ是。祭神詳ナラズ。

石成神社 續日本紀ニ「神龜三年七月乙未。遣使奉幣帛於石成。葛木。住吉。賀茂等神社。」日本後紀ニ「承和六年夏四月壬申。是日。……發遣零使等……大和國石成。須知等社。」ト即チ是。續日本紀考證村井元ニ「和名抄大和國郡名山邊郡石成以志奈利備前國亦有磐梨郡石生伊波奈須郷見同書。按天平神護元年三月紀云近衛從八位下別公蘭守等賜姓吉備石成宿禰。石成與石生磐梨。邦訓皆通因地命。姓者也。姓氏錄右京皇別山邊公和氣朝臣同祖。依此石成神疑山邊郡和氣氏等所主祭。」トアレドモ社已廢シ址詳ナラズ。

佛 寺

佛 寺

來迎寺 都介野村大字來迎寺本ニアリ多田來迎寺ト稱ス。阿彌陀佛ヲ本尊トナシ、淨土宗光明寺末タリ。寺記ニ草創ノ由緒ヲ記シテ

爰開山天德二戊午年春淳味阿闍梨云道德僧此地來靈地見歎其昔號涅槃山行基菩薩開基。雖有墓所無一字。依一舍建立發起結庵室閑居時不至於當地。入滅。此上人生國不分明。比叡山出上人古書見何此地一字造立地見定假庵室結置德者然歎中興開山者天德二年百五十六年星霜經永久二

甲午年相川居城安倍九郎則宗常發心成。思今安置本尊定朝所作彌陀吐山安置時靈夢是於北方涅槃山云靈地有此地一字造立出離結緣。依告速發心入道隱士號蓮阿。當寺開基六間四面本堂建立。本尊吐山奉遷涅槃山。蓮城院來迎寺號玉

ト云ヘリ。之ニ據レバ例ノ行基ノ開基ニシテモト墓所タリシヲ、天祿二年淳味ナルモノ棟札ノ記文ニハ高野山沙門トアココニ來リ一字ノ草庵ヲ結ビ閑居セシガ、爾後百五十六年ヲ經テ永久二年ニ至リ、相河ノ蓮阿俗名阿倍則宗始メテ六間四面ノ堂ヲ建テ定朝作ノ彌陀佛ヲ安置シ之ヲ蓮城院來迎寺ト稱セシナリ。然レドモ淳味其ノ人他ニ所見ナケレバ果シテ此等ノ事跡アリシヤ否容易ニ信ズベカラズ。而シテ建武四年了尊ノ記文原書當寺藏ヲ開スルニ

來迎寺 由來之事

當時者永久二年庚辰春自比以來送死人於此野[]墓所者也然間顯鏡阿闍梨結界畢

東ハ向山ノ峯ヲ限ル西ハツエタテノ川ヲカキル南ハアマツ、ミヨリ墓尾ノ道ヲカキル、北ハ出ノ地藏ノ大道ヲカキル

限此内、結界者也同田高山内等伊賀公經實之御寄進也寄進狀ハ別紙ニアリ貞應貳年辛亥始建立御堂奉安

置本尊於等身阿彌陀如來脇土地藏觀音貞澄之願主者沙門蓮阿彌陀佛、相河庄住人○異本ニハ此間ニ

行書入アリ云々トニ其後送數年星霜之間御堂令破壞、雨露滴佛殿、爰蓮阿之孫子僧了尊不思議靈夢之間

建立御堂事

正應二年己丑二月十三日二番目御堂棟上

正安三年辛巳二月八日又御堂廣建立了

嘉元二年甲辰春秋二季逆修始執行

同三乙巳八月十日僧坊造立

建武三丙子二月三日堂重建立今堂是也

凡了尊當寺住持五十餘回之間御堂之修造忽而四ケ度同庫裏等造營畢

建武四年丁丑五月十五日

住持沙門 了尊花押

ト見ユ。是、建武四年現住了尊ガ手録ニ係ル、宜シク以テ正トナスベシ。所謂顯鏡ハ何レノ時ノ人ナルヲ記セズト雖モ、寺記ニ

境内田島ハ中村伊賀公經實當地ヲ領ニ依歟寄進之境内事東向山峯ヲ限ル南兩邊ヲ限ル西ハ松立川ヲ限ル北ハ地藏大道ヲ限ル右此境内結界シ追々建物造立地内門前田地二町餘、又荒處凡田畑數二町五反餘修覆料ト赦免地ノ免許狀于今有、中村伊賀公五輪神主等有之

第二世○寺傳ニ淳呼ヲ第一世トナセリ故ニ云フ阿闍梨顯鏡廣瀨郡中村家嫡孫俗名保元二年住職此僧台家ヲ立ラレ依テ當寺

暫ク台家寺務ス顯鏡代々追々墓所ヲ弘諸方也、又近隣山内地武士追々繁昌所々在城士當寺ヲ歸依

大檀那ス爰建保二年甲戌多田滿仲九代後胤下野守高賴公男○此ノ間子ノ宇源經實公父老翁高賴召連

此郷ニ落來是ヨリ一里東福島佐比山ニ築城郭居城ス依此地多田庄ト號ス當寺歸依大檀那成靈寶

等寄進之……經實公次男出家シ顯鏡弟子ス號了日依之多田家名免是ヨリ當寺モ多田ト稱來承

久三年七月顯鏡阿闍梨遷化第三世了日……

トアレバ、モト廣瀨郡中村家ノ一族ニシテ保元ヨリ承久ニ互レル人ナリ。中村家ハ多田氏ニシテ伊

賀守經實ハ即チ中村ヨリ福島庄ニ移住セルモノナリ。事、多田城ノ下ニ詳ナリ。經實ノ田島ヲ寄附

シ大檀那トナリシハモト顯鏡ト俗縁ノ因ミアレバナリ。

而シテ了尊ノ記文ニ據リ當寺ノ創立沿革ヲ記センニ、寺地ハモト荒野ニシテ永久二年ノ春比ヨリ

稍ク衆庶ノ墓所トナリシモノニシテ、當時未ダ四至ノ結界サヘナカリシ塚原ナリ。後當寺ノ山號ヲ
 涅槃ト稱スルハ蓋シ之ニ起因スルモノナリ。然ルニ寺記ニ行基ノ開基ト云ヒ或ハ天徳中淳畔ノ草創
 トスルハ、後世ノ住僧等寺家ノ由來ヲ舊クセンガ爲ニ捏造セルモノタルコト亦辯ゼズシテ自ラ明ナ
 レバ今之ヲ取ラズ。而シテ廣瀬郡中村家多田滿ノ族ニ法名顯鏡ナルモノアリ、保元ノ頃ヨリ此處ニ
 仲ノ後來リ草庵ヲ結ビコレニ住シ、爲ニ四至ノ境界ヲ定メタリシガ、建保二年ニ至リ中村經實一族ヲ率キ
 東山ニ來リ、遂ニ福島庄佐比山ニ城キ之ニ居ル、是多田氏ノ祖ナリ。經實・顯鏡ト俗縁ノ因ミアル
 ヲ以テ深ク之ヲ信仰シ、若干ノ田畠ヲ寄附シ終ニ次男某ヲ弟子タラシメ以テ其ノ法嗣トナサシム。
 然レドモ當寺尙一草庵ニシテ未ダ本堂ノ設ケナカリキ。是即チ當寺ノ草創ニシテ、多田氏ノ當寺ニ
 關係ヲ有スル亦實ニココニ起因スルモノナリ。顯鏡承久三年七月入滅シ弟子了日即チ經實ノ嗣。貞一
 應二年初メテ本堂ヲ建立シ、定朝作ノ等身彌陀佛并脇土地藏觀音ヲ安置ス。沙門蓮阿俗名阿倍九郎則
 宗相河ノ住人之ガ願主タリ。爾後數十ノ星霜ヲ經堂宇破壞セシニヨリ、正應二年現住了尊之ヲ再建シ正安三年僧
 坊ヲ造立ス。建武三年又本堂ヲ造替セリ。了尊ハ蓮阿ノ孫ニシテ即チ記文ノ筆者タリ、曆應元年正
 月入寂ス。

元祿縁起曰 中興開山隱士號蓮阿彌陀佛俗名者相川村住號阿倍九郎定朝所作彌陀三尊安置
 之修專念……第三世了尊阿闍梨開山蓮阿嫡孫也從正應二年五十餘回住當寺。曆應元年正月廿

二日寂

ト。因ニ云フ、寺記ニ蓮阿ヲ永久中ニ係ルモ了尊ハ實ニ其ノ孫ニシテ、入滅ノ曆應元年ハ永久二
 年ヨリ殆ド四百年後ニアリ、然ラバ蓮阿ノ當寺ヲ建立セシハ正ニ貞應中ニシテ永久ニアラザルコ
 ト甚ダ明ナリ。

了尊ノ弟子ニ西念坊アリ、牟山ノ人ナリ、嘗テ室生龍穴ヲ信仰セリ。應安元年歲大ニ旱ス。西念爲
 ニ雨ヲ祈リ驗アリ、依テ供目代ヨリ寺領南殿庄木原名ノ諸公事ヲ免セラレ、免許狀當寺ニ傳ヘテ今
 尙存在ス。

免許南殿庄木原名諸公事

合壹町一反者

右連日炎天超過往年因茲田畠乾燥草木枯稿學牟山陰士西念承祈雨之嚴旨詣于室生山龍池
 抽懇念致精誠者龍神垂於感應即日降甘雨於率土殆爲希代之効驗者哉然於勸賞者可
 任于意樂之旨議定之處幸彼令競望之間來迎寺領木原名壹町一反諸公事等爲六方集會評議而
 永代令免除之畢依爲後代支證免許之旨如件

應安元年六月廿日 供目代花押

東山中諸處ニ善如龍王ヲ祭レル處多カルハ、西念ノ祈雨ニ起因セシナルベシ。又寺邊ノ十三處ノ石

塔モ西念ノ建立セルモノナリト云フ。

元祿緣起曰 西念坊元來牟山陰士常詣室生山龍穴現請龍神々托祈雨忽得其妙僧也於當寺爲雨請賞田地壹町一段應安元年下之其許狀在子今十三重石塔十三基所々造立

寺記曰 爰无山陰士西念坊了尊弟子トス……了尊上人元應元未年正月廿日入寂ス元ヨリ西念坊居士……住職同様ニテ當時取立又嘉曆二年當寺ヲ初近隣寺院ニ石十三重ノ塔造立事十三基所也

文安中山内諸士施主トナリ本堂及ビ諸建物再建アリシ由寺記ニ見ユレドモ、此事元祿緣起及ビ古文書ニ所見ナシ。

文龜・天文ノ頃山内ノ諸士會集シ寺家ノ爲ニ掟ヲ定ム。原書今亡シト雖モ寺記ニ其ノ文ヲ載ス。

定來迎寺掟條々

一於子結界之中 殺生禁斷之事

一就寺領 山木於子盜取輩者壇方面隨見相□之處五百文之過代之事

一會所之儀堅可令停止之事

一陣取禁制之事

一於寺家雖有紛之子細壇方へ可被相届之事

小夫 吐山 小山戸 多田 輛田 南殿 大門

簾岡 窪 迎田 相川 新宗 白石 甲岳

文龜二年壬戌十一月三日

來迎寺御侍者中

於來迎寺掟之事

就今度馬借之儀 檀方ニ而定申上者此以後背掟事候者領主ニ而堅可有成敗者也若其科無露顯者被相糺明爲諸檀方申合可被加生害者也

天文元年壬辰九月五日

新宗 北輛田 北田 相川 多田 吐山 迎田

南庄 小夫 窪 大門 小山戸

來迎寺靜運上人御房

トアリ。小夫・新宗以下ハ山内ノ地侍ニテ即チ當寺ノ檀那ナリ。天正以後諸士兵亂ニ退轉シ、殊ニ天正十八年大檀那多田氏亡ビシヨリ寺家頓ニ衰へ、境内土民ノ爲ニ蠶食セラレ遂ニ來迎寺ノ新村ヲ立ツルニ至ル。然レドモ小山戸氏ハ連綿トシテ檀越トナリ、十七世康松以來北氏ヲ以テ寺里ト定メタリ。

寺記曰 第十七代康松上人小倭北氏ノ産後住依 之北氏厚取立是ヨリ代々北氏寺里ト定ム天正年中所々亂逆ニ依、山内近隣郷士追々衰悉滅亡多田殿同十八年寅夏筒井伊賀守供小田原ニ下リ其後無歸陣或山内一統北島ニ隨ヒ伊賀伊勢出陣シテ討死其跡散亂ニテ悉滅亡依之當寺無構ニ成歸依家々退轉ス又天正十九辛卯年蟻腰釣鐘ハ郡山城主黃門ニ被沒收一境内往古四町四方ノ處門前迄檢地打込被滅二町四方ト成ル門細川ヨリ外田島二十六石二斗二合ノ高地ニ成依之右門前住宅ノ者追々増屋地等墓地也境内貸地置……天正前後門前大五輪石牌等廟ニ屋舖開道々カシ地ト成

爾後愈々衰微シ爲ニ無住トナリシコト前後數回、每ニ北氏私資ヲ投ジテ僅ニコレヲ維持セシト云フ、寺記曰 第十八世遼玄和尚播州出生文祿二年住職然モ當寺衰微依同三年退院

第十九世懷空上人城州ヨリ住職文祿四年也北氏ヲ里ス然ルニ康松上人若年ニテ入滅ス前後散亂時節此前後無住有リ記錄悉ク難知……和尚同十月入滅

第二十代懷道上人先師法弟、慶長三戊戌年住職迄、三年許無住、留主居許前後不明分此^{同カ}北氏ヨリ賄七八ヶ年以前ヨリ不^ニ相續故田畑山林等賣拂又ハ被沒收出作地等モ此時代ニ及ニ散亂歟寛永中東都ノ僧空譽來リテ入院シ、痛ク衰頹ヲ慨キ堂舎ノ破壊ヲ修理シ、土田ノ侵掠セララルモノヲ恢復シ、正保元年善導大師像ヲ奉ジ京阪・堺・大津・伊賀・伊勢・東都ヲ巡廻シ多方施財ヲ募リ、同三年八月歸寺シ久シク中絶セル滿仲ノ回忌ヲ興シ、同四年本堂ヲ造營シ、慶安年中鐘ヲ鑄テコレ

ヲ掲グ、是即チ今ノ建物ナリ。

寺記曰 第三十二代空譽蓮山上人江戸御旗本伊澤氏ノ産芝相續當國ニ來居寛永二十未年入院是迄代々北氏ヨリ世話空譽ヨリ大破追々普請田畑等取調失地等吟味ス……空譽正保元申歲大師靈寶江戸開帳……諸人知之參詣群集獻物廣大也開帳終五月歸國次正保三年大師肖像洛陽伏見・難波・泉州・江州・大津・伊賀・伊勢廻國勸化八月歸國爰滿仲公年忌中絶ノ處當年八月相當ニ付六百五十回勸同四年本堂再^建慶安二丑年播州姫路・備中福山・備後鞆・長門・藝州廣島等國々營勸化同慶安三寅年釣鐘建立鑄物師南都藤原住筑前守^{吉忠}作之……覺譽^{三〇三十}其年空譽上人文珠院へ隱居

雜事

當寺ニ寶物ト稱スルモノ數十點ヲ傳フ。先年九鬼圖書頭ノ調査ニテ優等品ト認定セラレタルモノ十餘點アリシニ皆賊ノ爲ニ盜マレ、僅ニ惠心曼陀羅ノミ取戻シタルモ追捕ノ際賊コレヲ水中ニ投ジ逃去リシヲ以テ、處々剝落シ復舊觀ヲ存セザリシガ、小牧本縣知事コレヲ惜ミ、私資ヲ以テ之ヲ表装セシメ永ク寺家ニ保存セシム。彼ノ曼陀羅ハ當寺隨一ノ什物ナリ。即チ寺記ニ「當麻寺四分一萬陀羅^{惠心僧都多田滿仲公源家代}又嘉永元年寺家ヨリ地頭ニ差出セル文書ニ「當麻淨土曼陀羅^{惠心僧都筆長八尺五寸巾六尺多田滿仲公安置佛}」ト云ヘルモノニシテ、モト惠心、滿仲ノ爲ニ當麻ノ曼陀羅ヲ寫シ授ケタルモノニ係リ、爾後多田氏嫡々相傳セルヲ天正中多田家ヨリ當寺ニ納メタルモノト云フ

北吉品記曰 此等ノ淨土曼陀羅ハ多田滿仲ニ惠心僧都念佛御授玉フ此時當麻曼陀羅ハ彌陀觀音ニ人ノ尼ト化織與玉フ日本[□]像也僧都是奉寫滿仲ニ授玉ハ多田家而(今ハ多田院ト云)念佛不怠シテ往生シ玉靈佛ナレハ嫡々相傳而頼光ニ傳ヘ夫ヨリ頼國、明國、行國、頼守、高頼、基實、經實 下野守云建保承久ノ比和州福島郷ニ來住ス多田郷ト改ム、義實、實春、順實、範實、春守、盛實、順春、實賢 三川、政實、七郎、四郎政義、次郎實胤、天正九辛巳年筒井伊賀守ニ供ナヒ伊賀名張口々入玉同十八年庚□三月同供ニテ小田原ニ行歸陣無^レ之多田家滅亡シテ跡無^レ此本尊夫々前ニ當寺ニ治ル由

寺後ノ丘上ニ多田家代々ノ石碑ト稱スル五輪塔・石窠塔婆アリ、多クハ無銘、其ノ銘アルモノモ漫漶シテ明ナラズ。抑、當寺地ハ古墓所ニアリシヲ、顯鏡一庵ヲ結ビ四至ヲ定メ、貞應中蓮阿堂塔ヲ建立セシヨリ多田・小山戸ヲ始メ山内諸郷士ノ菩提所タレバ、其ノ盛時ニ至リテハ結界内ニ無數ノ石塔累々相依リシナラン。

寺記曰 第十六世康壽上人……永祿四戊午住……五輪ノ數改^ム是迄山内地武士家中代々五輪凡三尺ヨリ六七尺迄ノ三百餘其外郷民石碑等廣大也

天正以來諸士退轉シ隨テ寺家衰微スルニ及ビ、寺地土民ニ侵略セラレ墓所ヲ拓キ田宅トナシ、所謂來迎寺村ヲ立ツル頃ヨリ正保年中本堂再建ノ時マデニ彼ノ石塔ノ毀損セルモノハ悉ク堂舎民家ニ充用セラレ、其ノ大ニシテ全キモノノミヲ寺後ノ丘山ニ移シ建テ、後コレヲ多田家ノ石碑ト言做セル

モノナルベシ。

寺記曰 天正前後門前大五輪石碑等崩シ屋敷開追々カシ地ト成

北吉品記曰 多田代々石碑雖多銘文不見當山石碑卯塔幾千基ト云ヘトモ正保年本堂造改ニ崩石垣開石井石田ノ岸畑ノ岸ニ用百ケ一モ不殘何モ大和侍ノ舊窟也

法林寺 丹波市町大字田ニアリ、阿彌陀ヲ本尊トナシ眞宗本願寺末タリ。大和志ニ「常蓮寺在田村一名寶蓮寺應永二十七年緣起文曰舊名石上寺……」ト即チ是。 但シ應永ノ緣起今亡シ 創立ノ由緒ハ寺傳ニ當所ハ都介野ノ今來ノ里ト云フ。此所ニ文武天皇ノ御父皇壁皇子石上山法蓮寺ヲ建立セラル。其後保元ノ兵變ニ罹リシガ明應五年十二月十六日天足彦國押人命七世孫木事ノ子市川臣ノ末孫良智、眞宗ニ歸シコレヲ再興セリト云フモ記錄ノ微スベキナシ。但シ此地ヲ古ハ今木里ト稱スト云フハ據アルニ似タリ。田村ノ下ニ引ケル吉田連系譜參考スベシ。

龍福寺 布留山ノ北桃尾ニアリ、行基僧正ノ開基ニシテ十一面觀音佛ヲ本尊トナシ石上ノ神宮寺ト稱ス。慶長中寺領百石ヲ寄附セラレ坊舎十六ヲ有セリ。

和州寺社記曰 桃尾山 寺領百石坊舎十六軒 桃尾山龍福寺は行基菩薩開基し給ふ。古は七堂伽藍所なりしか、何時の頃よりか零落してわづか残り、本堂の本尊は十一面觀音傍に阿彌陀堂あり、……宗旨は眞言宗……

後稍ク衰微シ今ハ全ク廢類シ僅ニ礎石墻ヲ存スルノミ。

永久寺

丹波市町大字柚内ニアリ。永久中僧寛惠ノ開基ニシテ、鳥羽天皇コレヲ崇敬シ殊ニ宣旨ヲ下シ年號ヲ以テ寺名トナサシメ給フ。彌陀佛ヲ本尊トナシ亦石上ノ神宮寺ト號ス。徳川氏寺領九百七十一石ヲ寄附シ隨テ坊舎モ五十二ノ多キヲ有シ頗ル盛大ノ佛刹タリキ。

和州寺社記曰 内山永久寺寺領九百七十石 坊舎七十二軒 内山永久寺は鳥羽院の御願にて、御受戒の師寛惠上人開

基し給ふ靈場也永久年中草創し給ひ宣旨を下し賜る故に年號を以て寺號とす。……本堂の本尊は

阿彌陀如來云云○舊跡備考ノ意モ亦同 之但寛惠ヲ亮慧ニ作

今廢寺トナル。

本光明寺

丹波市町大字磯上ニアリ。寺傳ニ其ノ地在原業平ノ舊跡ナリシヲ以テ在原ヲ山號トシ元慶四年ノ草創ナリト云フ。十一面觀音佛ヲ本尊トナス。徳川氏ニ至リ寺領五石ヲ寄附シテ舊跡ヲ存セシム。事寛文寺社記ニ詳ナリ、文長シ就テ見ルベシ。

玉 葉

形はかり其なこりとて在原の

むかしの夜を見るもなつかし

良因寺

丹波市町大字布留ニ在リ、一ニ石上寺ト云フ。創立ノ時代詳ナラズ。天長中僧善守ココニ住

シ、後、僧正遍昭・素性法師等ノ名僧亦嘗テ閑居セシコトアリ。遍昭俗姓良峰氏ナリ、故ニ良峯寺トモ稱ス。今已廢ス。

後撰和歌集

いそのかみといふ寺に詣で、日の暮れにければ夜あけてまかり歸らむとてとまりて此寺に遍昭侍ると人の告げ侍りければ物いひ心みむとていひ侍りける

小 野 小 町

石の上に旅寝をすればいと寒し

苔の衣を我れにかさなむ

僧 正 遍 昭

かへし

世を背く苔のころもは唯一重

貸さねば疎しいざ二人ねむ

相 模 集

よしみねの寺にきてこそ千早振

ふるのやしろの紅葉をばみれ

東明寺廢

福住ノ中定ニアリ、福住氏ノ香花寺タリ。筒井諸記ニ

山 邊 郡

一筒井福住氏菩提所

眞言宗 忍辱山圓成寺末寺 福住別所村下之坊末寺

醫王山龍松院東明寺 中定村ニアリ

本尊藥師如來 但坐像 自往古安置佛師不詳 中興法師祐尊

筒井石塔

永正九〇

宗 二月廿二日

慶長廿年

花堂順榮大禪定門

五月二日

春江 大姉

天文

明譽春滿

永祿二年

岳 雲

六月三日

慶長七年

梅窓堯春禪定門

正月〇日

了名逆修

二月四日

元和三年

慶春禪定門

四月廿三日

但墓山高サ一丈餘廻リ四拾間餘

妙祐逆修

裏書

福住

筒井左京亮宗房

了 大姉

惠雲貞祐大姉

天文十九年六月十七日

右東明寺御石塔ニ御座候

中定村宗旨改帳云

眞言宗別所村下之坊末寺

中定村東明寺 無住

富村算用差引帳云

高十二石四斗二升九合

取五石貳斗三升二合八勺

内

外ニ山林徳分

東明寺

東明寺世話人

政 新 幸 介 八 右 衛 門

御上納其外差引村役人支配仕居候

凡五十年已前カも無住ニ御座候由

右之通開合セ相違無御座候以上

戊正月二十七日

筒井 壽 福 院
郡山 筒井 七 郎

トアルモ、寶曆六年六月火災ニ罹リ僅ニ本尊ノミ存セシガ今其ノ所在ヲ失セリ。

氣原伽藍址 豊原村大字毛原ニ在リ。礎石ノ數百七十餘徑各三尺餘ニシテ皆柱穴アリ、柱礎ノ間相距

ル各一丈餘アリ、是金堂ノ址ナラン。其ノ前ニ三箇處ノ門址アリ、礎石各十二、東西塔址亦礎石各

十二、石ノ大サ金堂ニ同ジ。此邊ニ瓦塚ト見ユルモノ數座アリテ處々ニ破壊セル瓦片ヲ散布ス。瓦

片ノ厚サ二寸許ニシテ裏面ニ布目アリ、鼻瓦ハ徑一尺二寸十六葉ノ菊紋ヲ形ハセリ。三ノ門ヨリ上

ル二町ニシテ土中ニ石ノ雁木アリ、又二三町ヲ距テ礎石十二アリ、是鐘樓址ナラントイヘリ。

山邊郡

聞書覺書曰 毛原村ニ言傳ニハ柿本人丸此所ニ大佛殿建立ノ礎有跡言在所中礎石百七十二有柱間
 壹丈程何モ川石ノ徑三尺余ノ青石也柱ノ居穴有金堂ノ跡ト見ル前ニ相心門、二門三門ノ礎石三四
 ノ十二ツ、何有石ノ大サ柱間金堂同東西兩塔ノ礎石右ニ同シ東金西金ノ兩堂ノ居石ハ不見瓦塚
 幾ツモ有、此下ニ有成覽瓦塚尋ニ碎テ軒ニ平瓦ノ軒瓦ノ八寸程成ヲ求得反布目ニテ厚サ二寸余有、
 鼻瓦ニテ文ハ十六葉菊也徑一尺二寸、是ハ時ノ有司江上稀也三門々二町余時阪也土中ニ石ノ雁木
 有由川隔テ四五町程モ田地也古ヘノ寺跡ニテ今ニ字名ハ寺號ト云、二三町モ隔テ鐘樓ノ跡ト云礎
 有、十二有、右ニ同山ノ尾崎也所、老人共尋トモ舊記無之
 斯ル絶大ナル伽藍ハ何レノ時何シ人ノ遺立ニ係ルカ國史・記錄ニモ所見ナシ。土人ノ口碑ニハ柿本
 人丸ノ建立セシ大佛殿址ナリト云フモ亦據ナシ。往時當處ニ氣原長門ト稱スル郷士住セシモ、此等
 ノ土功ヲ企ツベキ人トハ思ハレズ、其ノ由來詳ナラズ。

城 壘

豊田壘 丹波市町大字豊田ニアリ、豊田氏ノ據ル所ナリ。因テ其ノ址ヲ豊田殿ト字ス。聞書覺書ニ「豊
 田村ニ豊田殿ト云城跡有」ト即チ是。氏ハ天三降命ヨリ出テ世々ココニ住ス。享德・長祿ノ比豊田
 頼英アリ、南都大乘院領山邊郡勾田庄・田井庄等ノ下司公文職タリ。

大乘院御領御段錢日記 享德二年 曰 勾田庄 下司豊田 郡使徳一 九百五十文 田井庄 安養院 十一貫百文

御兵士引付曰 豊田分勾田庄公文田井庄下司……………此外在々所々且右年貢諸公事等無其沙汰一
 向如私領致知行……………

尋尊僧正長祿四年 正十一月 記曰 豊田頼英 下野 參ス對面酒井杉原一東扇一本給之同覺英相模扇一本
 給之畏入云々

正長中ニ頼英、文明中ニ豊岡、永正中ニ澄英・澄秀アリ、皆北畠氏ノ麾下ニ屬ス。永祿中ニ道見ア
 リ、豊田城主ト稱シ筒井氏ニ屬セリ。與力ニ今北・森岡・森田ノ族アリ。

國民郷士記 内閣藏筒井譜記ニ 曰 豊田頼英 天三降命苗裔豊田氏ト云染田天神 豊田下野守澄英 永正九年
 豊岡 文明十年 同道見 豊岡 六年 同道見

聞書覺書曰 豊田村ニ豊田殿ト云城跡有、文正元ニ豊田頼英享德三ニ豊田頼英連歌卷ニ文明十六

豊田豊岡宅ニテ千句、永正九ニ豊田下野ト云澄秀 正長六 千代も見む山路のきく

又曰 永享十一ニ梅は此花の春しる手向哉千句巻頭豊田殿頼 を手向哉 頼 英

春日社所蔵文書曰 一田井庄……………越田尻事……………永正十七年庚辰五月日豊田下野律師澄英

花押

同社金燈籠 大宮廻廊乾角ヨ 銘曰 天文七年十一月吉日豊田内方貴樂敬白 ○内方ハ妻ノ方言ナリ、年代ヲ推スニ澄英ノ妻ナラン

筒井諸記 井筒記 井筒記 曰 筒井氏山邊 郡豊田城主 豊田入道道見 永祿二 年ノ頃 同春藤 與力 今北、森 同、森田 右豊田家ハ天御中主

尊ヨリ出トモ云ヒ天三降命ノ苗胤ト云々

案ズルニ續紀ニ「天平二十年秋七月……………從五位下大倭御手代連麻呂女。賜ニ宿禰姓」トアルヲ、姓氏

錄 大和國 神別 ニ御手代首ハ「天御中主命十世孫天諸神命之後也」ト見ユ。天御諸命ハ即チ天三降命ノ別

名ナリ。長門國住吉荒魂社大宮司 中島 家 系圖ニ「天諸神命 一名天三降命字佐 宿禰御手代首等祖」ト以テ證スベシ。豊田氏

天三降命ヨリ出ヅ、疑ラクハ所謂大倭御手代氏ノ苗裔ナラン。道見ニ至リ筒井氏ヲ稱スルハ其ノ靡

下ニ屬スルヲ以テ更ニ彼ノ姓ヲ冒セルモノナルベク、猶、辰市家ノ大神氏ニ於ケル如キカ。記シテ

後考ヲ俟ツ。

岸田壘 トシ 朝和村大字岸田ニアリ、郷士記ニ「岸田平城岸田伯耆守」ト即チ是。案ズルニ姓氏錄ニ「岸

田朝臣武内宿禰五世孫稻目宿禰之後也。男小祚臣孫。耳高家ニ居岸田村。因負ニ岸田臣號。日本紀合」

トアリ。至德ノ長川流鐘馬日記ニ岸田殿見ユ。伯耆守ハ其ノ苗裔ナルベク筒井ノ靡下タリ。郷士記

ニ「岸田伯耆 筒井順慶定次ニ仕伊州阿保 ニテ二千石蘇我石川磨子孫」順慶葬式目錄ニ「岸田伯耆守 山邊郡」トアレバ、定次伊賀ニ

移ルニ及ビ之ニ從ヒ阿保二千石ヲ領セシナラン。

龍王山城 ノリノ 丹波市町大字藤井ノ西ニアリ、十市氏嘗テコレニ據ル。事十市郡ニ詳ナリ。

福住城 フクズキ 都介野村大字蘭生ニアリ、註福住氏コレニ據ル。郷士記ニ「福住山城福住家宗 ○家宗ハ宗 永ノ誤寫カ」ト即

チ是。氏ハ平城天皇ノ第五子山田皇子ヨリ出ヅト云フ。應永年中ニ岩市九ナルモノアリシガ早世シ、

其ノ母十市氏近衛信基公ノ子ヲ養ヒテ子トナシ、是ヨリ藤原氏ト稱スト云フ。

大和國名鑑舊軌圖 法隆 寺藏 曰 平城第五ノ皇子山田王ト云フ皇胤ニ岩市九ト云早世シテ繼カス母公

ハ十市家也近衛信基公ノ末子宗重ヲ家督ニ定ムト所ニ傳フ藏福寺ニ神主碑石有

聞書覺書曰 福住殿ト云ハ應永廿二月月證文岩市九ト云狀染田ニ有……………

天文中ニ宗房アリ、東明寺ニ碑アリ、勒シテ曰フ「梅窓堯春禪定門慶長七年正月筒井左京亮宗房」

ト。宗永ハ順弘ト稱シ、筒井順昭ノ二女ヲ娶リ其ノ一門トナリ、二千石ヲ領シ福住筒井ト稱セラル。

靡下ニ小山戸・頼田・永谷・白石ノ諸士アリ、二子定慶・慶之ハ出デテ筒井氏ニ養ハル。定次伊賀

ニ移封ノ際、定慶兄弟之ニ隨ヒ赴キシモ、嬖臣ト善カラザルヲ以テ福住ニ退居ス。後、定次事ニ坐

シ國除カレ、郡山城主大久保氏亦城池ヲ沒取セララルニ及ビ、徳川氏筒井家ノ退轉ヲ惜ミ兄弟ヲ召

シ郡山城代タラシメシモ、大阪ノ役西軍當國ニ入ルニ及ビ定慶等守ヲ失ヒ福住ニ走リ終ニ自殺ス。
事、郡山城ノ下ニ詳ナリ。

郷士記曰 福住岩市丸福住左京亮宗房 天正中人 同兵衛順弘宗永 知行二 福住主殿佐定慶 順慶養子タリ後福住ニ住ス……

筒井諸記曰
和州山邊郡福住山城圖
福住崗生城山



同紀伊守慶元同斷同兵衛順元與力 小倭新田永谷白石 千石合三千石

註 福住城址ト稱スルモノハ、福住村大字福住ニモアリ。

山田壘 福住村大字馬場ニアリ、山田氏コレニ據ル。郷士記ニ「山田山城ハ山田民部小輔道安」ト即チ是。氏ハ平城天皇ノ第五子山田皇子ノ苗裔ナリト云フ、然ラバ福住氏ト同族ナリ。

聞書覺書曰 山田村八王子ト云小社有是ハ山田王子可成平城第五皇・仲成亂請此山中へ蟄居ト見リ

至徳ノ長川流鑄馬日記ニ山田殿アリ、染田天神社藏應永廿二年ノ文書ニ山田氏アルモ共ニ其ノ名ヲ記セズ。山田順貞ノ妹ハ筒井順興ニ嫁シテ順昭ヲ生ミ、順清ハ順昭ノ六女ヲ娶リ、順昭ハ道安ノ女ヲ娶リ順慶ヲ生メリト云フ 大和諸將軍略傳 モ、順貞・順清 共ニ民部少輔ト稱シ當城主タリト ノコト他ニ微スベキ記録ナシ。

道安名ハ宗重、民部少輔ト稱ス。藝能アリ、就中畫ヲ以テ世ニ著ル。モト紳縉飛鳥井氏ノ子ニシテ山田氏ヲ繼ギシト云フ。麾下ニ別所・水間・森・針ヶ別所ノ諸氏アリ。二子アリ、一ヲ新左衛門ト稱シ辰市ノ役ニ功アリ、一ハ太郎左衛門ト稱ス。事跡詳ナラズ。筒井順慶葬式目錄ニ「山田 山邊郡山田太郎」ト同人カ。定次伊賀ニ移サルルニ及ビ山田氏留リテ豊臣氏ニ仕フト云フ。 筒井城ノ下參考スベシ

聞書覺書曰 馬場村ニ山田殿城跡ト云山城ノ跡有……山田殿ト云舊記不見染田一通有應永廿二年福住岩市丸内方山田加判ニテ賣山田民部少輔宗重ハ飛鳥雅縁卿御子息山田ノ後室所養子入

ル、ト云傳之道安居^{十一}ト云歌人繪書手書細工ニマテ好子ハ新左衛門天心正久居士、子太郎左衛門、山楊宗久移住東明寺過去帳ニ有、正久ハ元龜二年辰市ニテ松永先手打陣小屋ニ掛シ茶釜爰ニ有其子、權右衛門ハ耶蘇ノ聞有テ召捕ルル由

國民郷士記曰 山田新左衛門 ○編者云此人名道安ノ下ニアルベシ、傳寫ノ誤 山田民部少輔道安入道藤原宗重、同新左衛門

正宗天心、山田太郎左衛門、山田權左衛門 吉利支丹有之召捕ニ成 與力 別所 水間 森

小倉壘 針ヶ別所村大字小倉ニ在リ、小倉氏ノ據ル所ナリ。國民郷士記ニ「小倉山城小倉遠江入道」

ト即チ是、氏ハ本姓清原ニシテ舍人親王ノ孫小倉王ノ苗裔ナリ。王ノ父ヲ御原王ト稱シ、藤原仲成

ノ亂ニヨリ小原ノ山中ニ隠ル。東里村大字小原村ニ其ノ祠廟アリ、俗ニ小原權現ト稱ス。小倉ニハ

王子社 古ハ小倉王子社ト稱ス アリ、コレ小倉王ヲ祀ル所ト云フ。子孫相繼ギココニ居リ小倉氏ト稱ス。至徳ノ

長川流鏑馬日記ニ小倉殿アルモ其ノ名ヲ記セズ。永享中ニ政實、康正中ニ實榮、文明中ニ定實アリ、

永正中ニ政高アリ、遠江入道ト稱セリ。

開書覺書曰 小倉村小倉王子小社有今ハ八王子ト云三王ノ八王子ハ皇大神也 ○編者曰山王以下ココニ至ルマデ小倉ノ八王子ハ

比叡ノ八王子ト異ナ 小倉王舍人親王ノ御孫小原王子也夏野御父也夏野遣唐使ニ立大師ニ同舟ニテ入

唐シ博學多才王始清原姓玉ヒ比博略 ○秘府略 千卷撰人也古市住、唐禿山村ニ有清原深養父元輔清

少納言ノ先祖也武衛家衛ト云モ夏野曾孫也、古市播磨同左近ト云モ夏野末孫小倉殿ト云ハ夏野ノ

弟ノ末也永正十二年ニ小倉遠江入道清原政高千句興行染田社ニ有、文明四ニ同定實康正三同實榮、

永享十同政實何通モ有亦此村ニ聖宮ト云佛家ニ云太神宮ト云是ハ聖神可成此神ハ大己貴子羽山

戸神 此神葉經ノ祖ニテ有ンカ 御子聖神ト言其弟興津彦興津姫壇師是三方荒神ト言系茂ニハ笠荒神ト書リ舍人

親王天武帝第四御子ニテ四十七代王淡路廢帝ノ御兄也舍人薨廿五而帝位即玉孝謙先帝亂婚成諫玉

淡路へ流玉フ依之小原ノ山中大文字ト言所へ蟄居シ玉隱居玉ニヨリカ、ミ山ト云 ○編者云小原山中

人親王ニアラズ御原王ナリ。下文ニテ其義明ナリ 小原ニ禿有」又曰小原大原トモ御原トモ八幡ノ社有辨才天社モ有小原權現號

大阪亂後ニ地頭ノ建立ト云小原社小原王禿可成事ハ小倉王ノ所ニ記小原王南都御栖不心好テ此

山中ニ蟄居而隱^五鏡山^六大文字屋ト言者今ニ有

國民郷士記曰 小倉政實 清原氏舍人親王御原王子小倉王也永享十三年……○編者曰ク一本ニハ「清原舍人親

不願筒井松永ニ付」トアリ 小倉實延 應仁 小倉榮賢 小倉遠江入道政高與力 原豐後實繼

笠間壘 東里村大字笠間ニ在リ、笠間氏ノ據ル所ナリ。國民郷士記ニ「笠間山城笠間若狹守入道」ト

即チ是、氏其ノ出ヅル所ヲ詳ニセズ。同記ニ「笠間春松丸、笠間若狹守公輔、(定勝)同南殿勝次郎長政、

同定詮、上笠間玄定、同公寛、同定勢、同定俊、同伊與 永正、同春菊丸、下笠間公定、同 定。」

開書覺書曰 笠間村下笠間村ト言、指て行く笠間の里の近ければ人にさゝすなあめはふるとも文

正元上笠間公寛千句の發句に冬ふるき雪にもしろき宮路哉文明十四ニ下笠間公定櫻もしの雪をば

神の太山哉應永卅年六月同常夏の花にもあけのいかき哉同卅三年六月上笠間公榮神松のかけに千代汲泉哉永祿元氣原□上笠間春菊丸下笠間伊與判物書物毛原村吉兵衛ニ有

トアレドモ其ノ事蹟詳ナラズ。

南莊壘 都介野村大字南庄ニアリ、南殿氏ノ據ル所ナリ。郷士記ニ「南莊山城南殿左内」ト即チ是。

南莊・甲岡・來迎寺ノ舊三村ヲ古、南殿庄ト稱シニ階堂領山内七庄ノ一ナリ。建曆中ニ南殿下司宗弘

アリテコレヲ支配セントコト水分縁起ニ見ユ。左内ハ本姓文忌寸ニシテ和邇吉士ノ後裔ナリト云フ。

郷士記ニ「南殿左内和邇ノ古傳ノ末天武一本文同藤田定慶同島岡金平」ト是ナリ。聞書覺書ニ「南

殿村此村ニ南殿修理築後清次郎ナト言地侍應永文明永享比マテ住ス古城ト云掛跡有上笠間ノ一族ノ

ヨシ古記ニ見タリ」ト。更ニ郷士記ヲ案ズルニ笠間家ニ笠間南殿勝次郎長政アリ、南殿・笠間二氏

ノ關係ハ此人ニヨルナルベシ。左内、修理等ノ事跡共ニ詳ナラズ。

小山戸壘 都介野村大字小山戸ニアリ、北氏ノ據ル所ナリ。國民郷士記ニ「小山戸山城北越中」ト即

チ是。氏ハ本姓都祁直ナリ。神武天皇ノ皇子神八井耳命ノ子孫關鷄國ニ封ゼラルモノ都祁稻置或

ハ都祁直ヲ氏トナス。

古事記曰 神八井耳命者。……都祁直……等之祖也。

仁德天皇ノ時關鷄稻置大山主アリ氷ヲ額田皇子ニ獻リ、允恭天皇ノ時關鷄國造某アリ罪ヲ皇居ニ獲

テ貶黜セラレシコト日本紀ニ見ユ。都祁直氏世々小山戸ニ住シ傳ヘテ時麻呂ニ至ル。時麻呂ハ天長中ノ人ナリト云フ。

北時懸記享保十年曰 神武天皇ノ御子神八井命御子孫都介直ハ大和都祁郷小倭ノ庄ニ住玉フ今小山戸

直御廂所ハ田ノ畔ニアリ今字森カ本ト言フ直ノ子孫代々小山戸ニ相續シテ天長年中ハ民間ニ交リ時麻呂ト

言也

時ニ藤原時長房前六世孫山邊郡司ニ任ゼラレ亦此處ニ住居セシガ、貞觀元年會々恬子内親王齋宮トナリ

伊勢ニ赴カルノ途次例ニ依リ都祁頓宮ニ入ル。時長ノ二男時忠齋宮助ヲ以テコレニ勤仕ス。遂ニ時

麻呂ノ女ヲ妻リ其ノ家ヲ繼ギ元慶三年都祁山口社ノ神主ニ補セラル。是ヨリ藤原氏本姓都祁直ト稱

ス。

國民郷士記小山戸越中ノ下曰 小山戸ハ都祁ノ本邑也神武第二ノ皇子神八井耳命孫都祁直ハ都祁ノ祖也

清和御宇ニ房前六世孫藤原時長郡司トテ此里ニ住夫ヨリ藤原ト稱ス水分神官ノ末也定治三年ノ人

也

北吉品記曰 伊勢ノ齋宮都江歸京ノ刻都介ノリ宮ニテ供御ヲ奉ルヨシソノ榮ノタメニ六位ノ武官

此所ニ下テ勤之于時大職冠ヨリ九代末孫河邊大臣魚名六世孫出羽守高房孫鎮守府時長次男齋宮權

守時忠此地ニ住テ齋宮ノ御用ヲ相勤ル

水分社縁起並記録曰 貞觀元年齋宮恬子内親王於六條坊門修禊同二年ニ入野宮 夫ヨリ伊勢ニ赴
此時ニ時忠從來テ都介ノ頼宮ニテ供御ヲ奉ル夫ヨリシテ世々都介ニ住テ齋ノ補佐トス

北時懸記曰 都祁直ノ子孫代々小山戸ニ相續シテ天長年中ハ民間ニ交リ時麻呂ト言也時ニ伊勢齋
宮ノ御通リノ殿都祁頼宮ニ有 今並松 此御殿エ大職冠八代ノ末三位時忠來テ守ル小山戸時麻呂カ娘

ニ嫁テ時忠小山戸ニ住元慶三年九月二十一日小山戸高峯今五社尾 白龍天降玉フ時忠拜シ奉聞シテ奉崇
水分大明神

都祁郷略記曰 神武天皇御子綏靖帝ノ御兄神八井耳命ハ巨巨カト成王御子御繁昌ノ中都祁直ト奉申ハ
都祁郷小倭庄住……………都祁直ノ御庶井末孫都祁時麻呂ノ庶今ニ小山戸ニ有郷民荒ス時ハ咎有子

孫永ク小山戸住……………都祁頼宮野ハ貞觀年中清和天皇ノ皇女伊勢齋宮ニ立玉ヒ都祁頼宮ニ入玉
都祁直ノ子孫齋宮佐藤原ノ時忠勤之時忠ハ時長次男都祁時麻呂ノ家ヲ次也

來迎寺記曰 小倭家越中守都祁祖藤原ト稱ス實水分之神裔而代々當寺墓所位牌等納右水分社神祭
小倭家初諸郷當寺出勤例不今失

因ニ云フ、都祁直ノ墳墓ハ今ニ小山戸村近傍字森下ノ田中ニ存シ、若シコレヲ發クトキハ忽チ崇リ
アリト稱シ、古來村民畏テ敬禮ヲ加ヘザルハナシ。又都祁山口社地ニ接屬セル字高山俗ニ白龍天降リ

ノ尾ニ二箇ノ古碑アリ、一ハ都祁直靈石、一ハ藤原時忠靈石ト勒ス。此邊一樣ニ粗造ナル土器ノ破

片散布シ、時々茶臼・玉・曲玉ヲ出スコトアリ、蓋シ都祁直ニ關係ヲ有スルモノナリ。更ニ山口社

ノ元祿年中行事全文彼社ノ下ニ出スヲ閱スルニ「玖月朔日三日都祁直藤原ノ墳墓下ノ田中ノ荒芝ニ時忠齋祭此兩塚不詳元祿初年ノ頃ノ如中ニ墓有土民無情モ崩之自

然有左哉兩塚ヲ高山ノ尾ニ祭ルトアリ。此文義通暢ナラズト雖モ其ノ意ヲ推スニ、都祁氏藤原ヲ稱スル迄ノ墳墓ハ
森下ニアリテ今田中ノ荒芝トナレリ、時忠ノ墳墓ハ既ニ發カレ、其ノ址ヲ失ヒシニヨリ之ヲ高山ニ

移シ祭ルニ及ビ、都祁直ノ靈ヲモ同處ニ祭リタルノ義ナルベシ。然ラバ二箇ノ石碑ハ此時ニ建ツル
モノナラン。

時忠ヨリ時員・時包・時近・時恒・時弘・時眞一作直時ト父子相繼ギ其ノ職ヲ襲ヒシガ此系圖ニ其ノ年代ヲ記セズ

室殿時ノ領主ナルベシヨリ八郎良賢ヲ以テ神主職タラシメシヨリ以來良賢ノ子孫相傳スト云フ。良賢何人ナ
ルヲ詳ニセズ。

水分社縁起應永卅一年作曰 神主時忠、時員、時包○北吉品記ニ天徳中ノ人トナス時近○同記ニ天祿中時恒、時弘○同記ニ長和時眞○同記ニ長久

自室殿御時八郎良賢神主職被補任之以降其孫相傳之
治曆中ニ政時アリ、北系圖ニコレヲ脱ス寛治中ニ時吉アリ、系圖時代ヲ記セズ時吉ノ子ニ末吉アリ、末吉
ノ子ニ成末アリ、共ニ年代詳ナラズ。系圖成末ノ子ニ李允アリ、吉品記ニ據ルニ嘉承中ノ人ナリト云
フ。爾後世系詳ナラズ。曆應中ニ顯時アリ、北品ノ幕下ニ屬シ偏諱ヲ受ケ名ヲ顯國ト改メ、初メテ

北氏ヲ稱ス。
山邊郡
三三九

都祁郷略記曰 小山戸ニ城趾有都祁藤原時忠ノ數代住ス子孫北顯時ハ常ニ北島大納言顯能卿同顯
泰卿ノ末筵ニ席シテ一字北并ニ顯ノ字ヲ玉フ小山戸ニ居住ス是ヨリ北ト改也北島ノ與力宇陀ハ芳
野秋山ノ兩家大和口ハ北多田爲目代・蘭生澤ノ沼並松ノ廣野ヲ構テ守之也

顯國以後ハ北氏系圖ニ詳ナリ。曰ク

顯國 野應元ニ勢州北島殿幕下ニ成北ノ字顯字
共ニ受ル同三月ニ南都ニテ死鳥屋尾カ掣

北時懸記曰 小山戸顯時……多氣御所ヨリ北ノ字顯ノ字ヲ請テ御一族ノ末筵ニ着ス鳥屋尾掣
也

國吉 北島殿幕下北主膳又越中
母ハ鳥屋尾石見守女也

國民郷士記ニ「小倭家 今小 小山戸越中守……與力 蘭生 友田」トアリ、コレ國吉ナルベシ。

吉兼 北越中南部
兼徒又越後

同記曰 「喜多越後守吉兼」トアル是ナリ。

實兼 越中守南都兼徒應安四年生多田上野守經實ヨリ實字并幕紋三ツ巴ヲ受ル永
享九年九月十六日於染田寺千句連歌興行利生多キ神も世々ふる千秋哉實兼

同記曰 北越中守實兼 永享九年染田天神ニ千句會……伊勢國司ハ北ト云一
字ヲ授山邊郡東山ノ中旗下中ノ惣目代ニ補ス……

北氏 貞享
元年 記錄曰 貞治三年尾張斯波入道道朝興福寺維摩會領越前國河口庄ヲ押領スユヘ北越
中實兼を道朝方へ遺す

實愈 伯耆少後南都ノ兼徒也明徳二未生ハ文安元子
六月廿八日死行年四十四歳母ハ多田義實女也

同記ニ「北伯耆守實愈」ト是ナリ。來迎寺記ニ「第十三世康遵……此代ニ小山戸藤松丸ヨ
リ田地寄進有之字中橋ノ爪壹反實愈尊靈菩提也五輪立文安元甲子年六月二十八日證文有」トア
ルニ相合フ。

實乘 主計兼名藤松丸永
享元年生母實氏也

同記ニ「北主計亮實乘 永正 十四」トアル是ナリ。永正十四年ハ其ノ死去ノ年ナルベシ。案ズルニ大
乘院記錄ナル御兵士引付ニ「小山戸分小山戸庄下司……此外在々所々且右年貢諸公事等無
其沙汰一向如私領致知行輩不知其數者也」トアリ、コレ應仁中大乘院領莊園ノ下司・給主ノ緩
怠ヲ記セルモノナレバ、所謂小山戸庄下司ハ此實乘ヲ指スナルベシ。

實弘 加賀又ハ彌一郎長享元未年生母ハ稱田重懷女松永
神主職御新九郎ニ讓其孫五代相勳法名洞發大徳

同記ニ「北加賀守實弘 天文 六」ト即チ是。但シ神主職ヲ讓ルノコトハ都祁山口社ノ元祿板文ニ
「天正年間北氏主計丞より廣新九郎ニ讓リ廣四代勤之マタ彦太郎廣座ハ紀氏は先の神主今の源
七郎也」トアルニ相違セリ。後考ヲ俟ツ。

吉實 北左近大進又ハ彌十郎兼名春若丸天文三年年生稱田宗重養子ト成元龜四年當國平均已後小山戸ニ歸テ庄屋ヲ勤ム實
乘下屋敷ニ住ス慶長十六年正月九日ニ死ス行年七十八歳法名宗重姉也北市兵衛早世シテ證廣濟善居士母ハ友田小山
戸ニ
歸ル

同記ニ「北左近衛門丞吉實」トアリ、同記筒井惣庵ニ「木田左近吉實與力朝田武藏下ノ條 森林彌一郎」
 北氏貞享元年 記錄曰 上ノ宮神主ハ元慶二年ニ時忠ヨリ始メ七代直時マテ傳ルト云共被補ニ八郎良賢ニユヘ直時、時吉、末吉、成末マテハ平家ニ與……シ亦武門ニ從フト云ヘ仁建曆元本職ニ被補上ノ宮ノ神主タリ木工允ハ九條殿ニ仕ル也忠末、顯國ハ伊勢國司顯能公ヨリ顯ノ字被下置北越中守ト被改、國吉、吉兼、尙國司方ニ成顯泰公滿雅公大納言教具公ニ仕ル應永廿二年京都公方様ヨリ筒井十市越智久世滿西等ノ諸侍ニ令シテ令攻多氣亦仁木、六角、神戸、關、長野、雲林院小濱、山田、上部、春木等マテ對陣ス仍之南都東南院家ニ御弟ヲ令ニ入院、和睦相調故此時吉兼モ衆徒寺家八十三家ノ内ニ加リ南都ニ與ス實兼實急實乘尙南都ニ與シ衆徒ヲ勤ユヘ山ノ内無事也

天正四子十一月二十五日ニ中納言具教公ヲ舊老ノ家臣藤方興山信長公ノ承命奉討也此時御舍弟東門院家具親卿南都ヲ忍出備後ノ頼ニ越毛利大膳大夫ヲ頼歸座ノ望アリ仍舊老ノ家臣實乘息實弘及大野鳥屋尾吉十郎十人ノ侍中伊賀長木吉原名張福知南伊勢波瀨峯森家木鳥屋尾石見同右近何モ奉見次森城ニ奉居守護ス、信長ヨリ日置大膳瀧川三郎兵衛秋山宮内天野佐右衛門等ニ命シテ令攻具親沒落シテ亦備後赴ニヨリ信長領地トシテ舊老ノ武士所領ヲ沒取セラル、天正十二年筒井順慶……同八月二日ニ卒息伊賀守家督相嗣大和一國共ニ羽柴秀長領ス此時

神木ヲ切荒シ炭薪ニシ隨兵ノ具足甲ニ及鞍鏡鋒鉄マテモ奪取ル、其外七郷ノ諸侍地頭職沒取セラル、……

又曰 伊勢國司多氣御所中納言具教卿ト申ハ北畠顯能卿ヨリ多氣ニ住テ南伊勢五郡伊賀半國大和宇陀郡山邊半郡知行シ信教卿マテ八代也……

時忠ヨリ實弘マテ事跡略知ルベシ。但シ系圖ニ元龜四年當國平均トハ何ノ謂ナルヲ詳ニセズ。疑ラクハ豊臣秀長ノ沒取セシヲ誤リ傳ヘタルカ。

- 道俊 道吉共北左近秀又ハ彌助永祿十一辰年生母ハ朝田宗重女也行年五十八歳ニテ寛永二丑十月二日死 大主高虎公へ始テ出郷土ノ内也
- 吉成 北彌兵衛童名太郎八歳長四年生寛永二年九月二十七日父ト同病ニテ死行年廿七歳
- 頼吉 北彌兵衛又左京天正九年於伊州長坂生吉成依早世入家行年六十九歳萬治二年五月十日ニ死
- 延吉 北彌兵衛又左近童名吉藏改新次郎元和八戌年生吉成廿四歳ノ子也四歳ニシテ父死、五十七歳ニシテ落髮貞享三年十二月廿日ニ死ス
- 吉品 童名喜太郎平次郎彌兵衛左近右衛門法名觀照院月峯怡心居士……享保十八寅年五月二十日八十九歳ニテ病死來迎寺内墓ニ土葬

時懸記曰 怡心居士ハ和州山邊郡小山戸之郷北延吉嫡男正保二年十二月九日童名喜太郎亦平次郎北彌兵衛後左近右衛門藤原吉品……常ニ三部本書舊事記日本紀古事記 六國史其外延喜式等數百卷之書ヲ見神之御末壹軸に撰大和國繪圖諸國名所并古城京大阪堺長崎所々之繪圖を寫大和懷中之小圖自撰寺社舊跡等を中津道限リ二卷之圖にして自書自畫ニ書右二卷古市御役所以葛原氏

奉。大主高陸公。則御文匣ニ納旨葛原氏御申聽誠ニ數年大願至時ニ難有元祿十四年依願隱居愚
 子時懸ニ讓家名ヲ彌兵衛ト改メ役儀茂被仰付吉品時ニ行年五十七歲左近右衛門ト改長谷寺大僧
 正英岳之御弟子ト成月峯怡心と法名せらる亦ハ室生山蘭若之律師或ハ高野山之木食上人諸々之
 比丘高僧ニ佛名を問都祁上下之社涅槃山來迎寺江步行ヲ運朝ニハ六根蔽中臣祓大祓夕ニ佛經讀
 齋日を勤數萬遍ノ念佛唱テ朝暮自佛ニ香華を取享保十八丑年五月十日自佛殿向香花を取其所ニ
 伏ス如ニ眠入ニ不知ニ苦痛ヲ同二十日の朝月も西山にかたむく比齡九十歲ニテ正念におはりぬ來
 迎寺ノ寺内土葬五輪建石碑……………時懸五十六歲也享保十八丑年六月十八日書
 之怡心居士四七日ノ夕ニ自筆ニ記ものなり
 時懸延寶六年五月生童名長
 十郎彌一右衛門彌兵衛 以下當代マテ略之
 トアリ以テ其ノ大略ヲ知ルベシ。寛政十一年北氏ヨリ領主藤堂家へ差出セシ由緒書即チ舊家控記帳
 ニ載スルモノハ、前掲ノ系圖ニ少カ相違スル所モアレド抄出シテ參考ニ供ス。
 一高拾五石餘山林五ヶ所
小山戸村
 北十郎右衛門

代々當村住先祖ハ年曆貞觀之比武藏守藤原時長嫡子齋宮佐時忠初メテ當村ニ下向シテ十四代夫々
 永ク社職相勤曆應元年勢州多氣國司顯泰卿二代即成家老鳥屋尾吉十郎聲也從國司賜北氏并顯字割
 菱之紋所是ヨリ北姓ト改越中伯耆主計加賀此四代ハ南都衆徒を勤當村并所々私領仕慶長年中加賀
 嫡子市兵衛ヨリ民家ト成元和五年殿様御領地城和五萬石之中□□撰出無足人大庄屋役相勤十二人

之内ニ御座候北彌助ハ私祖父十郎右衛門迄五代無中絶大庄屋相勤……………

多田城 都介野村大宇南白石ニアリ、「カイナキ山」ト宇ス。多田氏之ニ據ル。

開書覺書曰 白石村……………多田殿ノ城跡言山有本丸十三間二九南取出七間西取出四間上垣
 ハ染田寺九ト云十二間下垣安樂寺九ト云廣上ニ同在處上事二町坂中ニ井有水如瀧云々

氏ハ清和天皇ノ末流ニシテ滿仲ノ後裔ナリ。滿仲攝津ノ多田ニ居リ子孫多田源氏ト稱ス。滿仲ノ五
 世孫ニ源經實アリ、攝州多田院ノ家人トシテ廣瀨郡中村ニ住セリ。建保中一族ヲ率キ當郡福島庄ニ
 來リ佐比山ニ築キコレニ住ス。因テ其ノ地ヲ多田庄ト稱セリ。是ヨリ先、其ノ族、僧顯鏡ナルモノ
 ハ南殿庄内ニ於ケル諸人ノ墓地ニ就キ庵ヲ結ビ之ニ住ス。經實其ノ俗縁ニ因ミ殊ニ之ニ歸依シ、爲
 ニ近傍ノ田畝ヲ寄附シ檀那寺トナセリ。是、實ニ來迎寺ノ濫觴ニシテ、多田氏彼等ニ關係ヲ有スル
 ハ實ニココニ起因セルモノナリ。事、彼ノ寺ノ下ニ詳ナリ。

國民郷士記曰 廣瀨郡中村伊賀公源經實 多田來迎寺ニ境内實
 得寄進狀神主石碑在

來迎寺元祿記曰 緣起曰多田之稱號者多田滿仲九代後下野守高賴男經實建保年中來ニ此郷懷ニ百
 姓ニ黎民ニ其德見其功成衆僉伏故福島佐比山築城住名其處云多田庄經實子義實順實世々相
 續爲縣主天正十四年四郎延實十餘代年曆凡三百七十餘年爲安主故郷民悉舉號多田殿
 同寺記曰 顯鏡阿闍梨廣瀨郡中村家嫡孫番名保元二年住職……………爰建保二甲戌年多田滿仲九代

後胤下野守高頼公男、源經實公父老翁高頼召連。此郷ニ落來是ヨリ一里東福島佐比山ニ築城郭居住ス依此地多田庄ト號當寺歸依大檀那成……………

經實ヨリ以下ノ世次諸書異同アリト雖モ、國民郷士記・窪氏家記ニ載スル所是ニ近シ。故ニ今之ヲ左ニ抄出シ、旁ラ諸書ヲ列記シ參考ニ供ス。

國民郷士記曰 多田下野守經實 諸仲公四代多田藏人頼高ノ末無二ノ宮方ニテ應仁年中伊勢北島ノ幕下ニ屬ス知行千七百石、代々之庶所石碑神主來迎寺ニ有之○多田家ノ由来ヲ總記セルモノナリ

多田上野助春守 文明三年 同下野守義實…………… 同寛春 應永六〇千句會年預次第ニ應永中多田實春アリ寛ハ實ノ誤字ナラン 同僧順實 哥連

同春清 同七郎 同下野守實勝 天正十五〇三輪巨勢系圖ニ巨勢吉範妻大和國山邊郡多田城主北島殿下多田上野介源實勝女享祿四年十二月十四日死 同治郎

延實…………… 同四郎常胤 同實玄童子 女子 於萬島源七郎妻 一族 染田寺法印、多田大門左衛門、安樂寺和尚、大門實宗 家臣與

(一本云山日) 力 山田將監、迎田多門、加藤治太夫、備岡主水、大門常廣、山田權之助、迎田春王、窪田彌右衛門、森田兵部、法雲西堂、

窪氏家記曰 多田家ハ多田滿仲九代嫡流下野守高頼嫡男下野守經實故有此郷内ニ來多田村令居住世々號ニ多田殿……………多田ハ始ハ多田村ノ山ニ城郭ヲ構へ後ニハ白石ヲ乘取貝那木山ニ城ヲ築

仁木伊賀守没落而後國中郷士一味同心而國中堅依之天正九年巳十月ニ織田信長公諸方ヲ攻入玉フ名張口笠間峠勝原峠ヲ筒井順慶向ル、多田四郎延實モ順慶手ニ加リ黒田河原ニテ軍夫ノ鐵炮ニ當

リ玉フトモ御陣而卒トモ云次郎常胤ハ同十八年寅三月豊臣秀吉公小田原北條ヲ攻時ニ常胤モ大納

言秀長卿ニ從山中ノ取出へ向、自夫ノ不歸多田家十四代繁昌此時ニ絶ス山城守參河守ハ東明寺

過古帳ニ有、春清常胤延實ハ東御影供ノ掛位牌ニ乗トモ年月不知

都祁郷略記曰 北島ノ與力宇隨ハ芳野秋山ノ兩家大和口ハ北、多田爲目代、蘭生澤ノ沼並松ノ廣

野ヲ構テ守之也……………白石貝那木山城主多田下野守經實ハ源滿仲公四代末多田藏人頼高ノ息也

經實ヨリ多田次郎延實ニ至十四代承久ヨリ天正年中迄三百年餘住ス福島佐比山ニ住テ多田庄ト改

メ天文ヨリ天正迄白石貝那木山ノ城ニ住吉野方北島ノ與力タリト云フ……………

開書覺書曰 多田村……………佐比山城ト云城跡並平城跡有 白石村……………多田殿ノ城跡言山有

……………此山城天文ノ比築移ルト云傳トモ舊記ヲ不見落去ハ天正四子年北島亡玉時ト言自ラ在

々ノ掛落去申傳ル也尤モ左モ可有也此郷ニ十三代住シ次郎實卿筒井伊賀守ニ供同十八寅年小田原

ニ下リテ其後歸陣無シ若打玉フト云傳

北吉品記曰 多田ハ貞和ノ比義實 上野介實春 正長ノ比次郎順實 長祿

要スルニ建保年經實福島莊佐比山ニ住シ武威ヲ振ヒ多田殿ト稱セラレ、子孫相繼ギコレニ據リ世々

北島氏ノ麾下ニ屬ス。貞和ノ頃義實アリ、勢力四隣ヲ壓シ小山戸等ノ豪族來服シ、各其ノ偏諱ヲ受

ケ之ガ麾下ニ屬セリ。

北吉品記ニ「貞和年中カニ攝州多田院ノ御家人義實ト云士伊勢參宮アリシ此邊野武士戰負テ武威

山 邊 郡

三四七

ノ勝タル事ヲ恐テ主君ト仰キ福島伊勢庄ト云所ニ城ヲ營其所ヲ多田庄ト改其末々武威甚タ盛ンヲ
 滅シ小山戸上宮ノ神主時忠末孫時兼來テ諱ノ字ヲ請實兼ト改下藤ノ紋ヲ請一家トス……………」ト
 見ユ。但シ之ニ據レバ多田氏ノ初メテ福島ニ來リシハ義實ナルガ如ク見ユレドモ、是ヨリ百四十
 年以前即チ建保二年經實ニ係ル事跡ナルベキハ既ニ上ニ述ブルガ如シ。諸書ニ義實ヲ以テ經實ノ
 子トスルモ建保ヨリ貞和マデ其ノ間百四十年ノ差アリ、之ヲ父子トスルハ疑ナキアタハズ、故ニ
 今之ヲ取ラズ。國民郷士記ニ經實春守義實ト世次ヲナセリ。以テ證スベシ。

應永中實春アリ、長祿中順實アリ、御兵士引付ニ「多田分向淵庄下司」ト見ユルハ即チ順實ヲ謂ヘ
 ルナラン。享祿中ニ實勝アリ、女ヲ以テ三輪ノ巨勢吉範ニ妻ハス。天文中窪・大門ノ豪族ヲ降シ更
 ニ白石ノ貝那木山ニ築キ之ニ住スト云フ。其ノ誰タルヲ記セズト雖モ、年紀ヲ推スニ次郎延實ノ時
 代ナルベシ。國民郷士記ニ「多田山城多田次郎」ト證スベシ。天正四年織田信長北畠氏ヲ攻ムルヤ、
 延實更ニ筒井順慶ニ從ヒ伊賀口ニ戰死セリ。四郎常胤ハ天正十八年豊臣太閤北條氏ヲ攻ムルニ當
 リ、筒井定次一説豐臣秀長ニ從ヒ相州小田原ニ赴キ亦戰没シ、多田氏ノ嫡統ココニ絶エタリト云フ。

白石壘 都介野村大字白石ニアリ、白石・窪・迎田・大門ノ一族コレニ據ル。古、水涌庄アリテ二階
 堂領タリ。建曆以後菩提山ノ所領ニ屬シ當時藤原國宗ナルモノ之ガ下司職タリ。正安中水涌式部公
 アリテ水分神主職ヲ押領セシコト都祁水分社縁起ニ見エタリ。聞書覺書ニ「白石村本名水涌ト云應

永十四北年比ヨリ白石ト言カ」ト云ハレタレドモ、染田天神社藏貞治五年并應永二十四年ノ文書ニ
 水涌庄見エ、康暦・至徳ノ文書ニ白石庄見ユレバ其ノ應永十四年ヲ以テ白石ト改メタルモノニ非ラ
 ザルヲ知ルベシ。願フニ水涌ハ北白石ノ舊名ナラン。後考ヲ俟ツ。

水涌式部公何人タルヲ知ラズ、國民郷士記ニ所謂水涌式部少輔ナルカ。水涌氏ハ素戔鳴尊ノ苗裔
 ト云フ。後、藤原ヲ冒シ白石・窪等ノ數流ニ分ル。白石一族ノ姓名ハ國民郷士記ニ

水涌式部少輔 素戔鳴尊ノ御子大年神羽山 戸神其子彌豆麻伎神此末 同實詮 應永廿四年〇染田千句年預次第ニ「應永 同實春 應永廿年白

白石三河入道泰助 水涌白石ト改新田ノ人 同實詮 正長元年〇年預次第ニ「正長元年……於白石……當年預白石實

實詮ト同人ナルベキモ、其ノ氏ヲ 改メシヲ以テ殊ニココニ記セルカ 同實盛 〇年預次第ニ據ルニ 同日向守長實 實德元年〇年

系圖ニ幸千 代ニ作ル 白石玄蕃長英 五年 同三郎左衛門

窪能登次郎藤原實泰 白石泰助弟也延文四 年九州ニテ討ルル 窪美作守、同齋四郎、同藤原彌々女 享祿 二年 同久齋、同天祐

宗哲、同松若丸 〇染田天神社藏至徳三年ノ治券ニ白石東松若丸 同幸大夫 法名常賢、同藤滿、大門左衛門、

大門宗實 〇北吉品記ニ「白 石ニ住」ト 迎田實禎、迎田實正 〇迎田一ニ神田ニ作ル、染田天神千句會年預 次第ニ文安中迎田實順アリ、蓋シ實禎ノ先人 兼岡主殿

ト見ユ。今北白石ニ久保氏 當主 兼松 アリ、窪泰助 一ニ泰祐ノ苗裔ナリト云フ。 舊記控記帳ニ

一高六石七斗餘山林一ヶ所 北白石村 窪 宗 七

私先祖者元亨之比水涌式部少輔白石三河白石三郎左衛門窪能登同美作同□□□享祿年中迄七代何

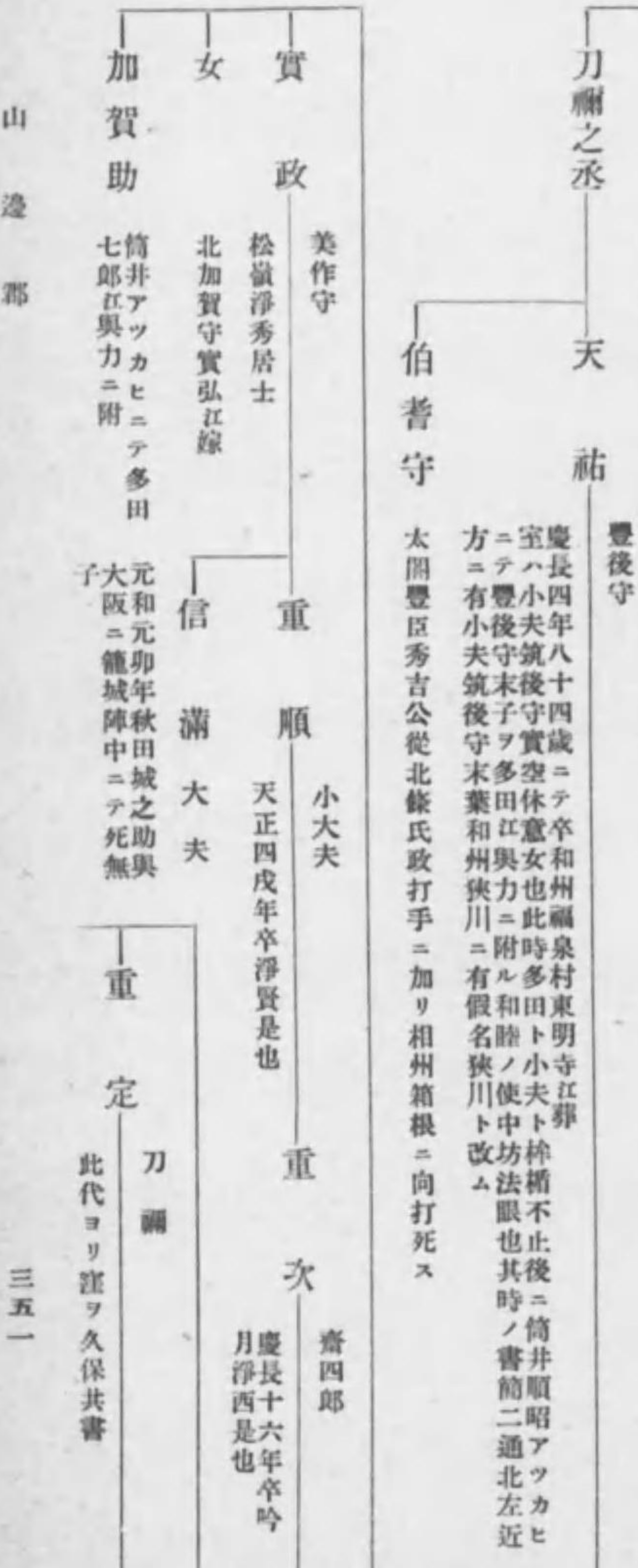
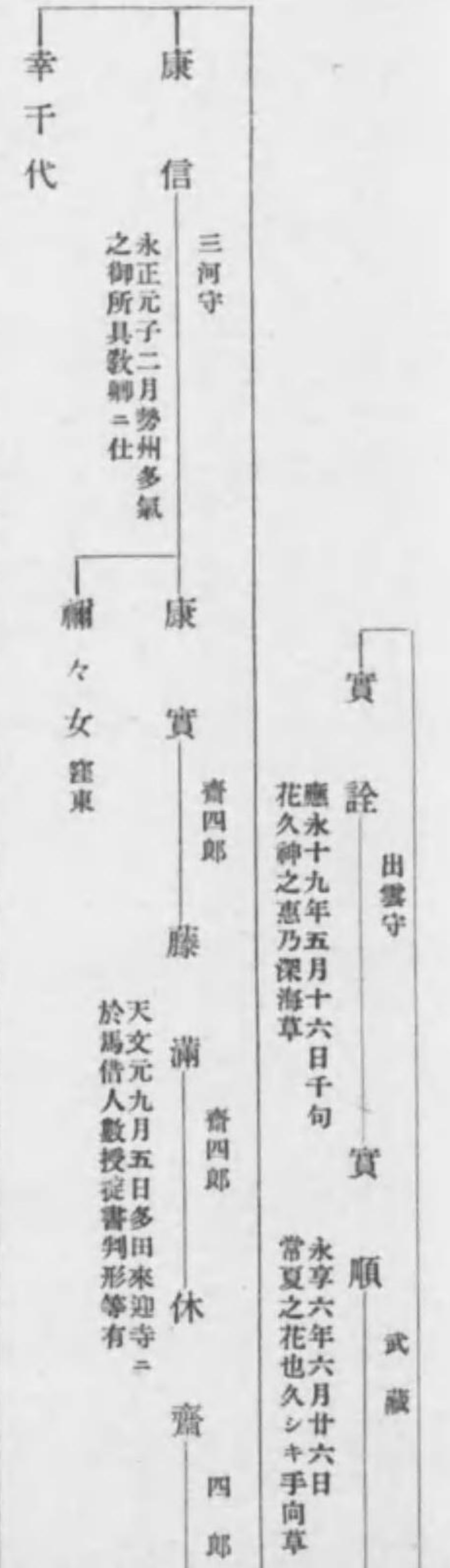
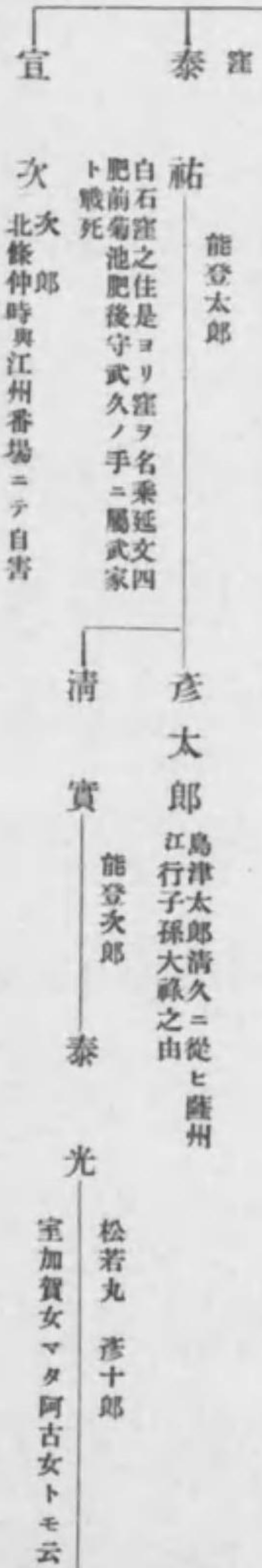
れも軍功有之趣私祖ニ御座候其後窪彦太郎と申もの當村城主多田家之與力ニ罷成天正年次郎信實
 筒井伊賀守ニ供ナヒ伊賀名張口々入り小田原ニ行歸陣無之因テ十四代窪多郎佐ト申もの為民家ニ
 罷成秀吉公へ伏見松之丸ニ罷有其後當村へ引取多郎助俸久左衛門ト申もの殿様江戸御屋敷ニ而御
 小人頭相勤罷在候由祖父勘兵衛儀庄屋役相勤元祿十五年無足人奉願私ニ而□代相勤申候
 家ニ系圖及ビ家記ヲ藏セリ。系圖ハ郷士記ニ載スル世次ト稍相違スルモノアリテ悉ク信ズルニ足ラ
 ズト雖モ、姑ク左ニ並べ掲ゲ以テ異聞ヲ博ム。家記ハ享保九年北吉品ノ筆記ニ係リ、東山内諸士ノ
 廢亡ヲ徵スルノ材料ニ供スベキモノナリ。

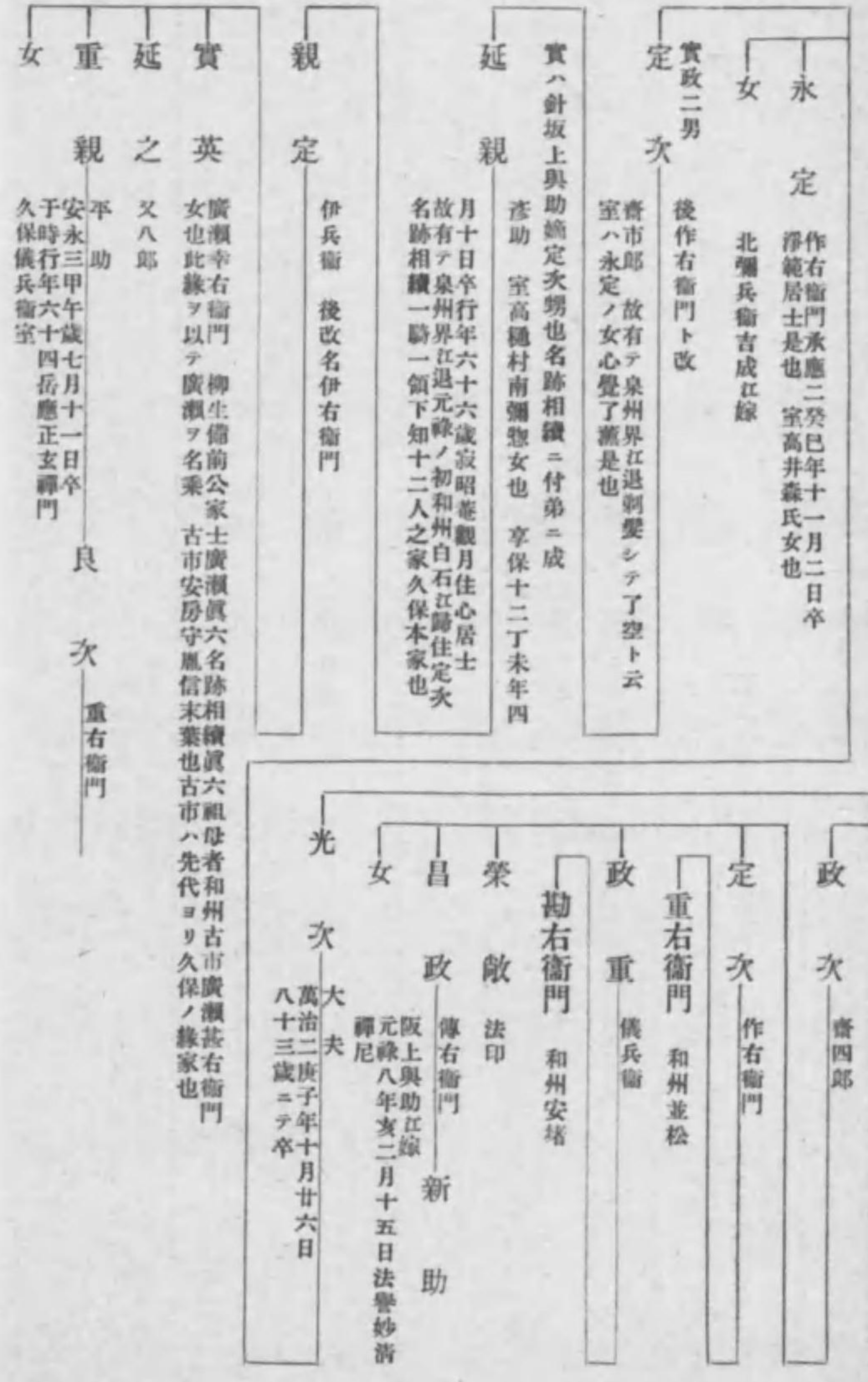
窪氏系圖

水涌式部長子 水涌ト云

白石三河入道泰好

白石明神ハ地與利波惠出多留
白石也是則神體故白石ト改由





窪氏家記

一窪家之事御尋承申處荒々書集進シ申候

一窪東太夫淨意息女ノ稱々女ニ傳ヘ妙性 爾々女事 我等ニ傳ヘ被申ル、所亦ハ舊記 水分社ノ記録來迎寺諸記録築田天神社記録 粗達無之故引合書申候

一白石村ハ本名水涌庄ト申由古キ文ニ見ヘ申候安元治承ノ比ハ平家ノ庄園ノ由壽永已後師盛息子勢觀坊此所ニ隱身居申サル、由來迎寺ヘ寄進物有

一後伏見院正安年中ニ水涌式部水分社ノ神主職奪取被申亦反シ被申□舊記ニ見申候

一應安四年 南帝西征將軍宮九州御征罰而御下迎白石參河入道泰祐、窪能登次郎兄弟共新田ノ人々ニ伴ヒ下リ菊池肥後守武久手ニ屬戰死申由太平記ニモ見ヘ申候弟能登次郎ハ今川了俊手ニ降リ是モ打死仕由太平記ニモ見ヘ申候

一同七年ニ菊池滅テ後白石泰祐子白石彦太郎ハ鳥津太郎清久ニ從ヒ薩摩ニ白石下總ト云今ニ在之由聞申候ヘ共無ニ通路候得ハ不存候

一東山中郷侍ハ建武方此方

南帝皇居奉守護新田ノ人々和田楠ニ屬シテ八尾若江赤坂金退寺ノ城ニ籠末ニテハ伊勢國北島顯能卿ノ御旗下ニ屬シ北越中ニハ一字ヲ被免御目代ニ定ル、鳥屋尾ト縁組被仰付多田吐山ヲ旗頭

ト而宇ノ關ヲ堅メ並松ノ廣野ニ防、多氣桃股口ヨリ京勢一足不入、踏元龜三年マテ二百五十餘年ノ間堅固ニ防キ能登次郎一人兄弟ニモ別レ今川了俊方へ降打ル、事疑クハ太平記ノ誤哉覽

一至徳三〇年ノ證文ニ窪東松若丸内方加賀女ト記リ

一應永中年頃マテハ水涌庄水涌殿ト書リ夫々已來ハ白石村白石殿ト書リ窪ハ白石ノ別ニテ共藤原氏也

一應永十九年辰五月十六日千句ニ

花久し神の恵みのふかみくさ

窪出雲守藤原實詮

一永享六〇六月廿六日千句ニ

常夏の花や久しき手向草

窪氏實順

一享祿二丑年

花も香も手向し梅の紅葉かな

窪東藤原禰々女

秋も久しき神垣の松

同 齋四郎康實

一窪休齋四郎 來迎寺納所帳ニ見

一窪美作守實政

一窪刀禰之丞

一窪齋四郎 土州宿毛ニテ病死

一窪豊後守天祐宗哲居士 慶長廿年ニ卒ス八十四才移住東明寺過去帳ニ有

一 小夫家ハ小笠兵庫ト云 小笠ハ小夫笠領ス故也 此人芥山寺領ヲ妨今ニ正月ニ悶ノ鐘芥山ニ擲也

一 小夫筑後守實空休意 東明寺過去帳ニ有窪豊後男也此時多田ト

一 小夫小左衛門 子孫佐川ニ有

一 北加賀守實弘妻女ハ窪豊後守息女也

一 北彌兵衛吉成妻女ハ窪淨意娘禰々女也西岸妙性ト云寛文八申十一月六十九才ニテ卒ス正怡母也

一 吐山ハ長谷川氏ニテ秀字ヲ用ユ

一 山邊ハ源三位頼政ノ末葉ニテ綱字用

一 檜牧モ山邊ノ餘流ト見タリ

まつは尙かはらぬ夏の千秋かな

一 小倉清原榮實 永享二年ノ千句ニ

染のうす露や千元の神の松

同 遠江入道政尊 永正十二年

小倉ハ舍人親王ノ御子小倉王ノ末流

一 小原瀧尾笠間ハ舍人親王御子御原王ノ末清原氏也

應仁二年ノ千句ニ上笠間公寛 神もしる千代を重る松の雪

文明十四ノ千句ニ下笠間公定 神の代の種や年ふる霜の松

一 古市ハ小倉王子夏野苗裔古市安房守胤信同播磨守胤重

一名田七郎天文九年五月十七日千句ニ

年に尙さかゆく木々の若葉かな

此七郎殿ハ多田家十代目程ニ當ル由

一 多田家ハ多田滿仲九代嫡流下野守高頼嫡男下野守經實故有此郷内ニ來多田村令居住世ニ號多田殿……………

一 多田ハ始ハ多田村ノ山ニ城廓ヲ構へ後ニハ白石ヲ乘取貝那木山ニ城ヲ築仁木伊賀守没落而後一國郷士一味同心而國中固ム依之天正九巳年十月ニ織田信長公諸方々攻入玉ヲ名張口笠間峠勝原峠々筒井順慶向ル、多田四郎延實モ順慶手ニ加リ黒田河原ニテ軍夫ノ鐵炮ニ當リ玉フトモ御陣而卒トモ云次郎常胤ハ同十八年寅三月豊臣秀吉公小田原北條ヲ攻時ニ常胤モ大納言秀長卿ニ從山中ノ取出へ向自夫シテ不歸多田家十四代繁昌此時ニ絶ス山城守參河守ハ東明寺過去帳ニ有

春清常胤延實ハ東御影供ノ掛位牌ニ乗トモ年月不知

一 輦田ハ北ノ別レニテ藤原氏也輦田武藏守重懷、同參五郎重宗、同四郎重順、永祿七子十一月二日千句ニ

幾千代も葉かへぬ花の木立かな

一 小山戸ハ……………

右ノ家々窪ニ遠類縁者也

一 窪小大夫淨齋居士ハ豊後子

一 窪齋四郎東大夫淨意居士

淨齋子萬治三子十月廿六日卒八十三才一女ハ福々女北氏ニ嫁ヌ次男ハ作右衛門承應三巳十月廿

五日三十六才ニテ卒ヌ淨範居士ト言フ女子五人第二ノ娘福々女跡ヲ繼也

右ハ御所望ニ候間書申候當年八十才成申候へハ眼齋手振誤事可爲多事候得共一家ノ老人ニテ候へハ不憚之書進シ申所如斯

享保九甲辰年林鐘日

北 月峯軒 八十歳

廣瀬幸右衛門殿

山 邊 郡

同處ニ畑氏ト稱スル舊家アリ、モト國津社ノ神職タリシガ後武士トナリ、北畠氏ノ麾下ニ屬セルモノナリ。又南白石ニ舊家吉井氏アリ、本姓西室ニシテ多田家ノ目代タリシモノノ子孫ト云フ。事、舊家扣記帳ニ詳ナリ。曰ク

一高拾七石餘山林三所

北白石
畑 辨 藏代々當村住

白石村本名水涌ト申應永十四年々白石ト文字改テ鎮守國津明神之神職藤原刀禰ト申其比都那郷水分神事ニハ勅使立給フ勸修寺經俊經定御弟經繼公中御門ト申水涌村ハ領地タルニヨリ神主方旅亭ニテ神役相勤御座候由神主息女美タルニヨリ嫁玉ヒ御子誕生是ヲ藤原庄司家次ト申神勤庵末ニシテ武士從。白石住ス年曆曆應之比勢州多氣國司北畠顯泰息幼稚之二人水涌庄貝那木山城主多田へ預リ兄ハ小山戸へ參リ姓北ト改家次方へ養子ニ取姓畑ト改將監ト申是私祖ニ御座候將監ヨリ九代之内多田家ノ目代相勤天正之比多田家斷絶之砌少右衛門ト申もの々民家ニ罷成其後二十餘代ニ至リ庄司屋敷住居仕候元祿十三辰年畑藤五郎無足人奉願私々六世以前喜三郎代無足人御改之節信實ハ威狀并讓リ之具足大刀香爐御奉行西島八兵衛様江掛御目候處如何相成候哉御下不被下候五代以前儀右衛門庄屋無足人相勤罷有關東とね川流之節 殿様御手傳之砌御普請場處ニ罷越御用相勤代々庄屋役無足人相勤申候私儀寛政二戌年々當村庄屋無足人不相變相勤罷有候

一高三拾六石餘山林二十八

南白石村
吉井 丈 加代々當村住先祖者

往古水涌庄應永之比白石ト文字改リ當村字貝那木山年曆承久之比居城候多田下野守經實ハ源滿仲四代之孫多田藏人頼高息ニシテ經實ヨリ次郎信實ニ至リ天正年中迄十四代三百餘年居城有之候私祖ハ西室外記ト申ものにて多田家之目代職數代相勤兵法ハ塚原ト傳弟子一カノ至極ニヨリ信實師範タル由申傳候天正ノ比信實筒井伊賀守屬シテ駿州小田原へ及出陣歸陣無之外記嫡子西室彦太郎信實ニ供シ駿州へ參ル外記孫十作ト申もの當村ニ止テ西室ヲ吉井ト改私迄十六代ニ罷成是私祖ニ御座候其節々民家ニ罷成安永四未年々寛政三亥年役儀蒙御免迄當村庄屋并多田村庄屋兼帶目付庄屋組合目付相勤申候……………

輅田壘

都介野村大字友田ニアリテ輅田氏ノ據ル所ナリ。國民郷士記ニ「輅田山城輅田武藏」ト即チ

是。氏ハ小山戸氏ト同族ニシテ神八井耳命ノ後ト云フ。大和國名鑑舊軌圖法隆寺藏ニ「輅田武藏城跡神八井耳命孫都那氏也」ト見ユ。應永ノ水分縁起ニ據ルニ往時二階堂山内七郷ヲ領スルニ當リ、都那水分神主榮部氏輅田庄下司職ヲ兼帶シ、弘安ノ頃迄兩職退轉ナカリシガ、已講坊保元平治頃ノ領主ト云フ所帶ヲ沽却シ輅田庄他ノ所領トナルニ及ビ遂ニ下司職ヲ解カレ單ニ神主職トナレリ。其ノ後山内七庄散在ノ地トナリ應仁ノ頃ハ當庄南都大乗院ノ領トナリ、輅田氏舊ニ仍リ下司ヲ以テ神主職ヲ帶ビ年貢公事ヲ對捍シ寺家ノ憂ヲナセルコト詳ニ御兵士引付ニ見ユ。同書ニ「輅田分輅田庄付水分神主等……………」又領内ノ武士遞番ニ寺家勤仕ノ次第ヲ記シテ五月上旬輅田重圓トアリ、武藏ハ其ノ子孫ナ

ルベシ。

輅田家系 北氏系ニ 重秀 先祖不詳 重快 重快 重懷 輅田武藏藤原 重宗 泰五郎 重順 輅田四郎 金平

慶長九年於大阪城打死 咲時は花の敷にはあらねども トアルヲ、北吉品記ニ「輅田重順、重懷 武藏大後明應三

ちるにはもれぬ輅田金平 此歌槍ニ添大阪御城中ニ有 重宗 三五郎 四郎 重順 天正 藤松丸 永祿七年ニ 金平 元和元年大阪ニテ打死所持ノ十文字ノ箭今ニ御城ニア

とも體にはもれぬ 聞書覺書ニハ「此村ニ友田殿ト城跡友田武藏藤原宗重ト古記同三五郎宗秀同藤松同

ぬともた金平 四郎同金平ト何通モ有之」ト見ユ、其ノ記スル所異同アリテ世系詳ナラズ。案ズルニ輅田重秀ハ國

民郷士記ニ見エ、重懷・重宗ハ來迎寺記ニ「明應三年六月七日輅田泰五郎宗重ヨリ水田二拾苜寄進字

小北前□別紙證文有慈父尊靈菩提靈名ハ重懷尊儀五輪立 ○水分録尾ニ「輅田庄下町田 トアリテ父子

ノ間ナリ。重懷ノ女 永松 ハ北主計實乘ニ嫁シテ實弘ヲ生ミ、重宗ノ女ハ吉實ニ嫁シテ道吉ヲ生メルコ

ト彼ノ系圖ニ見エタリ。來迎寺記ニ「永正十二年七月輅田庄領分字戸切念佛田壹反……………寄進施

主主計内松永自身滅罪生善ノ爲證文別紙有之」ト以テ證スベシ。北・輅田ノ二氏ハ斯ク姻戚ノ因ミ

アルニヨリ北氏ノ盛ナルニ當リ其ノ幕下トナリ、後、小山戸氏ト共ニ福住氏ノ麾下ニ屬セリ。郷士

記ニ「福住……………與力 小俊、輅田、永谷、白石」ト即チ是、子孫小山戸ニ住シ今森田氏ヲ稱ス。寛政十一年領

主藤堂氏ニ差出セシ舊家控記帳ニ載スル處ハ左ノ如シ。

一高三拾石餘山林貳拾貳所

小山戸村 森田庄右衛門私先祖者

年曆□輅田武藏守宗重ト申□今ノ友田村ニ居城を構天正年中多氣北島之麾下ニシテ北島具教滅

亡ニ及御弟南都東南院之院家夜中ニ來テ當村北吉實輅田宗重兄弟を憑碎忠肝越年隱置近在之同屬

七人等ヨリ送ニ進伊賀長木吉原之館へ□□輅田村ニ郷士ト成テ居住輅田武藏ト申嫡子金平ト申

もの慶長年中秀頼公御味方大坂ニ籠城長刀之柄ニ咲時は花の敷にはあらねとも散にはもれぬ輅田

金平ト辭世ヲ彫刻敵中へ驅入テ討死仕此時輅田家及斷絶候得共弟三五郎當村ニ歸テ北與六と改名

シ田中屋敷□家仕私迄□代ニ罷成是私祖ニ御座候親庄右衛門當村庄家役相勤罷在天明四辰年無足

人奉願安永七年迄相勤申候私儀同年々當村庄屋並無足人相勤罷在候

相川壘 都介野村大字相川ニアリ。大和志ニ「相川壘相川氏據焉」トアリ。氏ハ郷士記ニ「筒井惣慶

下……………相川與市」ト即チ其ノ人ナリ。案ズルニ同記ニ「山邊郡相川與市、相川彦太郎、同彌四

郎宗政、同三河守、輅田重秀 藤原姓先神 主ノ末孫 同重映、同武藏守、藤原重達、同三五郎、同宗順、同觀信

房伏見屋 榮部春元、輅田藤松丸 永祿 年中 同四郎、同金平、榮部春俊」ト見ユ。此記ノ例トシテ同苗ノ間

ニ異苗ノ人名ヲ載スルハ、皆同族タルヲ示セルモノナリ。相川與市、同彦太郎ハ染田天神社藏至徳

四年ノ沽券ニ見ユ、輅田重映ハ輅田重懷ニシテ 映ハ快 相川武藏守ハ輅田重宗ナリ。相川三五郎ハ

聞書覺書ニ所謂三五郎宗秀ニシテ輅田宗順ハ輅田重順ト同人カ。藤松丸、金平ハ亦輅田ヲ稱シ共ニ

輅田系圖ニ見ユ。春元・春俊ハ水分社神主ニシテ亦輅田氏ニ縁故ヲ有セリ。然ラバ相川ハ輅田ト其

ノ祖ヲ同ウシ亦本姓都祁氏ナルベシ。

吐山壘 都介野村大字吐山ニアリ、吐山氏ノ據ル所ナリ。國民郷士記ニ「吐山山城吐山飛驒」大和志

ニ「永正中吐山日向守據」ト即チ是。氏ハ本姓高階ニシテ天武天皇ノ皇子高市王ヨリ出デ、長谷川

氏ト祖ヲ同ウス。伊勢北畠氏ノ幕下タリ。

國民郷士記曰 吐山南忠助 高階姓ニテ長谷川氏也 吐山春明院、同勘解由、同飛驒、同勘左衛門、同七郎右衛

門、同甲岡龜壽 吐山家分レ

聞書覺書曰 吐山村ト云有……吐山勘左衛門飛驒勘解由ナドト代々地侍南帝方ニ而北畠ノ旗

下也平城山城缺上ノ跡有高科氏ニテ參宮不成ト云……

子孫今尙吐山ニ住ミ向井ヲ氏トセリ。家ニ系圖及ビ春明院縁起等ヲ藏ス。

荳原壘 丹波市町大字荳原ニ在リ、荳原氏ノ據ル所ナリ。聞書覺書ニ「荳原村ニ荳原某有亦古城ノ山

モ有」ト即チ是。其ノ出ヅル所ヲ詳ニセズ。應永中ニ實英アリ。

同日 應永二年實英千句ノ卷頭神垣や紅葉重の青和幣 卅二年七月□□同荳原殿 神松の縁にし

るき千秋かな 同三十二年荳原實英應仁二年實英 松青く紅葉やあけのわかき哉文明五年松に葛

まくもや秋の手向哉英勝舊記者所を記ス荳原氏ノ地侍今ニ有

國民郷士記ニ荳原英秀アリ、コレ實英ノ後ナルベシ。

氣原壘 豊原村大字氣原ニアリ、氣原氏之ニ據ル。國民郷士記ニ「氣原山城氣原長門」ト即チ是。其

ノ出ヅル所ヲ詳ニセズ。同記ニ「氣原長門山中宗□」ト見ユ。山中氏ハ筒井諸記 并筒井ニ「山邊郡毛

原村領主山中宗助胤順 筒井氏年號不詳」聞書覺書ニ「廣瀬ニ申傳ルハ地侍二人ニ而古ヘハ領ス一人ハ福村

ト云今ハ南郡ニ岩井九右衛門ト云 ○國民郷士記ニ福村九右衛門見ユ 一人ハ山中ト云同岩井與助ト云何モ伊勢多氣ノ旗

下也」ト云ヘルモノ即チ是。

勝原壘 同村大字勝原ニアリ。國民郷士記ニ「勝原山城勝原肥前」聞書覺書ニ「勝原村ニ勝原肥前ト

云地侍有山城跡有」ト即チ是。肥前ノ事跡詳ナラズ。郷士記ニ勝原清定・勝原定秀ナドアリ、亦同

族ナルベシ。

深野壘 東里村大字深野ニアリ。聞書覺書ニ「深野村下司北森ト云地侍有トモ健成事不知下司カ城山

在所□有 名取ヲ日ノ下ニ見下ス」ト即チ是。下司ハ郷士記ニ下司道意・山本道寛ト見ユルモノト同族ナルベシ。

今深野ニ山本・北森ヲ名乗ルニ舊家アリ、即チ下司北森ノ子孫ニシテ共ニ北畠氏ノ麾下ニ屬セシ

ヲ、主家亡ブルニ及ビ土民トナレルモノト云フ。寛政ノ舊家扣記帳ニ載スル所左ノ如シ。

一 高八石餘當村字城山壹圓

深野村 山 本 金 治

代々當村住居先祖ハ勢州多氣國司晴具目代山本外記ト申ものニ而當村ニ居城を構康曆應永之比ヨ

リ天文年中迄近在を押領シテ在城ス元龜年中織田信長ニ亂入一戰之砲右外記討死ス依之當村之城

斷絶ニ及候尤外記弟刑部ト申もの當村ニ止テ地侍ニ罷成候趣系圖之儀慶長年中燒失仕候由申傳□
寤與相分不申候……………先祖外記ヨリ私迄十三代ニ罷成殿様無足人奉願候年限相知不申候

同村 北森 半兵衛

一高拾壹石餘山林貳十貳ヶ所

代々當村住先祖ハ下司屯ト申ものニ而山本外記一族ニ而御座候多氣北島ヨリ北一字賜因之苗字北
森改延□天正三年迄政郷ヲ親顯迄六代北島家ニ仕弓大將相勤罷有北島家斷絶之砌ヨリ當村ニ歸
地侍○此間脫是祖ニ御座候九代以前半四郎ヨリ民家ニ罷成候……………當村庄屋役並無足人相勤申
候

烟壘 郷士記ニ「烟山城、奥田三河」トアルヲ、大和志ニ「春日城奥田氏據」ト見ユ。舊烟莊ニ春日

村アリ、今波多野村此所カ。奥田氏出ヅル所ヲ詳ニセズ。郷士記ニ「奥田三河守永祿、奥田九郎右衛門、
門、奥田三郎兵衛、奥田左京亮、奥田外記、奥田八郎右衛門元和元年……………與力奥田、烟、吉田、米田、大
西」トアルモ亦事跡詳ナラズ。

別所壘 丹波市町大字別所ニアリ。別所氏コレニ據ル。郷士記ニ「別所平城、別所監物」ト即チ是
氏ハ山田家ノ麾下ナリ。

磯上壘 丹波市町大字石上ニアリ。大和志ニ「井戸若狹守據」ト。井戸氏ノコト添上郡辰市城ノ下ニ
詳ナリ。

舊蹟附墳墓

石上穴穗宮 安康天皇ノ皇居ナリ。帝王編年記ニ「穴穗宮 大和國山邊郡石上左大臣家ノ西南布留川南ノ地是也
○石上左大臣宅ノコト石上神宮社職ノ下ニ見ユ、參

考ス」又岩上布留備考 奥書云享保十三九月重陽ニ「田村者穴穗宮跡而布留宿禰家、司ニ石上神宮祭祠」故
至「今毎年自田村」行「祭式」也」ト。今丹波市町大字田ニ穴穗社ト稱スルアリ。疑ラクハ宮址ニ就
テ祭レルモノナラン。

拾玉集

心すむ限なりけりいそのかみ

ふるき都の有明の月

慈

鎮

石上廣高宮 仁賢天皇ノ皇居ナリ。編年記ニ「廣高宮 大和國山邊郡石上左大臣家ノ北邊田原也
トアレドモ址詳ナラズ。但

シ大和志ニ「廣高宮嘉幡村」トアリ、何ニ據ルヲ知ラズ。

堀越頓宮 續日本紀ニ「天平十二年冬十月壬午。行幸伊勢國……………是日。到山邊郡竹谿村堀越頓宮」
トアルヲ大和志ニ「在「向淵村」ト。未ダ其ノ據ヲ見ズ。案ズルニ竹谿村已廢シ址詳ナラズ。都祁
水分社ヲ延喜四時祭式ニハ竹谿水分ト記セリ。然ラバ竹谿頓宮址ハ當ニ友田ノ邊ニアリシナルベシ。
聞書覺書ニ「頼田村……………今ハ友田ト書ク……………此所ニ廣野有都祁野ト云 今ハ浪 聖武天皇伊勢行幸ノ假

宮跡ト云宮跡有、行幸道ト云道跡有、通路ヲ止東宮野ト云○東ハ頓宮通路繩手ト云竹谷御所ト云宮跡有齋宮水分川祓シ玉所ト云ト。以テ證スベシ。

都祁頓宮 都介野村ノ並松ニアリ。大和志ニ「伊勢齋王、歸京宿于此。事見江家次第。又修理枝村有歸京道之名」ト即チ是。上ニ引ケル聞書覺書參考スベシ。

都介氷室址 福住村大字山田ニアリ。仁德天皇ノ御時額田大中彥皇子開雞野ニ獵シ初メテ氷室ヲ觀ル。大山主ヲ召シ其ノ貯蓄ノ方法ヲ問ヒ遂ニコレヲ朝廷ニ獻ズ。是ヨリ氷室ノ進獻永ク國例トナレリ。

日本書紀曰 仁德天皇六十二年……是歲、額田大中彥皇子萬子開雞。時皇子自山上望之。瞻野中有物、其形如鷹、仍遣使令視、還來之曰、竄也。因喚開雞稻置大山主、問之曰、有、其野中者何審矣、啓之曰、氷室也。皇子曰、其藏如何、亦奚用焉、曰、掘土丈餘、以草蓋其上、敦敷茅荻、取氷以置其上、既經夏月而不泮、其用之、即當熱月、漬水酒以用也。皇子則將來其氷、獻于御所、天皇歡之、自是以後、每當季冬、必藏氷、至春分始散氷也。

其ノ藏氷ノ處ヲ都介氷室ト稱ス。元明天皇都ヲ平城ニ遷シ給フニ及ビ更ニ氷室ヲ春日野ニ置ク、コレヲ春日氷室ト稱ス。平城七朝ノ獻氷ハ蓋シ都介・春日ノ二所ナリシナラン。桓武天皇都ヲ平安ニ遷シ給フヤ氷室ヲ山城葛野郡ニ置ク。是ニ至テ春日ノ氷室廢セラル。春日ノ氷室谷ハ其ノ遺跡ニシテ氷室社ハ即チ其ノ靈ヲ祭リシモノナリ。然レドモ都介ハ氷室ノ根本タリシヲ以テ永ク供進ニ預レリ。

後、近江・丹波・河内ニモ氷室ヲ置カレ、各其ノ時ヲ以テコレヲ獻ゼシム。事延喜式ニ詳ナリ。

凡供御氷者、起四月一日盡九月卅日、其四九日別一駄以八頭爲駄。准二石二斗。五月八月、二駄四頭、六七月三駄。進物所冷析。五八月二頭、六七月四頭、御禮酒并盛所冷析。六七月一頭。凡供中宮氷者、五八月日別四頭、六七月六頭、進物所冷析。五八月二頭、六七月三頭、御禮酒并盛所冷析。

六七月一頭。……凡運氷駄者、以係丁充之。山城國葛野郡德岡氷室一所。一丁輪ニ愛宕郡小野一所。栗柄野一所。土坂一所。賢木原一所。並二丁輪ニ同郡石前一所。一丁輪ニ大和國山邊郡都介一所。六丁輪ニ河内國讚良郡讚良一所。四丁輪ニ近江國志賀郡部花一所。三丁輪ニ丹波國桑田郡池邊一所。五丁輪ニ牽駄丁給食一人日米四合。並五撮。駄別秣稻二把。總計所須、毎年申省請受。

水標幡十二流。各長二尺。新緋帛八尺。幡六尺。緒折二尺。三年一請。元要記曰 風土記云……○此一節氷室社ノ下ニ引ケリ、參照スベシ。風土記裏書云十七代仁德天皇御宇攝津國難波郡開雞氷室也……四十三代元明天皇御宇平城都春日野氷室也或書吉城河水室、奈良京始也五十代

桓武天皇御宇山城國平安城都葛野郡宇多氷室也其後國々處々勸請也。

奈田墓 朝和村大字中山ニアリ、俗ニ殿塚ト稱ス。仁賢天皇ノ皇女手白香姬命ヲ葬ル。註 大正四年刊陵墓要覽ニコレバ奈田陵皇后手白香皇女奈田陵山邊郡朝和村大字中山字西殿塚トアリ。

荒墳 國內到ル處コレアルモ本郡最モ多キニ居レリ。王墓ハ上總ニアリ、大墓ハ山口ニアリ、荳生山邊郡

中山最モ多ク累々相望ミ俗ニ千塚ト稱ス。成願寺・兵庫・竹内・勾田等多少ノ荒墟ヲ有ス。發見スル所ノ遺物ニ依ルニ皆王侯貴人ノ墳墓ナルベキモ今之ヲ徵スベキモノナシ。

式上郡

神武天皇吉野ヨリ宇陀ニ入り忍坂ヲ過ギ磯城邑ニ到リ給フヤ土曾兄磯城・弟磯城ナルモノコレニ據リ、弟磯城已ニ歸順セシモ兄磯城頑迷ニシテ來降セズ。乃チ之ヲ殺シ行凶賊ヲ誅シ遂ニ國中ヲ平定シ帝位ニ即キ給フ。其ノ二年功ヲ論ジ賞ヲ行フニ方リ、弟磯城ヲ縣主ニ拜シ之ヲ治メシム。安寧天皇ノ世ニ縣主葉江アリ、懿德天皇ノ時ニ縣主太眞若彦アリ、孝元天皇ノ朝ニ縣主太目アリ、此等皆弟磯城ノ後ニシテ其ノ職ヲ襲ヒシモノナルベシ。大化中縣邑莊田ヲ收メ新ニ國縣ヲ立ツルニ及ビ、東ハ宇陀・山邊、南ハ十市、西ハ廣瀬・平群、北ハ山邊ニ接スル域内十四郷ヲ以テ二郡ヲ置キ、其ノ辟田・下野・神戸・大市・大神・上市・長谷・恩坂ノ八郷ヲ以テ磯城上郡トシ、其ノ他ノ六郷ヲ磯城下郡トシ、磯字ヲ省キ城上下或ハ式上下ニ作レリトナシ、郡郷司ヲシテ之ヲ治メシム。爾後ノ沿革詳ナラズ。降ツテ足利氏ノ晩世ニ郡中ノ豪族皆筒井氏ノ幕下ニ屬セリ。筒井譜記ニ「城上郡馬上五十騎、雜兵五百二十人文祿御改村數五十ヶ村、高二萬八百五十二石餘」ト即チ是ナリ。徳川氏ニ至リ織田氏ヲ芝、柳本各一萬石ニ分封シ、幕府ノ直領藤堂氏ノ采地等亦其ノ間ニ錯ハル。元祿十五年ノ大和國郷帳ニ據リ各村高及ビ領主等ヲ記スレバ左ノ如シ。

一高六百貳拾石七斗四升九合

織田播磨守

一高七百九拾六石四斗九升

同

内百九十一石四斗九升 織田肥前守

一高四百九拾八石貳斗四升貳合

織田肥前守

一高三百五拾石八斗貳升

織田播磨守

一高五百三拾九石壹斗七升五合

同

一高三百五拾參石九升

藤堂和泉守

一高千二百三石五斗六升貳合

織田播磨守

一高二百七拾六石七斗五升七合五勺

同

一高三百七拾三石三斗五升七合五勺

同

内百石 釜口寺領

一高二百六拾九石六斗七升六合

同

一高二百六拾八石四斗六升

同

一高三百五拾二石五斗七升

藤堂和泉守

一高三百七石四斗八升

同

大泉村

大西村

江包村

豊前村

東田村

大豆越村

柳本村

下長岡村

上長岡村

北別所村

南別所村

太田村

草川村

一高九百八拾四石五斗七升

織田肥前守

一高七百二拾二石二斗四升六合

織田播磨守

一高二百八拾二石七斗八升二合

織田肥前守

一高三百九石六斗三升二合

藤堂和泉守

一高四百八十八石二斗一升四合

幕府直領

一高百拾九石八斗六升二合

同

一高六百貳拾六石八斗貳升

織田肥前守

一高二百九石六斗四升四合

幕府直領

一高二百四拾四石五斗貳升

同

一高二百拾六石一斗八升

織田播磨守

一高三百貳拾石九斗

織田肥前守

一高二百七拾五石四斗七升五合

同

一高三百七拾七石貳斗三升七合

織田播磨守

一高三百八拾一石六斗壹升六合

幕府直領

一高四百拾二石九斗六升

藤堂和泉守

芝ノ庄村

上ノ庄村

戒重村

松ノ本村

三輪村

藥師堂村

箸中村

辻村

澁谷村

初利村

穴師村

備後村

茅原村

馬場村

川合村

ナス。和名抄ニ「長谷郷」惣國風土記ニ「長谷郷、土地下肥、民用少、古老傳云此地兩山溪水相夾、而谷間長故云長谷」ト即チ是「ハツセ」ノ原義詳ナラズ、地勢ヲ以テ長谷ノ文字ヲ用フ。郷已廢シ長谷村ヲ存セシガ、明治二十一年初瀬以下六村ヲ以テ初瀬町ト稱ス。

萬葉集

隱口の泊瀬少國に妻しあれば

石は履めども猶ぞ來にける

卷十三

纏向村 垂仁天皇ノ宮城ヲ纏向珠城宮ト稱シ、景行天皇ノ宮城ヲ纏向日代宮ト稱ス。宮址相接近セリ。後世纏向ノ稱ハ山河及ビ社名ニ存シ之ヲ村里ニ亡ヒシガ、明治二十一年穴師以下ノ十村ヲ以テ一村トナシ舊稱ニ因リ纏向ト名ヅク。

磯城郡 附磯城島郷 紀元前ニ磯城邑アリ、土倉兄磯城・弟磯城コレニ據ル。崇神天皇ノ皇居ヲ磯城瑞籬宮ト稱シ址金屋ニアリ、欽明天皇ノ皇居ヲ磯城金刺宮ト稱シ址同處ノ山崎ニアリ。垂仁天皇紀ニ所謂磯城嚴櫃之本ハ古事記ニ三諸之嚴櫃之本ニ作り、敷島之高圓山ハ慈恩寺ノ南龍谷ニアリ、忍阪ノ田畝ニモ亦「シキシマ」ト字スル所アリ、以テ古、磯城ト稱スル地方ノ甚ダ濶カリシヲ知ルベシ。而シテ中世磯城島郷ト稱スル一郷アリ、蓋シ今ノ三輪・金屋ノ東南慈恩寺・龍谷・忍阪ニ互レル間ノ名稱ナルベシ。太子傳玉林抄ニ「シキシ島ノ事異説アレトモ皆實説ヲ知ラス彼處ノ人云 龍圓房シキ

島トテ長谷へ參レハ山崎ニ小堂アリ 今ハ武家入時タツス 惣シテシキシ島トテ一郷ノ處也今ハアレテナシ然レトモ慈恩寺ノ管領ナル故ニ三輪ノ宮本ニ神役ヲスルナリ金刺宮ハ河ノ向ニ竹原アリ其内ニ小社アリ此欽明天皇内裏ノ跡也」永祿二年南都般若寺收納帳 宇陀郡榛原菅生氏藏 ニ「一段一石五斗代八斗五升定ヲツサカ助二郎」ト以テ證スベシ。明治二十一年粟殿以下六村ヲ一村トナシ名ヅクルニ城島ヲ以テス。城島ハ即チ磯城島ナリ。

註 昭和十七年四月櫻井町ニ併合サル。

柳本村 惣國風土記ニ「柳本郷土地中肥、民用不少有神號大和明神所祭大國魂命也」ト見ユ。中世南都大乗院領トナリ楊木庄ト稱ス。同院ニ建長四年注進狀ヲ藏ス、今内閣藏 錄シテ參考ニ供ス。注進 楊本御莊島數并斗代事

合

高十三町五段二百七十歩内除

二段	藥興寺	御名内	熊丸名安用名	一段冊	佛藏
六段半三十内	半年荒	御名内	分大豆六升二合八勺五才		
一段六十ト	公文給	御名内	順西名	四段大	貞菊 行萬
式上郡					三七七

四段六十ト 藥興寺免 重松名内

六段六十ト 年荒 恒末名内

一段百七十ト 年荒 慶勢

小 荒 是松名内

六段小 所當不成申 修善坊

已上二町八段八十步

定島十町七段大

百五十ト分大豆二升四合三勺麥同

大豆四斗二升五合二勺 淨實半名 一段半 京實

大豆八升七合 末重名 二段 善密

大豆一斗一升六合 國貞名 麥同 重松名

大豆三斗四合五勺 五段九十トサタ分行 貞

今四段六十ト不審

大豆二斗七升七勺

爲末名 一段三百步 京實

大豆一斗六合四勺

末永名 四段サタ分 賴賢

大豆二斗三升二合

是松名 六段小卅サタ分 奥田名主

大豆三斗七升二合二勺

小院名 七段小サタ分 賴賢

大豆六斗九升三合

村早名 九十ト 時宗

大豆一升四合六勺

有恒名 大豆一斗二升五合七勺 秀行 成遠

末正名 二段半 助永

大豆一斗四升五合

國末名 二段六十ト 友清

大豆一斗二升五合七勺 末元名四分一 一段 佛藏

大豆五升八合 利永名 三百步 爲遠

大豆四升八合四勺 依貞名 一段六十ト 千祐

大豆六升七合二勺 安永名 一段半 助行 萬遠

大豆八升七合 利國名 一町一段三百四十ト 貞萬

大豆五升八合 友貞名 二段サタ 行貞

大豆一斗一升六合 良義名 六段半サタ分 慶恩

式上郡

延貞名 一段大 新末 住包

大豆九升六合七勺 兼正名 一段半 爲遠

大豆八升七合 五郎名 一町二段二百步 友貞 貞清

大豆七斗二升八合三勺 武次名 一段三百步 爲末

大豆一斗六合四勺 國正名 一段六十步 貞萬

大豆六升七合七勺 時末名 一段 則行

大豆三升八合七勺 行命名 五段大 京福

大豆三斗二升八合七勺 恒末名 三段殘ハ荒 行友

三七九

大豆三斗七升七合	麥同	上房名	一段	行遠	大豆一斗七升四合	麥同	又一斗七升四合本ハ荒今ハ新開分三段
大豆一斗五升四合七勺	麥同	上恒名	一段	増國	賴禪	大豆九升六合七勺	麥同
大豆五升八合	麥同	武貞名	三百三十ト武卅	爲遠	正文	一段大	京福
大豆五升四合八勺	麥同	恒武名	四段大ヘツフ	慶恩	良勝	半	釜口興福
大豆二斗七升一合	麥同	武末名	大	末清	安國	一段或ハ一段百十ト良	佛
已上大豆六石二斗三升三合三勺	加交分定						
麥同數也	段別五升八合						
							八合ハ交分也

建長四年壬子十月三日

ト見ユ。某名ハ島ノ字ニシテ、段數ノ下ニ記名スルハ即チ所謂其ノ作主人ナリ。藥興寺已廢シ址詳ナラザルモ必ズ莊内ニアリシナラン。大和志ニ「柳本廢寺柳本村唯存南圓堂北圓堂西安堂之地名」

ト、疑ラクハ同處カ。而シテ中世柳本氏ココニ住シ其ノ莊官タリシガ戰國ニ至リ壘ヲ城キ之ニ據ル。事、城壘ノ部ニ詳ナリ。元和以後織田氏ノ治所タリシガ、明治二十一年柳本・澁谷ヲ一村トナシ柳本村ト稱ス。

註 大正十二年一月一日町制施行。

茅原 織田村ノ大字ニ屬ス。崇神天皇ノ御宇年穀登ラズ、疫亦行ハレ人民多ク死ス。天皇群神ヲ神淺

茅原ニ會シ、トシテ其ノ意ヲ問ヒ給ヘルコト國史ニ見ユ。大和志ニ之ヲ笠山ノ下ナリト云フモ信ジ難シ。此時皇居ハ磯城瑞籬宮ニアリテ宮址茅原ト相距ル遠カラザレバ、所謂神淺茅原ハ今ノ茅原ニシテ、神樂歌小前ナル「加左アサの朝茅アサが原」トハ自ラ其ノ處ヲ異ニセルモノナルベシ。

穴師 穴師舊神主齋部氏記○全文後ノ社ニ「穴師大兵主神社……社傳云下社天細女命也神體著鈴之矛也……故云兵主神亦天細女命始作笛吹之其神鎮座之地仍云穴師」ト、穴師ノ名義自ラ明ナリ。垂仁天皇ノ世ニ大倭神地ヲ穴磯邑ニ定メシコト日本書紀ニ見ユ。後世穴師ノ神職ニ大倭氏アルハ蓋シココニ起因スルモノカ。惣國風土記ニ「穴師郷、土地中肥、民用不尠是垂仁天皇宮居之地也」ト、之ニ據レバ中世穴師ヲ以テ一郷トナセシト見ユ。郷已廢シ纏向村ノ大字ニ穴師ヲ在ス。

忍坂 神武天皇菟田ヨリココニ進ミ大室ヲ作り八十梟帥ヲ誅シ給フ。其ノ址「オホムロ」或ハ「オアト」字シ今尙存セリ。允恭天皇ノ皇后忍坂大中姬命ハ此處ノ産ニシテ、今村中ニ誕生井ト稱スルアリ、

是其ノ舊跡ナリ。火明命ノ子孫亦ココニ住シ、因テ忍坂部一ニ刑部又忍壁ニ作ルヲ氏トナス、姓氏錄ニ「忍坂連、大炊刑部造等」即チ是。大化中此地方ヲ立テテ一郷トナス。和名抄ニ「恩坂郷」惣國風土記ニ「忍坂郷土地中下、民用少」ト見ユ。已廢シ城島村(現櫻井町)ニ忍坂ノ大字ヲ存ス。

註 忍坂、今忍阪ト書キ「オッサカ」ト訓ズ。

芝 シバ モト岩田ト稱ス、惣國風土記ニ「岩田郷、土地中肥、民用不少」ト即チ是。案ズルニ大乘院領段

錢日記ニ「院入庄千菊 正長二年十二貫八百文」 御兵士引付ニ「十市八田分院入庄、小大田庄下司 尋尊僧正應仁二年十月二日 記

ニ乃貢ノ徵使ヲ分遣スル條ニ「千菊九分岩田院入庄」トアレバ、當時大乘院領トナリテ院入莊トモ稱セシカ。徳川氏ニ至リ織田氏ココニ封ジ之ヲ芝村藩ト稱ス。廣大和名勝志ニ芝ノ義ヲ解シテ「或云芝村舊名岩田、寛文ノ頃マテハ艾樹ト云ヒシト見ヘタリ村長ヨリ官ニ書上シ古文書ヲ見ルニ艾樹

ト草シタルヲ見誤リ芝村ト讀ミシヨリ今芝村ト改リシヨシ……元祿年中印行ノ國花萬葉記ヲ見ルニ芝樹ノ領主ト云フモノ有是其一證據」ト云ヘリ。芝ハ艾ノ字ノ誤ナルベシ。然レドモ寛文四年三輪神職高宮越兩家訴訟覺書ニ岩田村ト記シ未ダ芝村ノ公稱ナク、又元祿十五年ノ大和國郷帳ニモ岩田村トアレバ、其ノ公稱トナリシハ元祿十五年以後ニ係レルモノナラン。芝、今織田村ノ大字ニ屬ス。

初利 ハツリ 享德二年大乘院領段錢日記ニ「羽津里井莊下同井上若狹、給主御洗、郡使千菊ト見エ、往古ハ羽津里井ト稱セリ。

井上若狹ハ尋尊僧正長祿四年正月十一日 記ニ「井上若狹公被參神妙旨仰之」又御兵士引付ニ「井上若狹公トアレドモ、其ノ何人ニシテ何處ニ住スルヲ詳ニセズ。但シ同引付ニ「井上分、羽津里莊下司、九

條庄御米二十石福智家押領 河口莊内□地年貢」ト見ユレバ九條河口ノ莊官ヲモ兼帶シ、且ツ羽津里井ハ或ハ羽津里トモ稱セシヲ知ルベシ。今初利ニ作り其ノ地纏向村ニ屬ス。
註 初利ハ備後ト合シ纏向村大字卷野内ト稱ス。

別所 ワカ 南北二方アリ共ニ柳本町ニ隸ス。建長四年楊本莊注進狀ニ「恒武名、四段ヘツフ慶恩」ト記セ

ル「ヘツフ」ハ別府ノ假字ニシテ、古、國郡司ノ次官別ニ邸ヲ構ヘ政務ヲ執ル所ヲ謂ヒ即チ別所ト同義ナリ。疑ラクハモト別府ト稱セシヲ後改メ名ヅケシカ。尋尊僧正應仁二年十月二日 記ニ「御童子千菊九分城上郡楊本庄但別所庄、給主定使相催」トアリ、當時楊本ノ莊内ニ別所庄ト稱スルモノアリシト見ユ。

芹井 セナ 上之郷村ノ大字ニ屬ス。古、芹井氏コレニ居ル。本姓物部氏ニシテ天孫降臨ニ供奉セシ二十五部曲ノ其ノ一ナル芹井物部ノ苗裔ナリト云フ、國民郷士記ニ「城上郡芹井治部芹井物部、天孫降臨二十五部ノ人也ト即

是。芹井物語ノ事舊事記ニ見ユ。

大市郷 オホイチ 和名抄ニ見ユ。崇神天皇紀ニ「倭迹々姫命薨乃葬於大市……故時人號其墓謂之箸墓也」ト、箸墓ハ箸中ニアリ。又「倭大神著穂積臣大水口宿禰……因以命淳名城稚姫命定神地穴磯邑祠於大市長岡岬」ト見ユル大市長岡岬ハ大倭注進狀ニ今狹井社地是也ト註セリ。以テ其ノ

方城ヲ概知スベシ。蓋シ大市ト稱スルハ今ノ柳本ヨリ穴師・箸中ニ互リ大神郷ニ接スル方面ヲ以テ一郷トナセルモノニ似タリ。已廢シ後世大乘院領ニ大市莊ト稱スルアリ、是其ノ名殘ナルベシ。同院領段錢日記ニ「大市莊下司普賢院、給主東北院、千菊」又尋尊僧正寛正二年三月二十七日記ニ「當門跡領大市莊去年之定事公事物以下無故令無沙汰之間舊冬百姓沙汰人等住屋少々破却了」ト見ユ。下司職普賢院ハ釜口山寺ナルベク、大市今其ノ名稱ヲ亡ヘリ。

上市郷 和名抄ニ見ユ。已廢ス。大和志ニ「存金屋村」ト、然ラバ市ハ海石榴市ニ因レルナラン。海石榴市ハ舊蹟ノ部ニ詳ナリ。

辟田郷 同抄ニ見ユ。姓氏錄大和譜ニ「辟田首任那國主都奴加阿羅志等之後也」トアルハココニ取レル氏ナルベシ。已廢シ其ノ處ヲ詳ニセズ。大和志ニ「方廢東田村存」ト云ヘルモ據ナシ。

下野郷 同抄ニ見ユルモ其ノ處ヲ詳ニセズ。

神戸郷 同上。

小大田莊 大乘院領段錢日記ニ見ユ。尋尊僧正應仁二年十月日記ニ徵貢使分遣ノ事ヲ記シ「千菊九テ微名使ノ分中小大田庄」ト云ヒ、又十一月十七日ノ記ニ「小大田庄反數爲催促田數注進之了」箸中三段長谷寺定使田千松小川法師給四段釜口管絃田九反タ一段釜口地藏講田二段長谷川新樂師寺領一町九段給主田、九段三輪明神御寄進合三町八反」トアレバ、往時太田村近傍箸中地方ニ立テラレタル莊園ナリ。今其ノ名稱ヲ亡ヒシモ太田ハ纏向村ノ大字ニ存セリ。

出雲莊 初瀬町大字出雲ノ地ニアラズ、今ノ大西・東田地方ニ於ケル莊名ニシテ亦大乘院領ニ屬ス。

院ニ貞和二年々貢目錄アリ、今内閣文庫藏錄シテ參考ニ供ス。

貞和二年四月 日

合

重國名	一丁二反三百步	分米九石四斗八升八合八勺
國時名	一丁四反百九十步	分米十一石一斗一升八合三勺
久國名	一丁三反	分米七石八斗二升六勺
國久名	一丁一反三百四十步	分米七石六升七勺
助光名	一丁二反	分米八石二斗升九合一勺
助安名	一丁二反	分米八石六斗三合二勺
貞安名	一丁四反	分米十石六斗八升二合
助國名	一丁反	分米七石四斗四升二合四勺
貞元名	一丁一反	分米八石二斗六升六合五勺
貞國名	一丁二反	分米七石四斗三合三勺

式上郡

國 □ 名 一丁二反 分米七石七斗七升五合
 貞 次 名 一丁反大 分米六石七斗七升二合
 國 宗 名 一丁反半 分米七石 虫食
 八 坪 御 佃 一丁 分米八石
 廻 佃 五反 分米四石

已上田數十七町九反十步 分米合百二十石

尋尊僧正 寛正三年八月十日記ニ當莊ノ事ヲ記シテ「出雲莊之内點札分注進之、西下司方名田一 二反、ケンコ、三郎 一反、ニシトノ、マラタヒカイ、ハレラ、一反、次郎、一反、サコノ四郎、一反、大西、コハレノ、二反、西トノ、一、一反、サコノ四郎、一反、又四郎、一反、道サイ、一反、トウ太郎、トアリ、「ヒカイ」楡垣ニテ式、「大イツミ」大ナ「大西」「ヒカイタ」東ハ今尙村里ニ存セリ、亦以テ其ノ初瀬ノ出雲ニアラザルヲ證スベシ、御兵士引付ニ「森屋一黨分、出雲莊御米内十三石……」トアレバ、當時城下郡森屋黨ノ支配所タリシナリ。今出雲ノ名稱ヲ亡フ。

山 川

三輪山 三輪ノ東ニアリ。御室山・眞穂御諸山 御室ハ大物主神ノ神籬ニ因ミ、眞穂ハ秀ノ古語ニシテ即チ山ノ神南備山・神岳 出雲國造神賀詞ニ大御和乃神奈備ト見エ、神奈備ハ神地ノ古語ナリ。神岳ハ萬葉集ニ神岳に登リて、卷三トア、神體山・御山等ノ別名ヲ有シ古來著名ノ山ナリ。彼ノ下毛氏ノ祖御諸別命ノ名モ亦ココニ取レルモノナリト云フ。三輪ノ名義ハ古事記ニ

陶津耳命之女。活玉依毘賣。其容姿端正。於是有神壯夫。其形姿威儀。於時無比。夜半之時。倏忽到來。故相感。其婚供住之間。未經幾時。其美人妊身。爾父母恠其妊身之事。問其女曰。汝者自姪。無夫。何由妊身乎。答曰。有麗美壯夫。不知其姓名。每夕到來。供住之間。自然懷妊。是以父母。欲知其人。誨其女曰。以赤土散床前。以閉蘇紡麻貫針。刺其衣。故如教而。且時見者。所著針麻者。自戶之鉤穴控通而出。唯遺麻者。三勾耳爾。即知自鉤穴出之狀。而從糸尋行者。至美和山而。留神社。故知其神子。故因其麻之三勾遺而。名其地。謂美和也。

ト見エ、即チ三勾ノ謂ナリト云フ。此事、姓氏錄・土佐風土記等ニモ見エテ人口ニ膾炙スル所ナレドモ、神代卷舊事紀ニ據ルニ陶津耳ハ和泉ノ茅渟縣陶邑ノ人ニシテ即チ彼處ニ於ケル事跡ナリ。陶